

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十四年二月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷一〇一七号



日川協加盟

No. 1017

二月号

第二回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

このたび川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者(各題二句 共選)

課題吟

「ひらく」

「雫石隆子(川柳宮城野社)

「旅」

「西出楓楽(川柳塔社)

雑詠

「田中新司(川柳塔社)

投句要領

規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料

一〇〇〇円(切手は不可)

投句締切

平成二十四年三月二十日(月) 消印有効

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇一

川柳塔社 誌上大会係宛

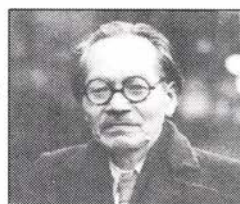
TEL/FAX (〇六) 六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題秀句に賞呈 発表は川柳塔誌五月号誌上川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



麻生路郎
読本

A5版

514頁

頒価 三〇〇〇円

(郵送料共)

目次

麻生路郎アルバム

麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」

麻生路郎文集・麻生路郎語録

麻生路郎物語(東野大八)

麻生路郎の人と作品

麻生路郎作品「福寿草」

麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜

麻生路郎・葎乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201号

電話

06-6779-3490

川柳塔社

振替

〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳街道

小島 蘭 幸

昨年の12月10日、11日、鳥取市鹿野町で開催された

第31回川柳塔鹿野みか月川柳大会に、妻と二人で出席しました。毎年出席していると、嗚呼今年も鹿野へ元氣に出席する事が出来たと、温泉でひとり感慨にひたるようになりました。そして故人となられた西尾葉先生、橋高薫風先生、柳友の皆様をしみじみと偲ぶのです。

早朝、作句をするために一階の椅子席へ行くと、いつも美味しそうに煙草を吸われていた林荒介さん、卒寿を過ぎて尚、矍鑠としてリュックを背負って出席されていた黒川紫香先生、大きな虹と一緒に見た沖浜正宏さん等々、思い出のシーンが走馬灯のように浮かんでくるのです。とってもゆっくり出来る山紫苑の温泉は、一年間頑張ってきた心の癒しと思い出にひたる場所なのです。

大会当日は、少し早起きをして鹿野小学校の前にある川柳街道を散策しました。川柳街道には句木九十三基、校庭には句碑が四基あります。

三日月があんなに光るのも勇氣
校門を出ると一年生走る

薫風
紫香

雨風雪に耐えてすくくと立っている句木、句碑を見ていると歳月の重さがひしひしと伝わってきて、身体が熱くなりました。

川柳街道を歩く歳月を歩く

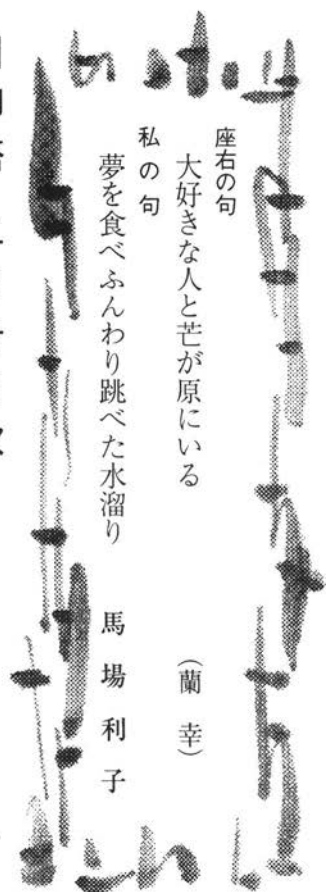
蘭幸

鹿野へは毎年、車で出席しているのですが、今回は少し遠回りをして、弓削駅前にある麻生路郎先生の句碑にもお会いして来ました。久し振りに見る先生の句碑は、尾道千光寺公園にあるどっしりとした比翼の句碑と違って、瘦身の路郎先生がすうっと立っているといった趣がありました。

俺に似よおれに似るなと子をおもい 路郎

私にとって今回の鹿野行きは、柳友との交流プラスたくさん句碑、句木に出会えた、とても有意義な二日間でした。尚、句木の作品は土橋螢さんの書によるものです。

螢さんは、五七五を書く「晴耕雨読展」を3月4日、11日、鳥取市のギャラリー「あんどろ」、3月12日、18日、鹿野城下「しかの心」で開催されます。



座右の句

大好きな人と芒が原にいる

(蘭 幸)

私の句

夢を食べふんわり跳べた水溜り

馬場 利子

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「三 春」

■巻頭言 川柳街道

信仰を持つて

小島 蘭 幸……(1)

前たもつ……(2)

川柳塔(同人吟)

小島 蘭 幸 選……(4)

川柳塔の川柳讃歌 (86)

木津川 計……(45)

自選集

……(46)

温故知新

……(49)

水煙抄

川上大輪選……(50)

中島生々庵句抄

……(71)

誹風柳多留——一篇研究 78

……(72)

愛染帖

新家完司選……(74)

檸檬抄「ゆがむ」

富士慕情・池 森子共選……(78)

持田多輝子さんを偲ぶ

伊藤 玲子……(81)

信仰を持つて

前 たもつ

教会でまだキリストに会ってない

この句は一九九四(平成6)年四月、最初のNHK川柳教室で薫風先生に丸をいただいたものです。

その時から二十年近くたった昨年の八月二十日、キリストに会うことができました。そして昨年の二月二十七日バプテスマ(洗礼)を受けクリスチャンになりました。

それから私の生活が一変しました。日曜日は必ず礼拝に出席することになりました。

日々の日課に聖書を読むことを自分に課せ、解説書を頼りに毎日二、三章ぐらいのペースで読み、約半分ほど読みました。

クリスチャンの生活は「神の国と義を第一に求める」ことであるので、一日一日を大切に生きることに努めました。

この一年余りで、牧師のメッセージや聖書のみことばから学んだことは、これまでの人生八十年にも、それ以上に匹敵する大きなものでした。

一路集 「冷たい」

「粒」

「がたがた」

松本文子選 …… (82)

初歩教室

「潔い」

栗田久子選 …… (82)

竹信照彦選 …… (83)

秀句鑑賞

「同人吟」

鈴木公弘 …… (84)

三宅保州 …… (86)

英語の Senryu

②

安土理恵 …… (88)

吉村侑久代 …… (89)

『麻生路郎読本』余滴

(7)

榎原道夫 …… (90)

新家完司 …… (94)

せんりゅう飛行船

⑭

松永浩一 …… (95)

井上照子 …… (96)

本所深川を歩く

(一)

松永浩一 …… (95)

井上照子 …… (96)

■エッセー『川柳は義妹の贈り物』

井上照子 …… (96)

一月本社句会 …… (98)

各地柳壇(佳句地十選/久保田千代) …… (102)

二月各地句会案内 …… (116)

柳界展望 …… (118)

■編集後記(ひとこと/古久保和子) …… (120)

朱夏・まつお …… (120)

座右の句

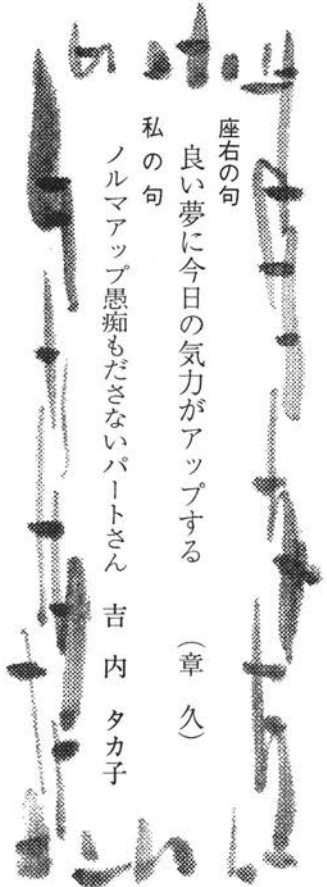
良い夢に今日の氣力がアップする

(章久)

私の句

ノルマアップ愚痴もたさないパートさん

吉内 タカ子



「心を尽して主に拠り頼め、自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる」(旧約聖書箴言三章五・六)

これまででは、万物の創造主である神に生かされていることなど眼中になく、自分の力で生き、頑張れば何んでもできるものと思っていたが、神の前には人間の力はどうも小さきものであるかを知りました。今は主の前で力のない自分を助けて下さいと祈ることが日課です。

日野原重明さんが朝日新聞、100歳・私の証あるがま、行く―「負のサバイバー」(生き残り・生還者)の救済―の中で、東日本大震災をとりあげておられます。

「今回のような未曾有の災害のサバイバーに対しては、何か宗教的な救いの手がさしのべられるのを待つしかないのかとも思うのです。心が救済されるためには、霊的に、スピリチュアルに、自らの許しを祈ることが残された道なのではないでしょうか」と。

キリストの最後のゲッセマネの祈りと共に祈りの重みが私の心から離れないのです。

生かされて傘寿の春に手を合わせる



小島蘭幸選

大阪市 谷口 義

閑節を外し昔の歌うたう
冷静になると大阪弁になる
取外し出来る正義感なら持つ
素麺が長い休暇を取っている
見て見ぬ振りをしながら林檎剥いている
うかうかと生きて院外処方箋

堺市 柿花和夫

政治にほしい盲導犬の心
葬儀屋のチラシ抵抗なしに見る
ぶぶ漬をたつぷり食べて粘る客
昭和史の霧晴れぬまま開戦忌
世界不況に読み返してる資本論
休耕地にせめてレンゲの種を蒔く

河内長野市 山岡 富美子

米袋の重さは生きてゆく重さ
病状が進むものぐさ症候群
一言が多くて低気圧を呼ぶ

八方美人やっているから草臥れる
箒持つわたしに挑む枯葉舞う
黙祷の続いた年も暮れてゆく

松山市 高橋 宏臣

三面鏡己の時価が映らない
標本の蝶は死ぬこと許されず
もういいかい何時まで続くかごめの輪
振り向けば向かい風さえなつかしく
見るものはみな面白い井の蛙
私だけしゃべる二月の喫茶店

堺市 村上 玄也

朽ちながら花咲かさんとする古木
惚ける前に伝えるものは伝えとこ
勲章はないがブライドだけはあ
天変地異地球最後の日が近い
聞き返すとともにちんかんになる会話
雑音を遮る社長室のドア

弘前市 高瀬霜石

ターニングポイントだった平手打ち
お願いがあると云われて着る鎧

キリギリス無口な人に憧れる

晩酌の前に手紙を書きあげる

頬杖をしている魅力的なひと

宝クジ当らないから今がある

堺市 楽原道夫

鉛筆で鉛筆を描くなつかしさ

寝転んで見てる電線青い空

恋をしているから雨の運動場

もつと愛されたくて両手で挽ぐリング

電線の鳥と静かに暮れてゆく

リノリウムの床を滑っていく日本

鳥取市 森山盛桜

掛け違いした人生も乙なもの

失言はするが無役に救われる

息継ぎが出来ない今の流行り歌

突風に浮くそれだけの命かな

俺という木石磨き始めるか

善悪を無理矢理分ける塀と壁

東かがわ市 川崎ひかり

迷いから覚めると後はケセラセラ

定退後尻尾だんだん退化する

新雪に華やく声の通学路

安らぎが胸に満ちてく写経筆

リストラの首にためらい傷はない

終章は収支決算ゼロになる

松山市 宮尾みのり

どんぐりが並びよく食べよく笑う

陽が沈む位置が動いて冬に入る

絆と書く大震災を忘れまじ

不意打ちに遇って小欲がぼろり出る

アルバムは要らぬ一枚あればいい

くすぐった程度で落ちた奴唄

尼崎市 山田耕治

高速道わがふる里を突き抜ける

虐待の記事今日はないほっとする

夢をみるスイッチ入れて眠ります

マニアルにない気配りに礼を言う

ゼロ歳の微笑モナリザにも負けぬ

結論は晴 雨垂れが残る

吹田市 山本希久子

すつきりと欲をたたんで喜寿の春

道草をしながら喜寿にたどり着く

てにをはを間違えている損してる

パソコンで医者と心がつなげない

あるんです病名のない病気

私に足りぬ辛抱と骨密度

松江市 川 本 畔

もう少し真面目さ欲しい筆の先
非常口旨い話をぶら下げる
生卵でのひらにのるいとしさよ
寄りそってきたしあわせの目玉焼
染めあがるときが本当の私です
枯葉舞いイヴモンタンを呼び寄せる

松山市 古手川 光

もつともつと今度こそはで蟻地獄
亦ひとつ出来なくなつて冬になる
溜め息が聞こえはしない永田町
カタカナの葉ばかりでややこしい
テレビ見て妻は立派な評論家
鬼嗤う鬼打ち豆の自給率

羽曳野市 宇都宮 ちづる

本棚の源氏読む気にやつとなる
手編み習って不器用さ知る六十路
特上の笑顔でやつてくる一歳
新しい手帳に増えた趣味がある
絵手紙の札状にするラフランス
頑張ります掃除お節に年賀状

藤井寺市 鴨 谷 瑠美子

銀杏の葉拾う恋しているのかな
髪も未練も断ち切るまでを華として
逢いたいと言えば理由を問うてくる

手厳しい意見しばらく温める
ようこそ冬 お酒も夢も人肌に
ひたむきなわたし見つめている鏡

芦屋市 黒 田 能 子

せつかくの決心ひと言で鈍る
裏口に内緒の門が開けてある
正体のつかみどころのない笑顔
プライドが高くて白を押し通す
風向きを信じていますシャボン玉
償っていますやさしくしています

榎原市 安 土 理 恵

女の唇白菜漬を今日仕込む
コーヒーブレイク師走の街の真ん中で
意地張って今夜も午前様になる
柊よ哀しいことが続きます
脱ぎ切つて眠るだけです冬木立
幕引きはそつと誰にも知られずに

藤井寺市 鈴 木 いさお

デフォルメの文字が生み出すファンタジー
睨み合うポインセチアとシクラメン
生き甲斐をひょいと見つけた左遷の地
ストレスを感じませんか僕と居て
享年八十さほど長寿と思えない
お互いの悩み交換しませんか

高槻市 片山 かずお

図書館へ行くのですねと靴が言う
角を少し残して丸くなつてやる

よく聞けば自慢話という訓示

妻が家に居る日が僕のお出かけ日

男なら用件だけで済む電話

三回忌まだ寂しさを楽しめぬ

米子市 吉田 陽子

盗られても気付かないほど柿たわわ

散り終えてすがすがしくもある紅葉

カレンダーめくつてバリを散歩する

冬枯れの街の花屋は別世界

標識の通りに曲がりなお不安

ため息でつながっている昨日今日

奈良県 渡辺 富子

大阪のパワー漲る都構想

想い出のすすけたところ紅を足す

やあやあと昭和にかえる酒となる

にっこりと男の嘘を裏返す

みぞおちの辺りで点滅する怒り

長生きの辛さ敵父の紙おしめ

枚方市 伊達 郁夫

故郷を捨てた男に影がない

杖ついて晶子の詩に酔っている

友情の見舞のバラに刺がない

黍畑祈る形で海を向く

雑巾の前の姿を聞いてやる

香水をつけた自分は匂わない

藤井寺市 高田 美代子

温かいものが馳走で冬の膳

几帳面理路整然を折りたたむ

バザールへ腕捲りした日は昔

ほっこりと玉露味わう独りいて

日溜りに正月肥りした雀

何もかも胸に納めてきた桜

豊中市 藤井 則彦

真つ直ぐに生きたと胸を張る遺影

最後かと思うて嗅いだ蘭奢待

相談に乗ってやろうか迷い猫

五七五に嵌まって過ごす待ち時間

子が飽きるまでは見守る親心

あさはかな自分に気付かない末路

大阪市 大川 桃花

おとといの天気怪しくなる記憶

独り住む老母は家電と日々コント

泣いている子に声かけるにも勇気

あの齢であのポリユームは髪だな

美容院に行つて気合を入れ直す

新聞を変えても無いわいいニュース

神戸市 山 口 光 久

硯の海心をきゅつと引き締める
沢庵をバリバリ母の気を食べる
自腹切る覚悟ができて名幹事

加齢臭お前は少ししつこいぞ
捨て石はあるじのころ汲んでいる

いいじゃない妻に敷かれて気楽なら

枚方市 小 林 わ こ

窓に雨鳴らぬ電話をじっと待つ

昨日の嘘悲しくなつて窓に干す
太陽を信じて窓を大き目に

たった一つの答えを探す窓あけて
絵手紙の窓から孫が笑つて

母と向き合う小さな窓を持つている

弘前市 福 士 慕 情

神妙な顔で柏手打っている

冬の森こだまが通り過ぎてゆく
お隣の境界までは雪を掻く

消えるまで放つてはおけぬ北の雪
寝たきりの姉へ無沙汰は雪のせい

腐葉土を被り春芽の冬ごもり

三田市 福 田 好 文

据え膳を食べてはくれぬ仏様

OB会肩書きだけは付けたまま

母のリストラ知らぬ鍵っ子大はしやぎ

戦後の餓え取り返すのかバイキング
犬だつて逢いたい犬がいる散歩
物言わぬ妻が一番怖いとき

鳥取県 佐 伯 や え

一期一会手をひき汽車にのせてあげる

余生肅々流れに添うて生きている
年よりのもてる田舎は暮らしよい

面影を抱いて生き抜く冬の風
礼肥を忘れずまいて雪を見る

孫の縁談めでたや座敷春にする

堺市 志 田 千 代

大阪は降りたことない駅ばかり

幸せと思うか思わないかです
笑わねば笑わない人なんだから

凜とした女性雅号を持つてはる

忙しい方の返事は飛んでくる
私も夫も犬も耳遠し

黒石市 佐 藤 古 拙

旧正はむかし風情の雪が降る

七つ道具揃えるに似た捜し物
貧乏性嫌いな皿を先にする

埒のない話に雪の句読点

泣く笑う雪がまつわる去年今年

関節がぎくしゃくとする雪つもる

宇部市 平田実男

花束のところどころに含み針

原発の怖さ核兵器に勝る

三面鏡私の歳をさらけ出す

帰省した娘と囲む温い膳

ネクタイをほどくと消える肩の凝り

妥協するたびに影まで薄くなる

堺市 山本半錢

思い出してぼちぼち歌う手鞠唄

生きてきて母と呼びたい人数多

のんびりを置いてけ堀に陽が沈む

寄り道で見つけた扉押して見る

力瘤萎んでるのに気付かない

手を開けて生命線の薄い日よ

富山市 島ひかる

災害の記録破りに立ち向かう

ボランテニア確認印を強く捺す

一言に救われている朝の膳

検診へ医者もびつくりする数値

太鼓判捺されて少し若返る

亡き人の思い繋いで木を植える

鳥取市 福西茶子

バラの棘折ってご先祖にもあげる

意地悪なことが聞こえぬ振りを

一日で良いですアナタ留守をして

百均のバッグいちばん身に似合う

連風の一番先で張る度胸

車庫入れもスイスイ愛車Sサイズ

米子市 成田公一

窓を開け隣の柿に手が届く

あんた誰息子はもっと洪い声

ひと言が白けた空気繕った

爪も歯もある時ふいに武器となる

なに気なく入った森が深かった

神様が上手に食べた鰯雲

鳥取市 近藤佳子

畔の紫蘇母を偲ばす香を放ち

紫蘇の実と雑魚の佃煮母を恋う

お墓のまわり祭壇にする彼岸花

自転車視野に大きな虹が立ち

もう誰も住まぬ生家に柿たわわ

転ばずにこしも年の瀬を迎え

西宮市 亀岡哲子

ジャンプしてここは宇宙のど真ん中

迷路行くゴールは父母の待つ花野

背が縮む朝夕背伸びしてますが

赤ちゃんにメロメロLOVEをしています

根性が座ってきたぞまだ死なぬ

お隣から学ぶ介護のあれやこれ

藤井寺市 津 田 シルク

メタボの医者と一緒にやせよ言わはった

冬の蚊が一人前にさしにくる

欲ばりが両手ひろげて待っている

三回は食べねばならぬおでん鍋

我が余命誰のものかとフト思い

紅葉の名画の中へ犬つれて

大阪市 原 田 すみ子

おはようとお陽さまにするご挨拶

わたしだけ集中豪雨絶不調

目が冴えて夜の長さを思い知る

わたくしが笑えば誰か泣く習い

青春のページ昭和に置いてある

ユニクロと百貨まずは行ってみる

出雲市 多久和 敬 子

子の帰郷でんてこ舞いに感謝して

赤い糸緒う二人温い屋根

お互いの器を知って丸く住み

たんぽぽの綿毛秘密を喋り出す

靴下の穴から笑いもれてくる

母逝ってふる里の駅素通りす

府中市 藤 岡 ヒデコ

世渡りの下手なところで馬が合う

新しい暦に記す予定表

一十一まだ出来るので大丈夫

詰め放題出来るミカンの列に居る

老化的な冬眠をする熊に似る

成人の孫は一足先に春

大阪市 榎 本 舞 夢

来年は母と私が同じ歳

母偲び思い出たどる年にする

母の歳越えれば自分流に生く

被災地も新年が来る月も出る

初詣きつといい夢連れて来る

二ヶ月は誕生日さえ忘れられ

尼崎市 軸 丸 勝 巳

この冬は根深雑炊生姜酒

七十年消えぬ開戦日の歓喜

パソコンに元氣さ読めぬ年賀状

標題が怖くて買えぬ新刊書

歳の順ならば悩まぬ計報欄

寝る前の一句見直す朝の床

弘前市 須 郷 井 蛙

棒グラフ上げる職ならあるのだが

うっかりと三度の薬四度飲み

ドナーカードせてお国へ奉仕する

図書館へ通って浮かす暖房費

少数党大臣並の口を利く

三日間鯽大根で二人きり

札幌市 小沢 淳

雑用は他人に頼めぬ事ばかり

僕の地図あちらこちらが行き止り

軽い嘔吐けば喉元通りよく

純白に戻れなかった再生紙

極太の根っ子育てた北の風

札幌市 三浦 強一

自分史に少し混ぜてふくらし粉

噛みしめてだんだん味の出る苦言

毒舌を誰も憎めぬ人間味

昭和一桁郷愁しきり小津映画

定番の忠臣蔵を見る師走

砂川市 大橋 政良

支え合う小骨がよそ見して困る

ゆっくりと風の心を聞いてやる

敵のない死に顔だった花で埋め

ひかえめな盲導犬と目を合わす

胸に置く千手観音僕の護符

弘前市 今 愁女

はやぶさが巣づくりをした大都会

大股のウォークも慣れて朝の膳

コンクリートに塗り潰されたいぬふぐり

汗水の米にセシウム何の罪

十二月喪中はがきで知らされる

弘前市 岡本 花匠

人生坂支えた影に内助の功

三本締め来期へ誓うOB会

ワンカップ男の本音灰汁も浮き

御正忌の聴聞の落ち沸く笑い

輪袈裟して仏弟子となる修正会

黒石市 相馬 一花

雑学が一杯詰まる知恵袋

ごめんねと微笑む美女に歯が立たぬ

才女ほどとつき難い人はない

虫がつく野菜を好む文化人

無駄飯を食った記憶はすぐ忘れ

平川市 小寺 花峯

苦虫の顔が離れぬ北に住む

独酌の右手炬燵の猫を撫で

正論も社長の椅子にかなわない

定量を越えた銚子が人を恋う

ごめんなさい一言いえぬ意地の酒

青森県 松山 芳生

片えくぼ君のこころの謎を解く

雪降って白い世界に棲むと言う

手袋がまたタンポポを摘みに行く

逢いにゆく白い手袋ふところに

虹掴む白い手袋蒼空を指す

さいたま市 星 野 育 子

静岡県 藍 田 猿 杵

人生はリハーサル無い初舞台

鳥たちにセシウムのこと教えねば

横から目線でズレを調整中

学歴で計れぬ特技輝く日

ハイとアリガトウ易しくて難しい

横浜市 小 野 句多留

呆けたわけ己に揶揄り日が暮れる

湯タンポの代りに猫を侍らせる

黄泉の国一言居士を迎え入れ（談志死す）

年頭の五七五が巡り来る

ウオーミングアップ スカイツリーの年の暮

横浜市 菊 地 政 勝

セシウムの退治を辰に託したい

一人つていいなと思う酒を飲む

食欲のブレーキかぬ血糖値

お若いと言われるほどの歳になり

過去帳の父母へいい事だけ教え

川崎市 三 浦 き ぬ

十二月八日私の誕生日

生命線長すぎるのが災いか

被災地の犬猫あわれ生き伸びよ

野次とばす議員クローズアップして

留守番の子にお土産のケーキ買い

捨てられた牛も人見て寄って来る

冬富士を仰げば背筋ピンとする

大関を克ち取り師走の風清し

川幅と流れの音が手話にした

苦も楽も奇跡知ってる指のたこ

可見市 板 山 まみ子

説明を聞いて納得歯科の椅子

高齢の達者で元氣目標に

知人など載るはずのない死亡欄

好物に味がなかった夢の中

皆既食月の神秘におつきあい

犬山市 関 本 かつ子

被災地にどんな思いの百八つ

読める人傍にはいいない書道展

単身の息子肥えても気にかかり

前撮りはオールレンタル七五三

最終はハンサム過ぎたご老公

犬山市 吉 田 幸 子

据え膳で夫の腕を褒める鍋

痛いところ母にもあった歳になり

子ども等の幸せそれが一番や

ストレスと言われ痛みが何処へやら

焼き芋のほんのり昔蘇り

犬山市 金子 美千代

お守りの薬の種類増える旅
いいとこどりする指南書の斜め読み
知らない強み恥だとは思わずに過ぎ
仏飯をバックごはんですみません
美容院かえるに少しいる勇氣

愛知県 早川 遯行

歩いても五分車で行く歯医者
絶好のチャンス逃がすオフサイド
腹立った時だけ鳴らすクラクション
雰囲気で分かる私の座り場所
仕方ない時は布団を被り寝る

京都市 三宅 満子

ガイドデビュー住んでる街が好きになる
逝く時は臓器提供惜しまない
七十億の星が輝くよう祈る
朝のサラダ世界の野菜歌い出す
取り寄せのおせち旨いと褒められる

京都市 榊 本宏子

人間が地球の絆ゆるくする
ご近所の絆が太い犬仲間
八方美人細く短い絆なり
孫が出来嫁との絆深くなる
ふたご姉妹同時に風邪をひく絆

京都市 高島 啓子

踏んぎりをつけよとゴング鳴っている
踏みこんでくるなど顔に描いてある
停電になつても足踏みのミシン
あつけらかんと絆ほどいて家を出る
漬け物をさらさぬようにする絆

京都市 坪井 孝一

懐にいつも抱いてる柿の種
ボクの朝サプリメントがてんこ盛り
ふる里で過去を聞きたい帰ろかな
行列があるから並ぶいやなくせ
実篤のナスビ元氣な叔父の家

京都市 西村 益子

記憶の糸やつとたぐれた二日間
孫達の笑顔ひしめく年賀状
腹黒いサヨリはとても美人です
着服れて丸まつている老夫婦
喪中でも白味噌だけは譲れない

京都市 藤井 文代

古都の声耳をすませばお寺から
ただひたすら歩むこの道理屈なし
騒がしい人が居るのも一理あり
防ぐには自然を畏怖し生きること
辻褄が合うと信じていく余生

亀岡市 井上森生

寒い冬なら負けないで燃える技
大阪都大きく伸びる民の夢
揺れ動く世界に日本の和の心
大らかに素直に自然と向かい合う
何時の世も維新の心で生き生きと

長岡京市 山田葉子

マフラーをジングルベルがなびかせる
雑踏に紛れて飛ばす軽いうつ
次世代へ繋いただけでまあいいか
よれよれになっても見栄を張っている
注射打ち続ける暮しにも慣れる

大阪市 神夏磯典子

六十年思い出入れた深い壺
初春の空悲しいことを忘れさせ
美しいおせちを食べて齢をとり
景色見るゆとりが出来た高速路
楽に來た道ではないがすぐ忘れ

大阪市 古今堂蕉子

知人恩人今年もたんと来る喪中
生きざまに比べすっきりの死にざま
冷凍をすれば安心してしまふ
右向け右素直に生きた白い髪
枯葉舞う街にも人の心にも

大阪市 板東倫子

都構想よりも明日の希望欲し
壽と書けない仮設への賀状
汚染地区彷徨う牛や犬哀れ
復興を願えば増税の罫がある
プチ世帯炊くも洗うもプチ家電

大阪市 川端一步

初春や決意ハードル下げたまま
クレオパトラの鼻は斜めがいい感じ
また飲もういつまで続くこのセリフ
多喜二忌へ再再読の蟹工船
垣根越しきわどい話して暮れる

大阪市 鶴田遠野

堂々と貧しい過去を語る皺
白票で怒りぶつけて果たす義務
初恋の安否気になる故郷の駅
言わんといで自己責任の厚化粧
偏差値はあるが書いてる恋の文

大阪市 岩崎玲子

誕生日まるいところとまた決意
だんだんと自慢するもの減ってゆく
尖ったところ静めるみずゝの詩
こだわりもサブリメントのひとつです
私の脳子ども新聞ちやうど良い

大阪市 井丸昌紀

駄目押しにピリオドふたつ打っておく

前向いて進んでいると思つた

この国に並んでならぬ列がある

食べ過ぎて毳はなかなか転ばない

煩惱があるから今日も生きられる

大阪市 榎本日の出

ゼロの数見ると何だか恐くなり

北京では厭というほど漢字見た

賞味期限見えてきました足と腰

本当の齢を知つてる影法師

ストレスを本がきれいに解きほぐす

大阪市 升成好

涙した過去は他人に語らない

その他大勢その辺りが僕の位置

追い風が止むと無力を知らされる

うまい酒飲んでるうちはみな笑顔

アリバイがあるが言えないあなたの名

大阪市 近藤正

占つて子の就職が吉と出た

放射能汚染に負けず春を待つ

デモの渦ウォール街でもモスクワも

消費増税しなと言つたのは誰だ

登竜門見据えて立つた年男

大阪市 小谷集一

沈黙と笑顔を武器に立て籠る

取扱い注意と背なに張つておく

気に入つた遺影制作しています

消えて行く今日を残しておく日記

正論を吐くと味方が減っていく

大阪市 岩崎公誠

雲に名をつけてにんげんみな詩人

逢うことを避けて曲つてまた出逢う

ときどきは筋書にないNOを言う

自分の名忘れた母は笑わない

天国と地獄の坂は大差ない

大阪市 江島谷勝弘

山ガール誰ぞ仕掛けた臭いする

力瘤はないが金力ならある

喜んでもらえばいいのボランティア

つまずきは代数と幾何学でした

道草は三日に一度しています

大阪市 熊代菜月

誰ですか心の扉たたくのは

階毎に世界が変る雑居ビル

負けん気が今日も私を歩かせる

忘れ物ふやし今年も生きてゆく

淋しいねみんな私を置いてゆく

大阪市 佐藤 忠 昭

阿蘇九重屋根のない風呂探す旅
カーフェリー五泊三日で宿未定
昼食は三日三食手打ち蕎麦
露天風呂数え切れない星を見る
未だ若いカーナビなしでも迷わない

大阪市 津 守 なぎさ

寒稽古未来を背負う白い息
いつみても猫が待つてる散歩道
毎日感謝で暮らす傘寿です
もどかしい読める漢字が書かれない
集中力リハビリ兼ねるビリヤード

大阪市 吉 村 一 風

幸せも降って湧くんだ善を積む
露天風呂今日も仏の顔で浮く
坂の上の雲にのりたいなと笑う
鉛筆をけずり初心へまたかえる
お宝は妻ですうちは他に無い

大阪市 津 村 志 華 子

くよくよとすれば一日損になる
傘寿とて意地の欠片は持っている
温もりに餓えてひとりの日向ぼこ
生かされる命に鞭を打ちながら
母さんが小さい子に還る

大阪市 小 泉 ひさ乃

新しい市長信じるほかはなし
はじめてのサプリメントで明日の夢
店員のセンス納得せぬ鏡
介護要らぬ体で夫婦助け合い
カラ―舗装水道ガスが掘り返す

大阪市 奥 村 五 月

喜びの結婚式に泣く頑固
ヨッコイショはちほち行こかおばあさん
優しくてかほそい声の大男
憧れのネオンのうみで娘は沈む
教会に昔の誓い置き忘れ

大阪市 池 上 清 治

飛び切りの寿司を宛がい妻は旅
文化勲章友が貰って跳び上り
耳元へ敵機来襲みたいな蚊
血液検査異常もなくて旅プラン
新大関親のよろこび披露する

大阪市 澤 田 定 子

知ったことより忘れ増え今年ゆく
関西発テレビドラマのユーモア
黄の帽子黄色落葉と戯れる
イケメンも美人も見ない店通り
仕事一途奥さん羨む定年後

大阪市 平 嶋 美智子

被災地の子よ雪合戦をしましたか
被災地に希望携え春が来る

東北のリング 我が家に来てくれた
この歳だ非難されてもケセラセラ
姪が来て食べて話したいいい日です

大阪市 田 浦 實

前向きが気までどんどん若くする
近所の動きどしどし掴むさすが妻
風評は妖怪よりも恐ろしい

書き初めの龍龍龍に願ひ込め
跳ね過ぎた卯年も明けて登り龍

大阪市 伏 見 雅 明

口笛は童謡になる妻の留守

暮らし向きすべて包んでくれた母
日本晴れ今日一日を賭けてみる
子の描く母に立派な髭がある
ドーナツ盤針一本に泣かされる

大阪市 坂 裕 之

さよならをまた会えるねに置き換えた
日常の中で学んだ助け合い
お茶碗に一粒だって残さない
でこぼこがあつてやる気が湧いてくる
お愛想の来て下さいを真に受けて

大阪市 笠 嶋 惠 美

しその実を全部食べたなら雀来ぬ
足の怪我日日薬がまだ効かぬ

母と息子電話なんともこそばゆい
肥えただけきれいになったの噂だが
新同人ひとりひとりの胸の内

大阪市 寺 井 弘 子

駆け抜けて昭和に残して来た未練
赤ちゃんを取り巻く絆輪を広げ
易の灯に打ち明けている悩みごと
正論を吐く人をさげ坐る席
十指にも余る片恋なつかしく

堺市 加 島 由 一

気分よく筆で禁酒と日記帳
いいとこに定規があつた背の痒さ
枯れてきて恋の炎が付きやすい
ブータンの王に幸せ考える
雲に乗れ息子よ君は年男

堺市 齋 藤 さくら

年賀状出さぬ正月寂しけれ
お婆ちゃん玩具欲しいと言う電話
節電で灯油売る声弾んでる
一周忌来るのに未だお母さん
復興が中途半端で年を越す

堺市奥 時雄

明日手術ほんやり見てる流れ雲
糟糠の妻には残さねばならぬ
変節はすべて時代の所為にする
言うことが逢う人ごとでみな違う
エリート of 挫折ボキツと音がする

堺市源田 八千代

端金では済まされぬお年玉
大阪を変えたい人が数多い
続かない天声人語書き写し
心身を解す喋くりマッサージ
内裏雛のようブータン王ご夫妻

堺市内藤 憲彦

今年こそ龍もにつこりする年に
天国へ続く階段マイペース
孫からの年賀状来て旨い酒
新ルールわからないのにまた変わる
鈍ですが筋を通して生きてます

堺市大久保 のん子

まっすぐに生きた証の轍たち
真ごころという宝なら持ち歩く
秋の陽が金時絵かく文箱かな
音たてて私を過ぎていく時間
喜寿すぎてまだ夢すてぬ日記帳

堺市荻野 像山

帰省車の渋滞へ携帯トイレ
カート押す友と出くわす年の暮れ
太陽が燃え尽きたらとふと思う
禁煙のもろさよ一本でころり
首になりや里には仕事山とある

堺市西村 りつえ

むつつりにジョーク飛び出す嬉しい日
今朝も胃をお粥で庇うメスのあと
決め手なくピリオド打てず揺れている
長生きも半端で終るお人好し
すんなりと抱かれた肩もがたがたに

堺市遠山 唯教

健康でいると笑顔がにじみでる
熱爛がほしい日もある胸の霧
新参者だがライバルを決めている
初心者が褒められ宙に舞っている
残照に未完の夢がすてきれず

堺市大隅 克博

積ん読はいやで立読みして帰る
諭吉より使い勝手がいい英世
外交の握手はあまりあてにせぬ
反対のようで似ている妻と僕
オーブンの時だけ行つてそれっきり

池田市 栗田久子

泉佐野市 山本蛙城

足早に去る正月のそつけなさ
節分の鬼はしきたり通り来る
暖冬の予報信じていた不覚
人を信じる癖いっこうになおらない
私の弱味を握る膝がしら

和泉市 横山捷也

撒き餌かも知れぬ敬語が多過ぎる
継ぐ人の無い田畑に父が立つ
二代目に見えぬ男がふるい立つ
老人会ラジオ体操着ぶくれて
火柱を抱いた男に揺れている

茨木市 藤井正雄

探し物日に何回かロスタイム
年金の小箱から出すお年玉
兄嫁が里の秘伝で漬けた梅
バラの芽の主張聞いてる冬日和
先生の病気見舞は束で来る

茨木市 島田誠一

忘年会捨てるつもり靴で行く
深々と頭は下げる詫びポーズ
不満言う前にプータン幸福度
栄養が足りて教養不足する
削る歯の方へムンクの叫び顔

毎日が記念日ワイン空けながら
ハモニカの軍歌くぐもる隣家から
その過去は辛かったろう丸い石
万華鏡覗き夢見る無為の日よ
連なつて喪中ハガキの来る寒さ

大阪狭山市 矢野梓

暮らしにも横文字が増えややこしい
満艦飾に干して冬の陽取り入れる
バーゲンによく会う人の身を案じ
思い付きメモするノート持ち歩き
柚子の香にうっとり浸る仕舞風呂

河内長野市 坂上淳司

当てもなく盛り場泳ぐ淋しがり
銭湯で泳いだ遠い日の記憶
ありがとう楽しかったと逝けるかなあ
子ら巣立ち草生す庭に開かずの間
棺桶でにこにこ聞いている弔辞

河内長野市 植村喜代

木の葉舞う風がスカーフ取りに来た
静かな日川の流れもおだやかに
テレビから日本よい国秋景色
出にくいからと友が近くまで来てくれた
四十年を喋るあつと言う間の三時間

河内長野市 井上喜醉

岸和田市 原

さよ子

肉体の悪魔退治に手術台

筆不精バソコン覚え力湧く

デパ地下で楽しい主婦のつまみ食い

生きるため晩酌ちよつと舐めるだけ

ウインフィル今年も聞いて涙ぐみ

河内長野市 山室光弘

脳の指示待たずに動く軽い舌

どんくさい手足頭で生きてきた

すさむ心墨の匂いが染み透る

とんがったところまあるくするえがお

羅針盤待たずに進むマイウェイ

河内長野市 水谷正子

復興庁政治マンガにならぬ様

アジアカップ日本という名輝いた

ディケアで上を向いてを合唱す

辰の年絆大事に和を願う

食べる事遊ぶ事なら意気が合う

交野市 森本弘風

十二月八日あの日あの朝あのニュース

卓袱台を囲んで聞いた真珠湾

どの皿もきれいサツパリ戦中派

体重が医者喜ばすように減る

就活解禁どないするやろ孫娘

千円札義援の箱に温かい

人だから私も好奇心に負け

はがゆさを一オクターブ高い声

裏道は迷路の上に犬が吠え

老人にも生きよ生きよと草萌える

岸和田市 雪本珠子

輪の中に笑いの花を咲かせてる

初恋を引きずったまま黄昏れる

あの日から希望なくした熱帯魚

故郷の風が伝言持つて来る

ほんわかと銀座の蝶が世を渡る

岸和田市 岩佐ダン吉

あの時は無駄な汗だと思つてた

多数派にいて臆病になつてゐる

火の粉浴びる覚悟言いたいことがある

横並びなどとは言われたくはない

洗い流しやつてわかつたことがある

岸和田市 堤 植代

大声を出したい時はカラオケで

気兼ねなく勝手に生きる姥たのし

重ね着で歩幅ますます狭くなり

杖頼り八十路の坂をのぼつて

ささやかな幸せうれし鍋の湯気

岸和田市 森 元 ふみよ

方言は言う方聞く方ほっこりと

消費税上げればスイーツ買わぬだけ

好奇心魂のもと孫が来る

ふる里のみかん畑は燃えて見え

味見てよ見ない内からソース掛け

四條畷市 吉 岡 修

歪む影嘆いてみても僕のもの

なけなしの知恵を小出しにしてもたそ

鶴橋の匂いと景色よく似合う

履歴書に平民とした記憶ある

鰯のあのセクシーさには敵わない

吹田市 瀬 戸 まさよ

開かれた戦後よかった卒寿の辞

ほらあれと思いつけずに笑いあう

どこがいろいろと懐かしいむかご飯

御破算で商都大阪よき街に

着膨れて席狭くなる車内です

吹田市 太 田 昭

過去形の話ばかりで老いてゆく

カレンダーを替えて一年生き延びる

同郷と言うだけで酌む縄のれん

相槌のつけが回ってくる師走

総理にはなれぬ男がなりたがる

吹田市 野 下 之 男

パーティーも気楽な方が良いのです

愛犬の肌の温もり忘れない

殴つても監督の愛生きている

女房を詠んだ句そつと隠れてる

仲の良いアヒルの夫婦しかと見る

吹田市 大 谷 篤 子

口笛で病後のつらさ吹き飛ばす

病後です明日する事は明日にする

ひと眠りするたび元氣出てきそう

一病という相棒に守られる

早すぎる時の流れになあ竜よ

吹田市 須 磨 活 恵

躓けば欲を捨てよと石の声

掃除機に吸い込ませてるひとり言

三角の天辺にいる姉ご肌

まだ夢を追う気で春の靴を買う

希望という文字が膨らむ春の辞書

吹田市 木 下 敏 子

玄関にせめて門松ぐらい立て

ひとりには馴れて冬至の湯につかる

龍の背に乗って見たいな雲の上

まだ夢があつて痛い足運ぶ

幸せと思い遺影にありがとう

高石市 浅野 房子

盆正月節目節目にある孤独

野仏が監視カメラの役をする

手持ちの服みんな着古し服がない

古家は満身創痍わたくしも

スケジュール通りに歩く他は無い

高槻市 井上 照子

乾杯のあと震災地ふとよぎる

宝くじ度胸と金があれば買う

ジングルベル焦るな支える杖もない

歩かねは弱るといわれ雨の日も

平行線交わる時は死ぬ時か

高槻市 左右田 泰雄

大げさな話で人を煙に巻く

エンゼルの瞳に心洗われる

ぶつぶつと小言まじりの独り言

読みさしの本に挟んだカードキー

わけもなくひらりと跳んだ水溜り

高槻市 杉本 義昭

泣きじゃくる子の瞳には嘘はない

山茶花の見える窓辺にある会話

真白い雪だ無実を信じよう

夫婦喧嘩節電のためやめてます

マニフェスト喜びそうな嘘を入れ

高槻市 富田 美義

逝く時は鈴三回と決めてある

筆先へやはり心の揺れ移る

夢ひとつ一途に織って今平ら

参道の隅に善意が置いてある

極限の暮らしを守る蟻の群れ

高槻市 富田 保子

沈黙も一つの答えいつもの手

悔しさを耐えて空咳二度三度

うらかな天気喧嘩なじまない

カッターで切り取っている冬の月

もも熟れて誰にも教えない秘密

高槻市 乙倉 武史

支持率の低迷何時もの事ながら

生き様の暗中模索続く日々

仕切り直しする人生も黄昏れる

この歳で絆大切さを学ぶ

残照へ気分転換万歩計

高槻市 佐甲 昭二

相槌を打つ協力は惜しまない

当てにされた答を出して幕を引く

苦戦したあかしが染みたユニホーム

不摂生の証拠掴んだ内視鏡

足踏みをしているだけで策がない

高槻市 指宿 千枝子

お互いに少し惚けたと笑い合い
惚けながらも戸締りだけはしてた母
ひとりでに身体が動くいい日和
コンビニの弁当で行く菊日和
吹き溜まりの枯葉に名刺乗っている

高槻市 安田 忠子

奥丹のゆどうふ食べて紅葉狩り
散歩道昭和の火鉢植木鉢
気がつけば痛いところが治ってる
よみがえった世界最高金の舞

竹の子のように伸びてく十五歳

高槻市 峯村 勲弘

すらすらと書けぬ漢字が増えて来た
ピンチにも俯かないで前へ前へ
浮き沈み堪えて生れた一家言
役員はピンチと言えぬ社内報
朝は来るこの一言で勇氣湧く

高槻市 島田 千鶴子

着ぶくれて冬の節電肩がこる
時雨去り虹が旅路をサブライズ
落ち着かぬ商店街の十二月
妥協点見つけて長いおつきあい
引き出しの中で夢みるさくら貝

高槻市 初代 正彦

平凡と見える中にもある妙手
老夫婦食べる時だけ差し向かい
家族にも後押しされて今がある
若くても芯ある人に任せたい
孫達を遊ばせてたら遊ばれる

豊中市 江見 見清

稼いではないので遠慮して遊ぶ
雨天なら中止とあるが雪が降り
小春日和にうきうきお誘いは来ない
古寺の井戸がささやいている民話
立ち読みの出来るところで待ってます

豊中市 水野 黒兔

とろろ汁里は静かに雪積もる
ふろしきに包まれ温い里の味
飲みこんだ本音が消化薬を待つ
本棚に冬眠つづく哲学書
千年を座る菩薩のまろい膝

豊中市 松村 里江

当てにして居なかった子に今すべて
あの人に来てはる脈が早くなる
のせ上手話上手が煙に巻く
ウインドの極上品は見るばかり
早や三日今日は餅ビザ作りましょう

豊中市 松尾 美智代

寝屋川市 森

茜

衣更え出来てないのに秋深む
節約の母の教えが身に沁みる
体重が減ると痛みが消えた膝
ローン減ってメンテナンスが増える家
旅が好き少しやさしくなれるから

富田林市 中井 アキ

きたぐにから絵手紙頼つべまつ赤つ赤
釣瓶落としにせかされている遠回り
裏方に徹してからの腰据わる
腰の冷え労るほかほかと灸
十二月尽ほどほどで手を結ぶ
朝礼は明治天皇御製歌で（S16年）
雪の日も軍歌で乾布摩擦する
教育勅語もう諸んじた二年生
担任が四人兵隊さんになり（四年生）
日の丸で送り食べてたお芋さん
晴天に恵まれた旅柳友に会う
わくわくとさくらに乗って行った旅
背中まで流して貰い湯に浸る
紫香師との思い出面影浮かぶ
ありがたくうれしく心あたたかい
敬老日姉妹揃って杖をつき
泣きごとと笑って話す友が待ち
敗戦の今日の夕焼泣いていた
ちぐはぐな家族がつつくおでん鍋
なぞをとく糸口探す虫眼鏡

だまし絵の中でほっこりしています

愛という鎖にゆるく縛られる

蛇行をくり返し終点を探す

シナリオに無かった恋に縛られる

煮崩れてしまう雨夜の待ち呆け

富田林市 片岡 智恵子

素の自分が分かれれば折れぬ芯がある

夕映えに亡父の悟りが揺れている

五十余年よくもっている泥の舟

七十億のひとり夫が肺癆に

イヤホンつけて温もり遠ざかる

寝屋川市 籠島 恵子

日溜りをうれしがってるシルエット

皆さんの以下同文を許そうか

物持ちが自慢出来なくなっている

季が移る傷の癒えないままうつる

ポインセチア愛をふりまくように咲く

寝屋川市 森 田 麗

被災地に幸せ降らず龍の念
見舞婦省孝行の真似ごととする手
むらさきの朝顔ファイト貰う冬
去年の日記涙で開かぬ日もありて
女偏花一杯にする日記

羽曳野市 徳 山 みつこ

スコップで脱原発の治療中
欲のある薄い財布が邪魔になる
楽しみをどつと貯え冬ごもり
食べるだけ作ってあとは備蓄する
列島に第九よろこび響かせる

羽曳野市 三 好 専 平

干支・八卦信じないけど辰の年
浄瑠璃は人を殺して紅葉狩
笑顔さえあればつながる手と手
暖房と冷房まいにち切り替える
弱いから嘘もつきます隠れます

羽曳野市 吉 村 久仁雄

歳などに負けぬが涙もろくなる
生き恥をさらすに見える敵味方
しがらみを越えると敵の笑みが見え
野仏に聞かれた今日の放射能
日々無欲に生きて大志は眠らせず

羽曳野市 福 田 悦 子

春の音冬に別れの鏡割り
淋しかった庭を彩る寒椿
年賀状に聞えて来そう友の声
銭湯の初湯なじみの友揃い
雪深い高野の山へ初詣

羽曳野市 永 田 章 司

しょぼくれた心励ますフラガール
裏表正反対のTTP
子や孫に旬の総菜出せぬ里
東電が見た想定は企業エゴ
便利だが住み良いのかな今の世は

東大阪市 北 村 賢 子

艱難辛苦積んでいたみの解る人
復興の念天へ突き上げる太鼓
空間を共有出来る人が居る
人間の本质やはりあたたかい
思いやるところで結び直す糸

東大阪市 笠 井 欣 子

喪のハガキ赤いポストに入れづらい
年末のピンポン私出ぬように
ハワイから来いと言われて若返る
年末の財布大口開けている
はやくだけばやいてビール栓を抜く

東大阪市 佐々木 満作

枚方市 丹後屋 肇

初詣で幸先のよい吉のくじ
大家族鍋を囲むと福が来る

しっかりと対処していると総理言う
ほらあそこホルン吹くのが僕の孫

日本から遠のいてゆくワビとサビ
どん底に落ちて不遜を悔いている

好きな人臉の裏の小抽出し
オープン戦今年はきつとやりまっせ

ネットから海賊版がよく売れる

タケノコの地下茎ブライド蓄めている

東大阪市 米田 水昇

枚方市 安達 忠央

ブランドの柿はだまって艶放つ

妻倒れ家族をつなぐ輪が締めまり

紅白の葉牡丹が好き年むかう

渋滞を飛び越す羽根が欲しい日も

うつの身を開いてくれる冬桜

救急車パレードの列真つ二つ

辰年の女はきつとい言われてる

またここで飲もうと国訛で別れ

おめでとう書けない今の年賀状

妻介護三年越しを生きてくれ

枚方市 寺川 弘一

枚方市 二宮 山久

大器晩成漢方薬も吾輩も

洛北の杉の木立や露天風呂

幸せは中身見えない福袋

生きてきた証したしかな日記帳

何も予定がない日にも時計見る

声出しの師走の朝の六時吟

人生に喜怒哀楽の四季がある

落葉降る古池ジュータン敷きつめる

媚もせず谷間の百合は咲いて散る

読み書きは老眼変えて書斎部屋

枚方市 海老池 洋

枚方市 二宮 紫鳳

煩惱もだんだん減ってきた加齢

ひとひらの紅葉が癒す露天風呂

限界を知って余裕を取り戻す

新春へ華やぎ競うシクラメン

戦力外冷たい風に舞う枯れ葉

支え合う絆確かめ春を待つ

幸せだけ掬うてみたい穴杓子

ひと呼吸して断りの電話口

圧力に私も耐える深海魚

つつがなくバランス保ち生き上手

藤井寺市 太田 扶美代

分かつたわかつたと母の樹が揺れた
信頼しています夫の大イビキ
時々孤独を見せるターミナル
熟れてこぬ果実が一つ胸にある
指切りを一つ忘れたまま冬に

藤井寺市 俣野 登志子

見栄つ張り心の怯え顔にせず
食卓の隅がわたくしの書齋
捜し物やつと見つかりまたひとつ
弾く人なく本を積まれているピアノ
叩かずともできたでしょうね子の躰

藤井寺市 増井 ヨシ枝

金運があると言われて宝くじ
お名前は出てこぬ話は合っている
初恋を温めなおしてクラス会
猫逝つて膝がさびしい日向ぼこ
お隣の柿がにこにこして困る

藤井寺市 伊藤 アヤ子

目指す事まだ有るんです八十路坂
ダイエット元の体に戻れない
新米が届き香りと味に酔い
歳末の売り出し赤札に迷う
人々のやさしい心絆です

藤井寺市 若松 雅枝

老姉妹紅葉を追つて山の宿
美味しい物あれば自然と笑みが湧く
生き延びて何か侘びしい孤独感
曖昧な返事火種を燃え立たす
血糖値上げぬ食べ方聞いてくる

藤井寺市 吉田 喜代子

今朝もまた元気を貰うカーネーション
照明の鏡の中はまだ若い
紅葉で半年分は稼ぐバス
落葉集めお札に掃除して帰る
理不尽も流せる川は持っている

箕面市 出口 セツ子

子が元気だけで感謝の年の暮れ
川柳と家族の絆元氣湧く
子が巣立ち夫婦二人のクリスマス
優しさで数の子美味が倍加する
災の字へ何もできないけど祈る

箕面市 広島 巴子

笑いじわ年輪のよう母卒寿
母に会い胎児のごときぬくもりを
今日という過去を流しに露天風呂
上り湯で清め明日への夢を見る
シニア塾ジュニアに戻るハイキング

守口市 井上桂作

軸となる市民マラソン大阪で
大阪は維新の会で様変わり
いつまでもご自分らしく生きらねば
美しく齢重ねて坂下る
世界的所得格差に拡がりが

八尾市 宮崎シマ子

宴たけなわ熱爛だるとぬるかろと
取っておきの酒悪友が封を切る
酒楽し田辺聖子を肴とし
娘とて年始の客は客として
倅せは娘から注がれているお猪口

八尾市 高杉千歩

年相応流れに添うて逆ろうて
ストレスを飛ばそ赤いマフラーで
どん底を知らぬ輩が政治家に
いつだって今が幸せ咀嚼音
数合わせでもいそいそと春の宴

八尾市 村上ミツ子

五輪連覇の金メダリスト墮ちる
木枯しヘキユーピーの服編んでいる
寒い温いとジグザグ天気進む
太っ腹の友がいてくれる強味
早朝の電車欠伸もすっぴんも

八尾市 寺川はじむ

今日に生き明日に繋ぐと蟻の列
韓流へ今日も虜にするドラマ
変人も去ると寂しい永田町
エリートを背負てる孫のはしご塾
民の声と言うてるほどに響かない

大阪府 米澤俣子

気だらねばもつと気楽になれたのに
いにしえの人も見てたかこの夜空
以心伝心今夜も鍋が煮えている
転がった丸い葉に嗤われる
超能力のジヨブズの死惜しいひと

大阪府 粕山隆盛

紅葉の寺にデートの白髪映え
せつかに生きてゆとりの日向ほこ
売れっ子が忙中閑のデートする
晩景にうす紅いろの影を足す
完結のページ彩る花を盛る

大阪府 桑田ゆきの

てっぺんへがらがら声で都構想
煮え切らぬどじょうの鍋が冷えた
万歩計機嫌よき日の散歩道
口喧嘩ジョークで済ます母の知恵
輪切りする右脳左脳の白と黒

大阪府 野田 栄 呼

また逢おう心のひだに泌み込んで

リハビリの効果生んでるおしゃべりだ

一年間約束くれるカレンダー

スリッパで畳へゴメン寒い朝

いとおしむ認知の妻へ恩返し

神戸市 伊勢田 毅

札束がちらつき雑魚がよく走る

大阪の風に振り向く永田町

まだまだと飲兵衛の目が訴える

軍備増強一途な国にある思案

素うどんをすする友情暖かい

神戸市 山崎 武彦

地の人に効能聞いて湯に浸る

帯を解く音で暮れゆく小正月

清と濁識りませほんまもんの酒

青春のページはレモンティーの味

亡き友のゆがんだくせ字温かい

神戸市 山田 婦美子

お隣の野菜を誉めてもろてくる

お隣の顔も知らない子の夜泣き

水洩をすすり月蝕見とどける

十一年後見られないです月の欠け

赤黒色の月に感謝の札を言う

神戸市 木村 貴代子

気持だけ走り回っている年末

暴風のような年こそ忘年会

あれそれで通じる人を恋しがる

生れくる生命ちからに年を越す

年玉をやる孫増える春がくる

相生市 中塚 礎石

朝一番シャツ一枚で亡父に会う

ポケットにいざというとき石一つ

老夫婦黙秘権ではない無言

木登りが上手な猿も車椅子

矢印の通りに歩き道はるか

明石市 糀谷 和郎

充電がしたくて空へ指を刺す

握手した空の青さに嘘はない

器から跳べば地獄の待つ金魚

漂白をしすぎて愛が実らない

子の夢に乗って舞うのは親のエゴ

芦屋市 竹山 千賀子

朝市に並ぶ元気な里の顔

頑張る手さばる手みんな私の手

デッサンに描ける私創りたい

我が暮し平均的で心地よい

引越しのゴミにも歴史つもってる

尼崎市 長 浜 美 籠

叱咤激励されてる気分夜の冷え

通話中啄む鳩の背を追う

いい年でした屈託なく過す

ついて来いと言うナビゲーターが頼りない

匂い袋母の面影そこに見る

尼崎市 春 城 年 代

ボロボロの辞書とメモ帳離さない

カタログで頼んだ春着よく似合う

訊けばすぐ応えをくれる娘がふたり

一抜け二抜けた古い町にて生きのこる

時世の風と女一人の十二月

尼崎市 加 川 靖 鬼

いそいそと出かけましたよ女子会に

花屋さんの花はいつでも美しい

バラバラに動く五感をもて余す

ダージリンかキリマンジャロで迷う午後

電報のようなメールでカネオクレ

尼崎市 藤 岡 り こ

年と共に父似のはずが母に似る

アスリート精神力の差で勝負

妻と娘の結束力に身構える

手紙では母に丁寧語を使い

亡母の味まず胸に置きレシビ見る

尼崎市 林 昭 三

末席に酒に滅法強い部下

先輩が訛り丸出し酔ってきた

ゆつくりと彼女と暮れの御堂筋

手を繋ぐ小さなお手手温かい

退院にナースに感謝軽くハゲ

伊丹市 山 崎 君 子

友来る楽しおしゃべりひとときを

待っているカラスは来ない雨もよう

床暖に足をのせますありがたさ

納戸の戸やつとあけます昔の匂い

剪定の小父さん達も歳をとり

加西市 金 川 宣 子

お点前の招きに膝が遠慮する

三世代同居に響く笑い声

ふるさとの老母に慕情の時雨空

カレンダー早速丸をつけはじめ

価値観が同じ重さの人という

川西市 西 内 朋 月

突然に真っ白になる計報くる

予約することは出来ないお葬式

夕暮れになるとバツカスの誘惑

九条のおかげ戦のない日本

引き出しに恋の燃えがら置いてある

川西市 米原雪子

締めすぎて早く脱ぎたいお振袖
テレビから郷土料理を目で食べる
静かすぎひたすら子等の帰り待つ
携帯がバッグの中で呼んでいた
帰ったら覗くポストは今日も空

三田市 久保田千代

灯火親しむ大きい活字買いに行く
食べ頃は鳥も知ってる次郎柿
耐えている形ですつくと冬木立
耳底に残る小さな過去のこと
大臣も小粒で物足りない不況

三田市 北野哲男

クラス会すんなりと出る国訛り
絵手紙の野菜はどれも遅しい
止まるたびマーキングするバスの旅
いちよう舞う母を送った日のように
寄進する瓦にするすペンネーム

三田市 田中章子

夫倒れ空気がらつと入れ替わる
いい空気夫の禁煙継続中
北風の吹きだまりには喫煙所
ぜいたくは言わぬおいしく食べられる
化粧して新聞取りに行くくらし

三田市 上垣キヨミ

炬燵から札所巡りをするテレビ
溶け合って旧知の人になる車中
過疎の地に伝統護る童子舞う
満面の笑顔の人に籤を買う
友の檄ビタミン剤となる元気

三田市 堀正和

栗ごはんだけで今年も秋は過ぎ
不況とやみんなおしゃれな服着てる
円高に日本逃げ出す町工場
ときどきは肉食系になる後期
着メロをマーチに変える大晦日

三田市 石原歳子

珍しくママと子の居る遊園地
正月が早いと嘆くお年寄
寒くても辺り見守る百舌一羽
胡瓜食む夏の音する冬の膳
顔見せに來て下さいと医者言う

西宮市 緒方美津子

古くより神を宿した首飾り
シェフの腕白い皿を喜ばせ
花婿の父はビールを飲むばかり
コンビ二増えて夕餉の匂いせぬ街に
いいすぎた私をつまむピンセット

西宮市 西口 いわゑ

秋深し酒の旨さを知るひとと
木枯しに立ち向かったのは昔
千年も廃れぬ恋がしてみた
えんぴつとわたくしだけの小宇宙
幸運の女神自分の中にいる

西宮市 秋元 てる

宵の名句朝日に溶けてしまいきり
とんがって見ても卒寿の金平糖
三姉妹霜焼けまでが亡母に似る
戦中を生きた自信が生きている
病院をはしごするほどまだ元気

西宮市 藤本 直

ゆつくりとたまされているこれも愛
ゆつくりと本当の顔が出来て来た
ゆつくりと決めてはいるが假ならず
ゆつくりと金と時間が融けてゆき
ゆつくりと残り時間は数えない

西宮市 片山 忠

売上げで勝って利益で負けている
ギャンブルを煽ったほうは裁かない
援助より他に打つ手はないですか
頑張っていますと狼煙上げておく
過去ばかりほじくり男下げている

西宮市 山本 義子

寒空の星にきりきり頼打たれ
星と約束甘ちよろいこと昔言
玉手箱に大事な星をつめておく
星あかりはぼんやりがよい山湯宿
地球星の代替星よ手をあげて

西宮市 吉井 菜々子

お銚子はいかがと雪が降りはじめ
試着室ボンダガールを真似てみる
おつかれか鏡のまえの独り言
ほかほかと体の芯に効く落語
腹話術あの哀感はなんだろう

西脇市 七反田 順子

出不精をさそつてゆらり散歩する
御堂筋真つ黄黄の芸術だ
日記にはやさしい事を深く書く
余韻あるブータン王のスマイルが
熊野古道二万歩けたハイキング

姫路市 古川 奮水

上げ底と知らず洋菓子買うてくる
いたずらの風かミルクに放射能
歓喜の歌聴えて街はもう師走
節電へ夜半に回す洗濯機
大津波歴史年表追記する

奈良市 米田 恭昌

お葬式喪服の白きチマチヨゴリ
黄泉に発つホツとしたよな一〇二歳
半生記いろいろあつて青テント
スイッチ権持つ母さんはエコ奉行
泣かされた息子から紅鮭年の暮れ

奈良市 岩本 浩二

雀百まで未だ夢見る大ロマン
法螺吹きのおもろいバラエティ
趣味多彩届く賀状の数も増え
割り勘と聞いてブツブツ言う財布
来し方をかえりみ終の辻に立つ

奈良市 辻内 げんえい

直前でシニア特典逃げていく
コントより二歳の孫が面白い
長距離で知るエコカーの有り難さ
口のたつ孫に本気で負けている
七五三前撮りのため背広着る

奈良市 阿部 紀子

浪速っ子新しもんが大の好き
ねんねこを引っ張り出してエコ参加
ブータンの夫妻が醸す幸福度
いつからか娘に相談をする私
温泉で亡母と眺めた雪景色

奈良市 加門 萌子

風評を流している人であられ
お遍路に逃げて高額公務員
清らかな花は雪にも折れ易い
たよりなく見えて丈夫な蔓は伸び
いい時を生きたと思う昭和の子

生駒市 飛永 ふりこ

辰年を祝って虹からのエール
あつあつをどうぞ湯ざめに効くココア
あけつびろげな話 観音が微笑
丁寧な時をきざめと遺影から
自家製のパンからほくほくの湯気が

香芝市 大内 朝子

ああ浮世絆の華の美しい
綺麗頃わたしもあつたのよほんと
良心と笑顔に会える道の駅
着服れてふくら雀と日向ぼこ
人生の波瀾を越えた深い皺

橿原市 居谷 真理子

薄いもの重ね続けて生きている
砂粒の孤独が浜を埋めつくす
洪皮もむけたな苦勞こなしたな
恥に恥重ねてボクは伸び盛り
実の娘のちよつと邪慳にする介護

大和郡山市 坊 農 柳 弘

和歌山市 松 原 寿 子

凡人の域は越さない小正月

火の祈り水の祈りのご来光

山茶花の幻想淡雪を掬う

許し合う愛に程よい差し向かい

沈黙考自分探しの春に酔う

和歌山市 福 本 英 子

仮設から仮設へ未来見えて来ぬ

自分史に無いマラソンの汗を拭く

井戸端会議無くなり増えてきた孤独

金山寺味噌を戴く敬老日

古い独りオレオレ詐欺が通じない

和歌山市 古 久 保 和 子

うつすらと埃被っているハイネ

カタカナ語と周波数の違う耳

風邪の菌寄るな触るな受験生

建て付けを宥めるコツは心得る

無人駅起点はここに置いている

和歌山市 武 本 碧

勘違いばかり足踏みしてばかり

日記帳の嘘が少うし影になる

たとう紙へ母の祈り目が生きている

踊り場でいつでも思案してしまふ

駆け引きのないまごころへ運付いてくる

人生の苦勞おんなの地図を描く

激痛に足場を模索して女

心の芽ひそかに延びている絆

ひと日だけ女を装う鏡掛け

うたた寝でお遇いしたのは宇宙人

和歌山市 木 本 朱 夏

新しい手帳に萌える春のうた

書き足りぬ手紙と冬の夜の深さ

磨り減った靴の底にも父のうた

不機嫌な窓をきれいに拭いておく

鍋の底磨く明日が晴れるまで

和歌山市 玉 置 当 代

りんごむく命が切れぬように剥く

身辺整理せねばと思うまま暮れる

三猿の教え反省する師走

腰痛の動作トドだと笑われる

腰痛に紅葉の景色モノクロに

和歌山市 松 尾 和 香

仏壇に心もいける花鉢

どたどたと動き心が空回り

水禍癒え地域の絆強くなる

吊し柿障子に映えて夫婦道

貧乏の味かみしめて達者です

和歌山市 坂部 紀久子

ほどほどと言う曖昧に救われる

お日様と相性のよいつるし柿

表彰も汚点も綴る自分史へ

家族です貸し借りなどはありません

連係プレーうまくいつてる風通し

和歌山市 堀 富美子

プランターサニーレタスの朝を盛る

願ひ事遺影に今日も荷を負わせ

満たされて昨日のうつは何だろう

子のテリトリ―遠吠えを繰り返す

変り身の遅いあなたと意気が合う

和歌山市 柏原 夕胡

ピリオドを打つ瞬間も惚れている

外堀の浅さ多情なおんなです

上げ底になつてゐるかも知れぬ愛

サクラサクラわたしの春も遠くなる

沈んだら浮くまでそつとしてくれる

和歌山市 上田 紀子

欲持たず無から生まれて無に返る

戸主という女名字の頼りなさ

足のイボ含めて僕の全てです

この地球保険掛ければいくらです

完璧を一步抜けければ楽なのに

和歌山市 田中 みね

もったいないの一つ二次会だと思ふ

苦しんで生んだ甲斐あるヒット作

ひいふうみい数え上げます痛いところ

選ぶ目にこうも違うかと思う事

恋泥棒をしたりされたり若かった

和歌山市 喜田 准一

直角に生きて世間を狭くする

振られては困る議題に席を立つ

あれからよりもこれからを論じたい

逃げ隠れしても見つかる酒の友

馬鹿らしさカラスの真似で鳴いてみる

海南市 堂上 泰女

湯豆腐が楽しみですぞ紅葉狩

尊厳の狭間で揺れる老いの坂

白菊を活けた客間に客が無い

あら粋な夫山茶花活け添える

まっ白なベビーを愛で染め上げる

田辺市 岡本 昇

完敗に反省という酒を酌む

百歳を視野に卒寿の背を伸ばす

黒澤抜きで映画のイロハ語れない

階段を見上げて老いを受けとめる

鋏持った手には指紋も皺もない

鳥取市 倉 益 一 瑠

ヤジロベー心かたよつてはならぬ

レベルアップしたい鉛筆尖らせて

神様に盗まれてゆく物忘れ

あやとりもビー玉も歳月が消す

菊も酒も詩も愛して黄泉の旅(帆雀さん逝去)

鳥取市 夏 目 一 粹

加齢するたびにノスタルジーになる

夕日の中に亡母さんが笑ってる

辛かった・うるおった・怖かった金

こんな世に生まれてくるのはよしなさい

ふうせんの中に記憶を詰めている

鳥取市 岸 本 宏 章

いつまでが喪中かハガキ見て思う

負け犬の背には冷たい雨となる

本人は覚えていない七五三

薬漬けの臓器どなたか要りますか

真心がまだ生きていた義援金

鳥取市 岸 本 孝 子

黙祷はテレビに向かい手を合わせる

この歳で体重少しさばを読む

ウォーキングどちらともなく歩を合わせる

潔く捨てても困る物はない

すべて知り尽す友ならひとりいる

鳥取市 鈴 木 一 弘

森林を教え示した父の業

ガラクタが栄華のむかし物語る

磯の蟹サイズ合わせて穴ぐらし

母達者卒寿を祝う宝船

無人駅こぼれるほどのナナカマド

鳥取市 深 澤 千 恵 子

気まぐれな体なだめるこつ覚え

妻の座は主役脇役使い分け

来た道はいくら良くても戻れない

冷ます間に味はゆつくり染みていく

人生は峠の見えぬ上り坂

鳥取市 土 橋 はる お

何であれ阿弥陀如来に誓いたい

正月に屠蘇頂きながら誓います

被災地に歌謡コンサートが集う

T P P 流行り言葉で済まされぬ

髭ぼうぼう巨匠見たいになったのう

鳥取市 竹 口 清 信

好い明日になれよと二合飲んで寝る

今日からは無駄を省いて生きようか

予定など結果みるまで当てにせぬ

勇気ある男が減って来たようだ

気がつけば強い女が増えている

鳥取市 西 川 和 子

暗いからちよつと濃い目に紅をひく

異状無し胸の痛みは抜け切らぬ

今だから言える昔も将来も

私のたった一つを守り切る

祝成人年金叩く孫五人

鳥取市 池 澤 大 鯨

釘を打つ力角度を勘案す

余生わずか力んでみてもしれている

自然体即戦力を發揮する

いなされてもまっこう勝負しかないよ

力点がどこにあるのか探査中

鳥取市 吉 田 孔 美 子

百歳のハートにとっても興味あり

産んだのはわたしハートに穴がある

素頓狂な声逃げられぬ家族

部活だな湯舟で若い声を聞く

鯉幟泳ぐ真下の中国語

鳥取市 中 村 金 祥

いい夫婦愛を逆算したディナー

B級グルメコストかけずに星三つ

老妻の味婿の好みに変化する

早口の妻にはいつも言い負ける

先生に休みが欲しい部活動

鳥取市 加 藤 茶 人

死を口にするが死ぬのは他人事

可愛さも憎さも似てる目鼻立ち

プレゼントすればヘンクリかと聞かれ

許せてた事いつからか腹も立ち

古傷は忘れましたと爪が伸び

鳥取市 春 木 圭 一 郎

やり直すチャンス与えてくれるミス

悲しみを半分にする友の機智

修業中鬼の形相当たり前

笑顔こそわくわく生きるエネルギー

いい人になることいい句つくるもと

鳥取市 横 田 春 名

老は古い開き直ってしょぼくれる

やさしい目優しい音声胸開く

恋点火何十年も火種燃え

女子トイレ並びファッション品定め

ちぐはぐな二人三脚ひと日過ぎ

鳥取市 平 尾 菜 美

湧き起こる希望明日を追いかける

燃えたたぬ胸に思案の赤いバラ

あいまいな仕草餅つく羽目になり

葉がくれの蕾深深春を待つ

虹ほどにふくらむ夢と広い海

鳥取市 有 沢 せつ子

平凡なりズムで今日も無事終る
季節より早目に部屋のを替える
診療の待合室はみな無口
電子辞書拡大にして念入れる
ばけ予防読み書き笑い世話もする

鳥取市 奥 谷 彩 子

夫婦旅海山こえて風ぐ余生
生きる意味仏に問うてまだ解けぬ
円高デフレ朝の器にいのち盛る
人生も実り豊かに冬ごもり
うれしい日 本音弾けるポップコーン

鳥取市 高 浜 勇

悩みごと聞いてもらえる金積めば
不自由に慣れて自由を持て余す
からの巣のしゃべることない夫と妻
脳回路君の思考は宇宙的
ガタピシとすんなり閉じぬ世の扉

鳥取市 永 原 昌 鼓

ボヤのうち消さねばならぬ片思い
川柳へ心の扉開け放つ
悲しみの扉過失で開けぬよう
復興へ逆算できぬもどかしさ
逆算をして年金を溜めている

鳥取市 前 田 楓 花

健康でないと叶わぬ夢ばかり
昨日着た服を着ようかやめようか
オレ流を貫く彼が大好きだ
やり直しきかぬ人生今が好き
私にもホントの自分わからない

鳥取市 池 原 天 馬

また一軒廃業つづく和紙の里
百選の紙漉く音が一つ消え
生まれ場所ビルの礎石の一部なる
ふるさととは墓のみ残し雪が降る
戦死者の墓をともらう人も絶え

鳥取市 吉 田 弘 子

天を突く竜は後ろを振り向かぬ
愛犬が命救った光る記事
鳴き終えた虫のその後が気になる
床の間も消えた流行の設計図
足し算はもうないとい知る試算表

鳥取市 宮 脇 道 子

我が娘追っ掛けるよう年を重ね
温暖化山の木の葉も疲れてる
今度また花見の頃と友帰る
老いた脳忘れることが座を占める
古い風を何処吹く風と紅をさす

倉吉市 牧野芳光

金がない時は地面を見てしまふ
お隣の野菜 市場で買ってくる
にんげんを探して厚い本を読む
ウロコ雲の数ほど嘘をついてきた
人生に少しピンクを塗ってみる

倉吉市 山中康子

被災地へ母の香りのあれやこれ
その年になって頷く順おくり
良縁にあやかる婆のおせっかい
揚句の果ては辞書が手さしのべる
苦しんだ末に安らかなる寝息

倉吉市 山本玲子

腹八分残りの二分で薬飲む
寝ても覚めてもメールにのめり込む異状
予定表忘れるように書いておく
ウインドに老けて変ったわたしが映る
水溜まり勇氣を出して跳んでみる

倉吉市 猪川由美子

増税がついに本性現わした
どエライ奴大阪日本変える気だ
ブータン国王来日わたし種々学ぶ
選手飛行士一区切り付け子供産む
ウォームピズ冬節電のグッズ売れ

米子市 竹村紀の治

背がまるくなるとみんなが撫でに来る
アバウトな男料理の匙加減
うたた寝をくしゃみが起こす独り者
廃屋が噛み砕かれてゴミとなる
遺された梅酒は寒い夜に飲む

米子市 後藤美恵子

勢いづくどじょう掬いの隠し芸
閉院を惜しむがごとく散るもみじ
終の棲み家身の丈はかり建て直す
亡き夫のノックのように風が打つ
塩害の荒れ地に綿花夢つむぐ

米子市 高田振作

パソコンに遊んでもらい日が暮れる
休肝日ごちそうさまの早いこと
休肝日五臓六腑が欠伸する
認知症の母がハミングする軍歌
喧嘩もし仲良くもなるフルムーン

米子市 中原章子

手の怪我に注意重なる足の裏
充実感もって回復速くなり
装身具夫の手を借り着けている
颯爽の人が私を抜いてゆく
小刻みに生きる三年日記買う

鳥取県 石谷 美恵子

虫の声聞かせてあげる留守電話
じつくりと聞かせ聞かないことにされ
遊びだと割り切っていたはずなのに
面白いひとが家では笑わない
許せない縄が少しずつ緩む

鳥取県 岩崎 和子

名残りのよう一輪咲いた赤いバラ
雨予報首の根元が痛くなる
昼寝して目まいが治りベン走る
店先で幸せそうにベン選び
染み予防コーヒーすり陽を仰ぐ

鳥取県 斉尾 くにこ

尊敬のあつてわたしの北斗星
鉢を買う咲く花だけに魅せられて
春風のお手紙届く冬の午後
しあわせのシルエット残して尾灯
坂道をずっと登って銀河まで

鳥取県 山本 正光

何の用あるのか往き来する師走
目標の恩師の背中見て励む
親の苦労知らずに子等は着ぶくれる
声掛けて声かけられて飲むはなし
勝手ながら面会謝絶飲んでます

鳥取県 細田 裕花

追っかけるぼんやりとした夢だけに
ライトアップ独り善がりの街である
コンサート一夜の夢を持ち帰る
晴れマーク予定すんなり消化する
いちばんの子を東京にさらわれる

鳥取県 松川 行男

日出ずる国は僕の戸籍を保管する
雨天決行約束だからプレーする
政権も波打っている沖縄よ
見渡せば老老介護のバスの旅
一人旅妻が美人と知るまいな

鳥取県 山下 節子

目ざわりにならないように隅にいる
一日を終えたブーツが横たわる
賛成も反対もせず黙ってる
口に指当てて黙っておれと言う
家族の和バランス役の母が居る

鳥取県 西谷 悦子

晩学に力んでいます元気です
わたくしに友達あつて磨かれる
パズル埋め怠惰の脳を刺激する
故郷の原風景は胸去らぬ
褐色の落葉にあった優雅の日

鳥取県 竹 信 照 彦

里山へようやく下りて来た紅葉
灯油ガスオール電化をせぬ予感
僕と妻は炬燵エアコン子の家族
窓の外煩惱干して吊す柿
年末の暦の裏に竜が待つ

松江市 石 橋 芳 山

歌わなくなつてヒビ割れた君が代
腑に落ちぬものが並んで鳩の首
形だけ求めて腐りだすリンゴ
甲高い声して朝の機関銃
荒屋のように言いわけ洩れている

松江市 三 島 淞 丘

波長合う友と語れば瓶が空く
雪しんしん手酌の酒が胸に沁む
幾ばくの余生か逆算などできぬ
税という真綿が首を締めつける
揺り籠の中に期待の星が笑む

松江市 松 本 文 子

落葉ハラハラ溜息をつきすぎたか
心壊れて風と友達になった
あの日から浜辺の歌が歌えない
生きるためポジョレヌーボー買いに行く
死ぬも生きるも朝飯を食べてから

松江市 小 川 注 湖

初春の水蛇口より復興地
節電にダイオードだと街光る
道の駅の自慢がバスに乗る
東大は驍の授業ありません
水着写真若かったなと聞かされる

松江市 錦 織 禮 子

夕暮れにキャッチボールの軋む音
しんみりと友の作った歌を聞く
アンケート大変良いと持ち上げる
若者も納得ひばりの名調子
賞品はまたも所帯じみてしまう

松江市 松 本 知 恵 子

里神楽振舞い酒に温もつて
旅ごろ京の紅葉に染められて
パッチワーク木綿緋が効いている
しんしんと歴史の舞台雪のなか
芋変身スイートポテトすまし顔

出雲市 竹 治 ち かし

銀シャケの運命も変えた大地震
小春日を織り込み里の冬支度
数珠が手に馴染んではたと齢を知る
棺に入る姿眠れぬ夜を過ごす
人間が好きで川柳しています

出雲市 伊藤 玲子

欠けたとて怯むな月も満ちていく

欠点を補い合つて八合目

一歩ずつ暦の中を歩きだす

夕映えの城の歴史を解きにゆく

しよばしよばの枯身を流る真赤な血

出雲市 富田 蘭水

生きたとは八十路になつても不鮮明

精神と肉体のずれ考える

ウォーキング朝三十分の余命表

高速道紅葉の山に感謝して

手弁当ワンカップも添えひとり旅

出雲市 石倉 美佐子

めそめそよりにこにこが良いね

お正月だけはお枕も輪島塗り

博多帯きゆつとはもう締められぬ

雪女郎でそんな晩だ雪さんさ

どっこいしよ余生は楽しく穏やかに

出雲市 小白金 房子

温暖へ土筆顔出す師走風

大やしろ無駄木は持たぬ神の声

一年の流れ暦の中に立つ

突然の訃報かなしい墨をする

新豆の出来を褒められ味噌づくり

出雲市 岸 桂子

わたくしを忘れていない請求書

友情にそむくと長い橋になる

喝采の向こうに長い下り坂

風も火ものんで女の羽づくろい

時々は心に無駄を遊ばせる

島根県 伊藤 寿美

七回忌やつと独りに馴れてくる

幕引いたあなたが遠くなる月日

エンディングノートを買った暮れの街

嬉しくても泣く老母さんに会いにいく

孫からも花束がくる誕生日(八十歳)

美作市 山本 玉恵

私色に咲かせた花よ風さやか

むらさきの好きな女はブライドか

身八つ口女の愚痴の二つ三つ

戯画の裏に想いひとつを重ね合い

情念をたつぷり吸うて落椿

竹原市 石原 淑子

霜柱踏んで歓声こだまする

赤銅色の皆既月食白い息

このところ背中伸ばせと影法師

吉報を聴けないままの花暦

地震時の避難の仕方孫が言う

竹原市 岩 本 笑 子

大洲市 中 居 善 信

残すものあつて少しづつ忘れ
まず一步元日の窓開ける
初夢の神から迷路渡される
手料理の注文夫の畑から
地藏尊今日も薬を飲みました

府中市 岩 本 雅 代

春よ来い叫びたくなる八十の背
介護終え腰がのびたか爪も伸び
自然薯祭今年も食べて春燃える
新年を無事に迎える紅を買う
寒い日はすいとん食べて母偲ぶ

府中市 馬 場 利 子

菊に竹葉ばたんそえる家の春
新春の心意気障子の白さ
しがらみを抜けて安らく子の集い
福袋開ける手の荒れ気にしない
こだわりをすてる絵皿に紅を溶く

東かがわ市 清 川 玲 子

憧れた土に還っていく枯葉
趣味多彩メモして姑は今日も翔ぶ
失言を消しようが無い手にマイク
人生に幾たびあるか落し穴
節電と戦う冬はすぐそこに

人肌の熱燐欲しい十二月
鯖釣りに行ける余力は持つている
潮の香を嗅ぐと無欲な顔になる
逢いたいと思う熱気が萎えてきた
はたん雪から粉雪へ暮れる里

西予市 黒 田 茂 代

二人だけの部屋にピアノの置きどころ
ポリウムを下げると上げに来る夫
休みたがつてばかり海鳥も身体も
寂しさがじわじわ水の染むように
わたしだけが知ってるあのひとの魅力

高知市 小 川 てるみ

七十億命の水を思索する
老いてなお夢に彩色しておこう
念のため舌の体操してお餅
冬眠は十分出来る皮下脂肪
どっちみち最後に負けるのは男

高知県 小 澤 幸 泉

長老の重さに耐えて春いまだ
鉛筆の転がる先に友が居る
師の影を詠いつづけてなお遠い
フレームが手塚治虫に似せられる
騒ぐほど血税だけが消えてゆく

唐津市 井上勝視

チビリチビリ酒を楽しむ友欲しい
好きなのも嫌いもみんな女です

無駄じゃないボンヤリ点る非常口

振り返る恥と懺悔の事ばかり

多機能の電化は苦手老いている

唐津市 山口高明

肅々と布石が進む下剋上

御来光迎える富士で友と会う

支えにはなれど相談まだ出来ず

煌めいて何処か哀しき影をもつ

復興の御旗押し立て増税す

唐津市 樋口輝夫

「オレ流」で球界を退く時の人

割り勘で乾杯ピッチ早くなり

もう少し大事にしたい日本語

惚けてから頑固さ溶けた八十路坂

路地裏に流れる温い春の詩

唐津市 坂本蜂朗

関ヶ原彼方に淀君ねねの影

後期高齢が夢見る関ヶ原

鶴翼の陣穴だらけ関ヶ原

西軍の方が浄土に近かった

関ヶ原百姓涙するばかり

熊本市 永田俊子

女装する男性見ている逆さ富士

どのチャンネルも食べている哀しい平和

幸せなら手を叩く音が小さい

喜怒哀楽捨てた裸木が見せる真実

雀も鴉も来ないホームの夕ぐれ

熊本県 岩切康子

車保険安心剤に払つとく

参加者が極少になる年の暮

行き先を決めて夢みる通過景

様子みる期間をとって薬呑む

注射嫌い予防注射は仕方なく

第128回 大阪川柳の会

日時 2月6日(月) 午後6時締切

会場 ホテルコムズ大阪 地下1階

アーバンホール

宿題と選者

△きつと・中野 文壇 △奪 う・阪本 高士

△ポトン・居谷真理子 △肌 ・磯野いさむ

各題二句。席題はなし

会費 千円 欠席投句2月4日まで

〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706

電話 06・6303・7297

本田 智彦 宛

川柳塔の

川柳讃歌

(86)

木津川 計

老人と海とオンボロ船がある

牧野 芳光

三日三晩、老人は針にかかった巨大なカジキマグロと戦い、勝ったのだが獲物は鯨の群れに襲われ、食い尽くされてしまった。帰りに着いた海辺の小屋で眠りながら、老人はアフリカで過した少年の頃を思い出してヘミングウェイの『老人と海』は終る。The old man was dreaming about the lions.

老人は孤独だったが、勇敢だった。戦いに敗れたが、ライオンをなお夢見るのだ。芳光さんのオンボロ船の風に鳴る旗である。

素うどんのようなハートになった老い

山 本 正光

勇敢で強靱なハートを持った老人もいれば、素うどんのようなハートの老いもある。しかし、正光さんの素うどんの老境は生理に適っている。僕は若い頃、好んでこってりスープのラーメンを食べた。年とともに脂を

受けつけなくなり、うどんに変わった。そのうどんの太さが恐くなり蕎麦がもつぱらになった。最終的には素麺に辿りつく筈だ。

正光さん、ハートをなくさない限り、天ぷらうどんでなく、素うどんでいいのです。

アドリブの要る日常という舞台

高 島 啓子

ハンドルに遊びの余裕があれば、かえって危険なように、生活の日常にもことばの余裕が要るのだ。今号、森山盛枝さんが、「友人のいる正札のような人」と詠んでいる。融通のきかん、四角四面の、時間を守ってNHKみたいな「正札のような人」ばかりの地上になんの面白味があるう。

淡島千景と森繁久弥の名演、「夫婦善哉」で「おはん、頼りにしてまつせ」は森繁のアドリブ。この一言が映画の値打ちを高めた。

気付かれぬように回っている地球

岡 川 無 限

杉山平一に確かこんな意味の詩があった。電車には一杯の乗客、街には大勢の人出。その一人一人に行く先があり、目的を持って行動しているのはすごいことだ。

詩人ならぬ僕も、そんな風景に驚嘆する。すごいことに感嘆した詩人は終りの二行を、「星も月も／用もなく回っているのに」で結んだ。文学とは連想した発見かも知れぬ。自

転する地球を「気付かれぬように回っている」と、連想はないが発見した視点がいい。

揺れるだけ揺れてプランコ決断す

西 谷 悦 子

3・11以後数日の福島第一原発の混乱と動揺を時間系列で再現したNHKの検証番組をテレビで見た。恐るべきは、東電社長が全社員を現場から撤退させる方針を立てたことだ。原子炉の冷却を放棄したらどうなるか。チェルノブイリどころでない地球的規模の危機に人類は陥る。菅政権は無能だったが、撤退させるか否か「プランコ」の揺れを菅首相が断固はねつける。「決死でやれ!」。この人物が唯一残した功績である。

品格を上げると下がる視聴率

島 田 誠 一

『上方芸能』を「内容が難しい」という人は多く、この水準が「いい」という人は少ない。別に難しい雑誌をこしらえてるとは思わないから従来の線を維持すると部数は増えず、減る。妥協して通俗性を売りにすれば拡大しようが、雑誌野郎の矜持は失われる。一人よがりでは論外だが、文化にはなべて「風格」が必要なのだ。『川柳塔』と同様である。視聴率を上げるには品格を下げる。悲しいが実情である。衆愚が力を持つと恐い。

(『上方芸能』誌発行人)

自選集

小島 蘭 幸

遠まわりして師の句碑に逢うて来た
師の句碑のかたちして風といふ
乾杯乾杯ノンアルコールでも酔った
なんにもなかった頃がよかったなあ
振り向くと絶好調の僕がいた

木村 あきら

車では来るなど御酒も出るらしい
無位無冠今日も静かに昏れてゆく
三人が寄ると派閥が二つ出来
居酒屋へガソリン一合入れに行く
家内より怖いサラ金蟻地獄

小西 雄 々

復興へ加速を願う年あらた
羽織い夢は小さいけど生きた
駆け足できた如月へ雲走る
出征を鯛で祝ってくれた亡母
免許更新妻が心配する年へ

新 家 完 司

森はいま春のパーティー準備中
肉体は古稀たましいはまだ子供
ばたばたは無様すいすいスマートに
骨壺は冷たく潔く白い
闇鍋のようなものだね明日って

斉 藤 嘉

冬いちごみんなでどうぞ仏様
馬のひとみに写っているのは僕だ
花売りと話が尽きぬ街の角
一粒の雨一粒の胡麻になる
さりげないことばがくれる思いやり

塩 満 敏

歳時記に鶴彬忌載った夢
お陰様傘寿と喜寿の夫婦です
妻の庭ばちばち春の準備する
国産の大関二人誕生す
デイケアスタッフ陣は美女ばかり

恒 松 町 紅

もう何も言わない大正遠くなる
一升瓶がこの頃重くなつて来た
惚けてないつもりはいいが物忘れ
酒瓶がまた空いたねと側で言う
手を合わせ邪心を捨ててのに苦労

津 守 柳 伸

更新に迷う八十路のパスポート
先の先読むと酸素がうすくなる
大掃除すると熱出す年の暮れ
年賀状絆確めあうように
物忘れ気にするうちは呆けてない

遠 山 可 住

アルバムの笑顔が一つ消えて冬
ハイハイと署名が進む袖の下
大正か若いと明治におだてられ
サイレンが鳴るときつちり腹がへり
大変だ妻より長生きしてしまい

都 倉 求 芽

生命線見つめる七度目まわり歳
自問自答都合よくけりをつけ
まっすぐに歩きたいのに曲る道
健康と言われ余分なことしない
忙しいのは自分の勝手と妻が言う

土 橋 螢

まっすぐに歩けうしろから風が吹く
遣伝子を揺すってみても財は無し
根づまりの仙人掌が割れている
筆に墨つけて新春おめでとう
おところにも女にもある春の色

中 原 諷 人

生誕の地へUターン魚ころろ
福袋あんなに辛苦しても購う
おたがいに花ナデシコの昇り竜
ここに来て油断させない雪になる
図書室の書棚にすわる五七五

西 出 楓 楽

古書店と匂い異なるブックオフ
日本語が花屋の前で通じない
木枯しがヨーロッパから吹いてくる
ありがとうごめんなさいで足るマナー
外堀を埋める相槌打っておく

仁 部 四 郎

如月やわれも八十路の計報欄
如月や寒の卯の玉子飯
如月やなお審議せよ紀元節
如月や就職率を説く社説
如月や則ち迫る年度末

波 多 野 五 楽 庵

海鳴りの哀しさを聞く干鰈
縄とびの一抜け二抜け風ばかり
裏切りのひとつやふたつ桃桜
鮎玉がころころ手紙書き終える
泣いたのは猫か私かきりぎりす

林 瑞枝

雑木山の知恵の木の実がまたぼとり
青春の詩の透き通る皮下注射
軽いジョークで踊る阿呆にバスの旅
笑い袋背負うて虹を観て拍手
美酒に酔い鏡に映し笑むハート

前 たもつ

年賀がわり今年も届く自家野菜
ふる里で鋤打つ友に憧れる
食事三度一度の散歩続かない
電気タクシー小型ながらの乗り心地
神さまと今日も約束して生きる

政 岡 未延子

繕った軒から朝日がよく入る
明日のかたちの雲をほんやりと探す
楽器はないが歌だけは唄ってる
大屋根は黙って朽ちていくらしい
魂が先に寝るからついで寝る

三 宅 保 州

断捨離をしてから隙間風が吹く
夫婦茶碗いつかは欠けるときがくる
言い切ったあとにぽっかり穴が開く
一睡もせずに動いている時計
健康法ならいくらでも知っている

宮 西 弥 生

叱ってほしい身内以外のその人に
華麗さと無縁どきどき南極物語
一つ詫び一つよろこびあるがまま
莫山の文字かすれても詩ごころ
この町も素っぴんも好き黄昏る

三段目

八 木 千 代

帯などが眠る箆笥の三段目
銀色の帯だけ凜としなやかで
戒名を七つも巻いた母の帯
織らねばならぬ母の残した銀の糸
銀という季を戴けてしあわせな

八十田 洞 庵

真実を追うペン弱者への味方
姪に逢う胸のあたりはもう女
出発へ栄転があり左遷あり
笹舟もきつと情けの風に逢う
明日から係長さんと言われる身

両 川 洋 々

隠しポケットの中で目覚めたのは不倫
道半ば幾度も夢を酌ぎこぼす
海の神怒ると万の人が死ぬ
失言が何だ本音を言ったまで
傷口を洗う罪ある手を洗う

板尾岳人

創立八十周年記念日（平成23年12月12日）

米びつの底に愉快な数え唄

あつと言う人生だった恋をして

人生は川柳だった鉄かぶと

愛するひとがいるんだ冬物語

奥田みつ子

五人兄妹急に二人となった暮れ

天空へ祈りか和太鼓ひびく

烈しいひびきまたやわらかに祈りあり

月青く同じ反省するばかり

生かされてしみじみと聞く除夜の鐘

河井庸佑

先読んで今は流れに逆らわず

苦しみに耐えた体験生かす知恵

足下が揺らぎ覚った自己過信

厳しさを堪えトンネルやつと抜け

控えめな挨拶やる気忍ばせる

川上大輪

魂は極彩色にしておこう

ぬり絵から抜けて新種の蝶になる

夢を見たので線香をあげておく

塩胡椒かけても私同じ味

ネクタイを締めてる方が泥棒だ

温故知新

『清水白柳遺句集』より

棟梁と呼んで板前棚のこと

大工の数学曲尺をうらがえし

大工の腕がマナイタにある寿司屋

地団太を踏んで大工は板を替え

板の間へ出前のしずく落される

墨壺と曲尺へお鏡餅置く大工

職人の夫婦カラツとして楽し

茶を出したところで大工めしにする

左官屋は寒波に弱し今日も来ず

一応は裏門も見ると大工の眼

清水白柳

清水白柳

明治38年3月21日 石川県生まれ

大正13年1月 「川柳雑誌」創刊号より投稿

昭和40年9月 「川柳塔」常任理事・編集責任者となる

昭和45年11月12日 逝去

昭和46年7月 「清水白柳遺句集」刊行



川 上 大 輪 選

紀の川市 楠 原 富 子

鍋の蓋こっそり開けて本音聞く

幸せなあの日を語る笑い皺

カラフルな服で演出する老後

新しいドラマほしくて髪染める

遠回りしただけついた知恵の数

喜怒哀楽かるく流して丸くなる

篠山市 酒 井 真 由

海の向こうのスーチーさんへ旗を振る

ひとすじの道が愚直にのびている

飄々と枯野の道を来る人よ

こともなく暮れる師走のカレンダー

てのひらをむすんでひらき明日さぐる

そのうちにきつと脱皮するだろう

河内長野市 針 生 和 代

古い二人師走の家事はアンダンテ

震災が絆の重み目覚めさせ

ケータイの進歩についてゆけぬ脳

煩惱にまだまだ溺れる古希の坂

本音しか言えない雑魚の疵だらけ

米を研ぐ明日という日を予約する

大阪市 高 杉 力

御堂筋の銀杏ですとお裾分け

持っていない者の強みか低金利

マニユアルの通りでデート味気ない

お好みの大きい方を僕にくれ

スリム器具販売員が痩せてない

こっちにも貼ってよ半額のシール

松江市 福 間 左 余

落とし穴一つ二つは覚悟する

いい気分底の底から湧くファイト

言うべきは言って首っこ気にしない

頼まれりゃよしと一言肝っ玉

言い訳はしない判る日楽しみに

平静さ装っているだけのこと

宇部市 高山 清子

身の丈を承知していて夢を追ひ

直球を投げて煙たい人にされ

活力のあつた昭和に戻りたい

ほほ笑まし賀状に一句添えられて

建前と本音で浮世立ち泳ぎ

嫁が目で急ブレーキをかけている

備前市 森 ふみか

小春日和湿つた記憶乾してやる

冷凍魚まだ言いたりぬ事がある

喜んだままで終つたお約束

空っぽの頭が口にチャックする

またバスタ何も言わずに食べている

あぶられて秘密吐き出すピスタチオ

神戸市 新保 登美子

テキストをひらくと重くなるまぶた

晴れ着にも負けぬネイルの色模様

力作が揃つて霞む自信作

街路樹も両手広げて春を待つ

ひとつ屋根下で電波が入り乱れ

着こなせぬ晴れ着が闊歩する平和

岡山市 工藤 千代子

会いにくてくれた素顔だ信じねば

ひと休みしろよ真面目な換気扇

手の届くあたり胃薬置いてある

切り札を落としたらしい猫の髭

凭れてもいいかと壁に聞いてみる

反対と言えずグラスは伏せている

美作市 小林 妻子

傷口は見せず身に沁む虎落笛

言い訳も忘れて今日をまっしぐら

身の内にまだ捨て切れぬものを抱く

祝米寿ローソクを消す総入歯

神妙な顔見逃さぬ妻が居る

夫婦劇まだ緞帳は下りずいる

大阪府 神野 千恵子

ついついと力が入る齒科の椅子

体力が落ちてますます口達者

道草の楽しみがあり辞書を引く

高所恐怖だからずーっと平でいる

距離感を消した屋台のコップ酒

底冷えがしてる世界のあちこちで

福島県 七ツ森 客山

朝一の笑いが笑い呼び集め

得した気分半値のパンも同じ味

辛辣な言葉ドングリ姦しい

節電の待合室で眠くなる

美しいカーブ描いて寒波来る

菓子折が謝罪の顔で届けられ

豊橋市 藤田千休

気紛れな運がわが家を迂回する

民放に鬼より怖い視聴率

ひとすじに妻を愛して疎まれる

日光を避けた萌やしがよく伸びる

大空の夢は捨てない千羽鶴

大阪市 松田聰

ネクタイに気合をかけて朝を出る

不景氣らしいDMばかりあるポスト

ゆずられた席うれしさとさみしさと

ブレッシャー感じてるのか胃が痛む

鼻歌が風呂から洩れてくる平和

大阪市 田中都

あの噂もうあんなところまで翔び

上出来の今日の手料理酒すすむ

テレビ料理も見すぎると胃がもたれ

この頃は予定も立てず日をおくる

考えは行きつ戻りつ寝てしまひ

堺市 羽田野洋介

連休明け話題の多い朝の駅

遊び癖一度ついたら戻れない

ひまあるかなんて聞く友もつとひま

飲む友と歌う友とを使い分け

自分史のハッピーエンド祈るだけ

堺市 澤井敏治

見上げてる塔も私も空の下

氷囊の揺れる向こうに母の笑み

酔ったときだけ人間の顔になる

鬼は外豆を拾って帰るパパ

流れ星祈り損ねた遠い日日

池田市 上山堅坊

辛抱もボツリとこぼす愚痴ひとつ

廃屋が誰かきてよと待つ田舎

ひょいと食う道草にある粋な味

原発被害ピリオド打てる日はいつか

切れ味が良すぎる人へ距離をおく

貝塚市 石田ひろ子

担がれてあげよう君が好きだから

嫁いだ娘今日は他人の顔で来る

ストレスをなれば花月へ置いて来る

名月を一緒に見よと呼ぶ芒

今喋る訳にはいかん蟹がある

河内長野市 松岡篤

親のよりペットの墓に足繁く

お母さんパパの料理の筋いかが

ええ話している時に電池切れ

婚活に期限は無いというけれど

孫叱る目が笑ってるお爺ちゃん

河内長野市 梶原弘光

豊中市 貝塚正子

これ程に厄介だとはシーベルト
テレビよりラジオのテンポ合うて来た
味を占め定刻に来る余所のネコ
信頼の回復という常套語

忘年会あれ止めというこれは出よ

河内長野市 木見谷孝代

百歳の編んだ詩集が色褪せぬ
ぐずぐずとした子に今はせかされる
泣き笑い畳のシミが知っている
やんわりと笑顔で本音はぐらかす
友ひとり居れば孤独を免れる

河内長野市 谷久美子

カラオケの調子外れも御愛嬌(長柳会時行)
朝寝坊する子の時計進めとく
考え中横で気の散る大欠伸
揺れ動く心に歯止め髪を切る
いい夢を見たい枕を買い替える

高槻市 田中由美子

お隣と低い垣根で続く縁
貧乏神も笑い声まで取りあげぬ
体形にグルメ志向と書いてある
他人から夫の噂聞くシヨック
告白の形で溶ける角砂糖

ミシユランもB級も好き食いしん坊
流し目を目医者に行けと言う亭主
おみくじの願いかなうを信じたい
一升瓶昔は米もついたつけ
味よりもボトルに引かれワイン買う

豊中市 池田純子

頬染める時だつてある更年期
タイマーが幅を効かせる台所
番外を生きてみたいと言った父
カチコチと時計生きてる雪の夜
母さんが喜びそうなか月

寝屋川市 岡本勲

人並みの理屈じゃ勝てぬ口喧嘩
そばに居て一途な独楽を支えてる
相棒に花をもたせている余裕
お返しは土のおいのする野菜
駄菓子屋に昭和の空気吸いに行く

東大阪市 西田いくひろ

ここ一番惜しみ後悔してしまう
信念がないと心が揺れ動く
忍び逢うドラマにじつと目をこらす
テーブルのマナーで分かる品の良さ
人並に暮らし野心を抱いている

箕面市 酒井 紀子

つば広の帽子被ればバグマン
老いてなお華になりたし鏡みる
恋という常備薬もちウツに勝つ
極上の睡眠素肌美人です
超元氣古希喜寿卒寿ジム通い

神戸市 白川 淑子

家中の内緒濾過する母の耳
バラバラの糸たぐり寄せ現在地
一步また一步を綴る一行詩
境内の落葉踏みしめ懺悔道
ホワイトクリスマス最後の恋に成る予感

神戸市 能勢 利子

ひきこもりを開く鍵を探してる
宮参り主役ぐつすり眠ってる
晴れ着より喪服の出番多くなる
友が住む街のニュースは目に止まる
食べさせる人がいないと手抜きです

神戸市 木村 忠義

禁酒して御飯はうまいなとわかる
幸せは日本生まれ和食好き
廉価だと思えば百グラム当たり
気晴らしに紅白の饅頭を買う
百まで生きたい生きたくないでもめ

尼崎市 田原 一兆

年の瀬になり煩惱がふえてくる
父に似た癖出始める筆運び
初志貫徹支えてるのは意地ひと字
仕付け糸残る形見を胸に抱く
あれ以来口挟ませぬ妻の意地

川西市 山口 不動

肺癌の疑い晴れてタバコ吸う
目が覚めておはようと言う悦びよ
ひやかしにボーカーフェイス返してる
全没をとげた顔でやり過し
この世にてまた合う日までお元気で

三田市 上田 ひとみ

春四月お嫁に行ってしまうんだ
ほうらまた泣いているから冷たい手
とりあえず荷物へらしていきましよう
遠くから小さな荷物送ります
忘れて下さい 私のひとりごと

西宮市 株元 玲子

新年は龍につかまり上りたい
今のうちいまのうちにと駈けている
熟れた柿落ちないうちが華だよね
秋空のよう気まぐれに生きてみる
成り行にまかせてみたら案外だ

西宮市 泉水 冴子

和歌山県 森下 よりこ

どう化けてみてもやっぱり妻帯者
投函をしてから字足らずに気づく
人間に飽きても猿に戻れない
他人には見せられませんが台所
鉛筆を持ってなくなつてキーボード

紀の川市 北山 絹子

自分史の中に詰まつた運不運
休憩をきつちり取っているパート
爆笑の渦に自分を見失う
天敵に悟られそうな位置にいる
フルムーン鞆に愛を詰めている

紀の川市 宇野 幹子

隙間から鬼がときどき出入りする
まぼろしの愛が砕けた万華鏡
方便の嘘なら通す喉仏
泥くさい両手宝として生きる
生き様を積んで夫婦のエピローグ

橋本市 石田 隆彦

ありのまま生きてゆくのも難しい
年金の買い物ゼロは三桁まで
無駄にした時間を惜しむ年の暮れ
ルビ無しで読めない今の子の名前
底力ためていそうなたっ腹

落葉かさこそ誰にも会わぬ山の道
守らねば人も畑も荒れてゆく
打てば響くようなお人で気忙しい
男靴玄関先に置いておく
おいしかったと自分に言つて箸を置く

雲南市 武島 ちよえ

贅沢は朝のお風呂が呼びに来る
退屈な日もありました冬木立
いい友を持つて自慢の種にする
黄昏の脳には無理を言わないで
笹舟の一寸先が分らない

竹原市 國實 力

もういち度試着室へ入るのかい
ウン旨い歳暮はこれに決めようよ
読まれたら困る日記を書いている
世界地図今日はここらが揉めている
手紙一読チラシ乱読しています

阿波市 三浦 千津子

勢いの萎えた初心を陽にさらす
時々は黙秘を武器の処世術
辛抱の仕方も変えた世の流れ
した覚えのない約束に借り出され
花談義道ゆく人と懇ろに

今治市 渡邊 伊津志

役得という裏門は開けておき
忘れたいことは覚えてゐる頭腦
氣に食わぬ風も柳はお辞儀する
太陽が梅干の味深くする
頷いて聞く言い訳とその嘘も

四国中央市 篠原 久

わたくしを茹でればきつと灰汁が出る
牡丹さくら寒に咲くのもいいじゃない
嘘つかぬ鏡私は氣に入らぬ
我が輩は猫でねずみは獲りません
銀杏ハラハラけじめをつける十二月

香南市 桑名 孝雄

清濁の濁がじわつと効いてきた
銀座と高知比べても詮ない格差
外苑のいちよう並木へ妻を置く
刎頸の友が盃口にせず
しつかりしろよ明日は我が身と思いつつ

札幌市 佐藤 登美子

四島もキリトリ線の上で揺れ
次世代へ遺言めいた箇条書
三食をキムチ三昧胃にもたれ
亡母の名と重ね合わせて菊花展
人情も絆も切れぬ裁ち鋏

塩竈市 木田 比呂朗

去年より力のこもる鬼やらい
弾み過ぎああ迎春のスニーカー
パソコンに朝から相手してもらい
腰痛も加齢ですねで一括り
二日酔い薬のように梅茶づけ

横浜市 巖田 かず枝

惚け防止青い魚と好奇心
心配の種神様に預けてる
内緒事口は堅いが氣が弱い
六十路でも磨けば光るかもしれぬ
狭い家大きな声の老い二人

佐渡市 高野 不二

連続ドラマ明日のために見ておこう
宝くじやつぱり誰かには当る
大臣が俺より馬鹿な事を言う
考えて考え捨てるものはない
こたつから見る初雪は美しい

富山市 有澤 嘉晃

溜めていた涙感謝へ流れ出す
やけ酒のコップは何も語らない
読点も句点も付けずよく話す
独り言少し鎮まる腹の虫
年賀状書くと飲みたくなってくる

京都市 清水英旺

この先は曖昧模糊の一里塚
今に見る俄然闘志がわいてきた
ケータイが第二の脳になっている
人誰しも心に重い石を持つ

大阪市 太田としお

無力でも出来ます神に祈ること
これ以上国に頼ると破産する
嘘をつく猫も議員もお天気も
初春は床屋に行った頭から

大阪市 吉田知之

ユニセフに老いもちよっぴり寄付をする
新聞のコラム領くことばかり
グルメテレビ旨い旨いが嫌になる
忘年会に忙しい頃が華

大阪市 前川善之

旅先で見知らぬ人の愚痴を聞く
株下がり年金下がり上がる税
人生は百点の無い答案紙
夫婦ならあれこれそれで分かるはず

大阪市 柴本ばっは

腹割った話二ン月底冷える
言い訳にやったお咳が本ものに
ちぐはぐに帰るその後のあの二人
つりあいとはとれてなくても愛強し

大阪市 浅井公平

庭の木と私どちらが長生きか
我が庭と思ひ公園いとおしい
折角の休み昼酒天国だ
どないしよ美女のとなりにすわろうか

大阪市 阿野寿美子

仕事ミス溜息ばかりしておれぬ
町会の役は回ってくるのです
一人立ちして身に沁みる親の恩
模範生門限破りしたかろう

大阪市 吉川弘泰

暇潰しのれんを分けて友と会い
時々涙を出して目の掃除
寝過ごしていつものバスに乗り遅れ
レンズから見える彼女は別人に

大阪市 安田由美子

なにわ筋銀杏の色が薄汚れ
都構想なるかならぬか大阪都
チャリティーの花輪に群れる女達
甘栗をいらんといいつつひとつ ふたつ

大阪市 西川冷子

おじぎ草真似して生きる裏の顔
主逝って年金削除こんなにも
物事は解釈だけでゆがむもの
逝ってからやさしさ増した母がいる

大阪市 平井露芳

睡眠薬のんでる夢で目を覚まし
ベランダに灯油を運ぶ車欲し
廃校も一時避難に役に立ち
枯れぬよう五体に水を先ず補給

大阪市 木村青生

喫煙者納税しながら隔離され
神主の祝詞は初婚の時のまま
一人鍋豆腐がブツブツ話し出す
冷たい手していて寿司屋に喜ばれ

堺市 増田和幸

地球号七十億人乗組員
日米欧いずこも満身創痍です
一バーのセレブ以外はみな貧困
株売買いつでも理由あとでつけ

堺市 近藤治子

欲しいもの一つつかんで一つ捨て
ウォーキング小春日和に歩がすすむ
幸福度高めてくれる家族の和
若者の歌早口で歌えない

池田市 多田契子

一年の計一月に置き忘れ
時々銃撃つ私評論家
恐ろしい別途あれこれ請求書
質の良い睡眠取れという羊

泉大津市 助川和美

節電やコンビニ夜は眠つたら
古本屋私の心ノックする
どっこいしょ言うてる母に感謝する
神様に合格させて十円で

泉佐野市 稲葉洋

梵鐘の余韻が過去を振り向かす
抑揚が昭和ごろを呼ぶ演歌
首すくめ黄泉路は斯くや寒の闇
そのままがいいよ人間味が出てる

交野市 田岡久幸

電話から世のむつかしさなだれこむ
袖カバーつけて流しに立つおいら
大根の値段を話すようになり
冬物の重たさ今日の暑さかな

河内長野市 辻村ヒロ

カラオケで新曲習い老い予防
病名は沢山持つて生きてます
よく似てる背中の丸み老夫婦
嫁いだ子忘れていない母の味

河内長野市 黒岩靖博

朝あけの霜にも負けず恋メール
紅に燃える夕日にシルエット
待ちわびる息子の電話定期便
旗上げて蟻の行列ツアー旅

河内長野市 宮 守 正 博

高いびきかいてる妻がいて平和
愛してる嘘なら言える愛してる
手相ではとおに出世をしてるはず
妥協することで覚えた出世術

河内長野市 山 本 エ ミ

話すたび孤独ほぐれる趣味仲間
達者だな楷書の文字のいい賀状
美味い物食べる前には出る笑顔
川柳に猪突猛進今日終わる

河内長野市 八 木 加 修 子

温暖化世界で荷物押しつける
9ヶ月残した荷物さらに増え
古希近くやさしい気持ちあわせに
このままではやっていけない消費税

岸和田市 中 岡 香 代

制服を脱いだら父の顔になる
一本の私が見ていた大津波
節電にたっぷり手抜き家事育児
生きたる術作り笑顔で生き残る

岸和田市 増 田 隆 昭

オアシスは飲み屋じつくり灰汁を抜く
クジ引きに負けて自治会長にされ
出世した友に近寄り難くなる
農民の歴史を語る千枚田

吹田市 蔵 田 光 子

ママ帰宅パツと明るく子が爆ぐ
母のない古里遠くなつて行く
母の味娘にも伝わるせち料理
子に頼りたよられながら老いの道

豊中市 源 田 啓 生

飢餓感がそうさせているてんこ盛り
七十億の中でたらふく食べている
虚勢張れど足の衰え隠せない
秋天の山で食べたいにぎり飯

豊中市 石 橋 優 明

叱られて靴べらみたいな舌を出す
獅子舞の口がのみ込む定期券
茶を飲んで湯呑みの底に下りてゆく
心経を口ずさみつつ蟻つぶす

豊中市 久 高 賢 市

出涸らしの急須に残す自尊心
立ち位置がまだ定まらぬ独り言
金木犀香の図々しさを見做おう
真実が含まれてるかその記憶

富田林市 関 よし み

球根たちが一斉に未来見た
春の雫で闘志湧き出るチューリップ
一枚のメモが湯槽に浮かんでる
春の風私の彩を探してる

富田林市 山野寿之

結び目を解く勇氣が玉手箱
埋み火が僅かな風を待っている
数珠つなぎ絆の端を切りたがる
アップルパイ真ん中辺に落とし穴

寝屋川市 小谷滋彦

何事も絆あつての未来あり
先輩をちゃんづけで呼ぶ懇親会
後輩に呼び捨てならぬ激励会
すす払い心の窓も拭いておく

羽曳野市 安本美喜

羽子板と嫁いで来たの八十歳
お年玉貯めて買ったのオリンパス
今日も生き明日の来ること祈ります
風花や女子マラソンの駆け抜けし

羽曳野市 安芸田泰子

目分量は学びきれない母の味
義理一つ果した今日の軽い足
携帯に案内された待合せ
ここだけの話を風がもてあそぶ

羽曳野市 磯本洋一

つまずいて段差のなさにがつくりと
朝冷えに脇を固める散歩道
旅先で地酒が香る古民家よ
子等騒ぐベンキ塗り立て滑り台

阪南市 坂口公子

誇つてたあの紅葉の山の貌
騒々に一寸隠れて居たメモ帖
切り取って画いて来たけどぬるい筆
芦原の枯れて真冬を取りこぼす

枚方市 小川良吉

歳重ね賀状が生きるあかしです
友の賀状手書きの温み待っている
御無沙汰の友の顔みる年賀状
故郷が近くなります年賀状

枚方市 坂本ミヨノ

飲み足ると虚栄の花が飛び散って
物欲が潔く消え妻が居る
熱燗でさっぱりタコ酢あと佗しい
日々好日趣味多彩夫マイペース

枚方市 河田洋子

無農薬虫と人との知恵くらべ
食卓にいつも安堵の自家野菜
一口が食べておいしい歳になる
家計簿はただレシートを写すだけ

松原市 市川雄太

もうやめて大型補強意味がない
日曜は電車に乗って旅に行く
ヒマならば新聞配れ言いたなる
人生の終着駅はまだ遠い

箕面市 寺井柳童

吊橋に足が疎んで動けない
節電に家族まとまり鍋囲む
節電に湯たんば抱え早寝する
亡き人の思い出更に喪の葉書

八尾市 山根妙子

券売機促すような後のひと
五七五指を折つて前の人
発車前硬貨ころころ逃げちゃった
トマト色沈む夕陽にサラダ雲

八尾市 前田紀雄

鍋囲む地産地消で恙無く
七巡目身仕度せよと閻魔殿
今年こそ平穩無事な世の中に
無言でも父の背には歴史有る

八尾市 田邊浩三

寒い朝散歩中止を悟るボチ
井戸端会議あくびして待つ散歩犬
ボチの風邪オレの時より大騒ぎ
年金が静かに暮らせと言っている

大阪府 小栢こずえ

ウインドに映る姿が恥ずかしい
気合い入れ今日の舞台に立ち向う
鉢花も部屋に取り込み冬ごもり
狂う程欲しかった物今は邪魔

大阪府 若月祐作

犬散歩用だけ足して連れ戻る
秋の夜長小説読んで冴え返る
唐突に初恋の女夢枕
全没に脳の限界知らされる

大阪府 中井記久乃

ニット編むあの子の顔を目に浮かべ
夫婦箸好き嫌いなし進む食
股関節不具合治し晴れ晴れと
年重ね思うそばから忘れ物

大阪府 高木道子

「面白い恋人」買ってよう喋る
ブリケンにまたタッチして期待して
変えてほしい変わってほしい市民から
裸木の向こうモノクロ無言劇

大阪府 畑中節子

一人居に癒しの便り孫の文
傘立ての下から聞こゆ秋の虫
忙しさ元氣な証しとあてにされ
老いて今なす事すべてリハビリね

神戸市 山根弘子

美人ママ正体見せぬカウンター
一隅を照らす心の月あかり
飛び出した友の頓知に癒されて
正体を知ってむなしい恋心

尼崎市 小池 幸子

外出とわかるか猫がおちつかぬ
我が庭も移ろう四季のさま変わり
欠ける月待ちきれなくて寝てしまふ
今年こそジャンボを買って成金に

尼崎市 市坪 武臣

友の死を黙祷で知るクラス会
節電に何処吹く風とパチンコ屋
梅地下を近道すればまた迷路
竹林を歩けば気分引き締まる

加東市 黒崎 美紗子

久しぶり会話つきない女性会
年金の身の丈に合う暮しぶり
宅急便林檎のかおり友しのぶ
朝夕の寒さあわてて衣替え

加東市 岩本 美緒子

節電に遠慮はしない八十の指
騙されるはどっちうやむや呆けたナ
映す山春夏秋冬愛してる
短冊画走る雲竜春の干支

川西市 日野岡 和之

幸せは毎日続く普通の日
最後尾先頭にはない残り福
おもいやり温もり合わせ古希の春
厳し世もしなやかに生きながらえる

篠山市 谷田 多美子

遺言書書く気になれずすす払い
大阪の元氣もらって湧く闘志
十二月八日忘れられない海征かば
揉めている年金が飛ぶ年の暮れ

篠山市 酒井 健二

心療医コップ持たせて長回顧
臆病である証明に今日がある
酌一つ気楽に出来ぬわだかまり
黒い手の酌を受けてる白い指

篠山市 石田 久子

重心をやんわり落すお付合い
新しい希望が重いランドセル
年ごとに年賀の数がへっていく
茶柱が立って笑顔にしてくれる

篠山市 沢山 啓子

どのように転んでみても草の種
赤いしかばねの上に自由という城
涙色流行色の赤い色
腐るまで句を作りたや割烹着

三田市 雑賀 一泉

熱燗のツマミに代わる夢ロマン
里山に思い出したくない戦時
人生は元に戻れぬ夢舞台
贈り物エビで鯛釣る下心

三田市 辻 開子

週末の孫帰省待ち布団干す
旅づかれ茶漬けがくれた癒し膳
合席がおもわぬ会話弾ませる
グルメ狂 気がつく脂肪もおとりよせ

三田市 尾崎 一子

病から解き放されて見る笑顔
大勢を集めた仏永久の愛
子育てにもらったほうびは顔の皺
酒をつぐ今日一日の幸紡ぐ

篠山市 永井 かほる

冬野菜寒波にたえて美味になり
冬きらい血圧計があばれ出す
冬至待つ日の短さに困る日々
種蒔いて友と未来を語り合う

宝塚市 丸山 孔一

クラス会誰も再会疑わず
そんなこと言うても無理なことは無理
柳誌来たら先ずは編集後記から
白内障女医が言うから手術決め

三木市 山口 久子

節電に湯タンポふたつ抱いて寝る
霜月に未だ霜なし温暖化
主なくも庭の紅葉は赤くなり
古都奈良の紅葉が映える室生寺

奈良市 大久保 真澄

省エネを殺し文句に売る企業
何年も取り組んでますダイエット
鼻先に人參揺れてひた走る
私には過ぎた人だと思える日

奈良市 矢野 良一

ナツメロに昭和がもどる喫茶店
メールなら本音が言える娘と親父
病氣して家族の絆深くなる
孫に似たナースの笑みに癒される

奈良市 前田 弘恵

コマーシャル イチオクターブ高くなり
マニフェスト選挙用だと今気付き
アルバムを開いて孤独慰める
マスコミを避けてどじょうは保身する

奈良市 尾畑 なを江

今日もまた仮面と仮面にらめっこ
ローソクは孫が吹き消す誕生日
片付けて見覚えのある忘れ物
手抜きして今日は寒いと鍋にする

奈良県 谷川 憲

幾星霜祈り捧げる白杵仏
いつまでもチクチク痛む過去の咎
GPSに夜遊びの場所ばらされる
千枚田流した汗に美味実る

和歌山市 坂部 かずみ

大勢が携帯ばかり見る電車
冬眠の前に充分遊んどく

テレビ付け座ったままでする昼寝
計算のとおりにゆかぬ茶碗蒸し

和歌山市 磯部 義雄

粗茶ですが出された茶器に目を見張る
ファックスを送り確認する電話

川柳に興味示さぬ妻と棲む
大家らの書籍枕にして昼寝

和歌山市 土屋 起世子

やるだけはやった采配不満なし
まだ老いぬ五欲しっかり肚にある

迷い道影が離れず付いて来る
日記帳陽気にくらし書き綴る

岩出市 村中 悦男

連れ添うて六十年の重い年

二人だけの水炊きもよし核家族
水炊きのゆげの向かいに妻の笑み

妻のいうままに料理をして介護

海南市 小谷 小雪

お互いの手元にゆるい赤い糸
正解の許容範囲を広くする

エプロンを外し一日を査定する
だんだんとゆるめになって基本線

紀の川市 辻内 次根

病人がでると植木の鉢が枯れ
晴れ曇り予報は雨になっていく
洗濯を部屋に吊るして雨の音
しっかりと開けて地獄も見ておこう

田辺市 大峠 可動

河は流れて春の字を探す

我が影の折り直立不動して
老々の旅路を夫婦支え合い
歳月を過去形にして流れ星

鳥取市 坂本 とも湖

一枚のガラスに恋を閉じ込める
黄金の稲穂重たい首になる

透明なガラスが見ぬく我が暮らし
帰り道句も抜け靴は弾みだす

鳥取市 津村 律子

家を出る程でもないが波が立つ

新宿へ夜行列車でうさ晴らす
痴話喧嘩出来るあなたをお世話する

グシャグシャのネクタイで飲むあんなもな

鳥取市 近藤 秋星

流行語大賞やつぱりなでしこか
紅葉の中で際立つナナカマド

日帰り旅行姫路の象に逢って来た
私にも使命があつて生かされる

鳥取市 松原ひとみ

年末の頼まれ事に身構える
口の災い教えてくれる政治屋さん
言い訳にお詫びの気持ちばかりかされる
電飾のスイッチ迷う節電時

鳥取市 山口千代子

九十三亡母の歳より倍も生き
顔や着るもの氣にする頃はまだ元氣
年金者ボーナスなんて聞くだけで
無職でも土日になれば氣が休む

鳥取市 大前安子

師を仰ぎ雲の流れを見ました
空の井戸老いて来る師へあわて掘り
井の水を飲ませてくれる師の背見る
師の井戸はつきない水がほとばしる

境港市 中井虎尾

動く雲われは不動と天守閣
秋空をながめて歩きつまずいた
重い税貧乏ゆすりじゃおませんか
法知らぬ自転車乗りに切るキップ

米子市 生田寒之

鯖で良し鰯なお良し老いの食
干し柿の乾かぬ秋に小雪降る
年末のジャンボに無理を持ちかける
伸び代があつた昭和も遠くなり

米子市 野川宣子

不要品捨てたが夢で追いかける
身の程を知らぬ願いを長長と
掛軸の竜が夜な夜な逃避行
いつまでもハート開いて待っています

米子市 山本ふみ子

老け具合確認しあう同期会
三度目の顔にお面をつけて行く
お互いに正体伏せて探り合い
雪が降るまでにやること書き留める

米子市 加藤正二

長生きを自慢するほど苦労した
自分史を書くのをやめた愚痴が出る
一番も二番もないよ独り風呂
マイペースだんだんずれる老いの日日

米子市 後藤宏之

禁煙の誓いしばらく中止する
財力に縋るナメくらう商店街
繕って繕って行く人の道
形見分けサイズは私が合わせます

米子市 見山温子

金の成る木枯れたと夫が釘をさす
秋茄子煮嫁にも少しおすそ分け
うたた寝の夫の背に老い見せられる
橋の上風と戦う車椅子

米子市 湯 浅 久 司

後輩に抜かれてできた道を行く
柚の葉が今年も敗けたアゲハ蝶
野良猫の道に我が家が建っている
山陰と名付けられても住んでいる

米子市 田 村 周 子

体調のよい日えらんで散歩する
もう師走何の用意もないままに
くだらない事考えまいといい聞かせ
人間に不要品などおりませぬ

米子市 小 塩 智 加 恵

孫と嫁同じスタイル短パンツ
救急車どこに向かうか耳すます
消防車近所にボヤが続いてる
大根が鍋で踊る日待っている

鳥取県 加 賀 田 志 延

他人様へこんなに泣けた年は無い
災難を見ても不平は減ってない
小物だけどんどん派手になっていく
総決算夫へつけた不可ひとつ

鳥取県 岡 村 孝 明

もつれ糸愛をささやきほどけてる
切り干しが軒に吊るされ出番待つ
しんみりの後は賑やか葬の席
どぶろくの壺も日がたち飲み頃に

鳥取県 橋 谷 静 江

今日もまた老いのリズムは朝早い
自家農園野菜は味で勝負する
螺子巻いて自分元気に誘いだす
犬の目を見てしっかりと通じ合う

鳥取県 下 田 茂 登 子

八十路来て夫婦の謎が解けぬまま
あの顔は仏になつていなかった
あの事に触れると赤い風になる
相槌の途中で変わる風の色

鳥取県 飯 野 菖 子

さっぱりとした性格に引かれます
満月に心の闇を洗われる
明日のこと分からぬこの世今日生きる
日々祈る未来の子等の幸せを

鳥取県 大 塚 美 代 子

言葉尻捉えて喧嘩ふっかける
本心がひよいと顔出す言葉尻
神仏の力を五円で頼み込む
喜怒哀楽金の力が何時も付く

松江市 相 見 柳 歩

君を呼ぶいちオクターブ高くなる
砂時計ようやく姿見えません
ユニクロにサイズなくても泣かないよ
見た目よりこころはビッグサイズです

楽しさの余韻ひきずる同窓会

松江市 山根邦代

鍵かけたまた見回して床につく
電話には元気な声で出ています
冬空が泣き出しそうな色になり

松江市 藤井寿代

冬の空私も同じ鉛色

村守る親父の顔でいちようの木
惚けたふり上手くなったと褒められる
何かいい事ありそうな向こう岸

出雲市 黒目英男

マイペース自分の道をひた歩く
物忘れ時たまあつて覚悟する
閑古鳥鳴いてさびしい大相撲
夢うつつ遠大な夢叶えたい

雲南市 菅田かつ子

亡き後はどう生きるかと聞くあなた
大笑いした日のわたし青い空
とか言うていちばん待つて居るあなた
さりげないジョークの中にある本音

安来市 原 煩惱児

ばらばらの五体でいのち神仏
独居老瘦せよやせよと主治医から
神在月出雲は便利神頼み
年金とヘルパーさんに生かされる

点打って新たな扉開けてみる

岡山市 藤成操江

千羽目の鶴のエールが耳底に
大波も小波も受けてきた両手
二幕目を気負いすぎてる肩の凝り

倉吉市 前田喜美子

今日も無事明日を信じて米を研ぐ
先生も広場でボール打つ仲間
八十路来てサイズ測れぬ腰まわり
口達者世事には暗くなつて老い

倉吉市 田中紀美恵

プライドは捨てろと脳が指令出す
ポトリポトリ点滴落ちて生かされる
白寿の春恋もしながら生きて行く
父母からのもらった命生きなきゃあ

広島市 岸本清

人も地も断層抱え生きている
お似合いと言われる服が爺くさい
問い質し涙の粒に絆される
離陸して粒になるまで見届ける

竹原市 六田半徳

片づけは妻と二人で協議中
どじょうなら今こそド口を跳ね返せ
月食を見た兄弟の夢奪う
増えそうな強運神社初詣

竹原市 土井 輝 恵

北九州市 小松 紀子

呑み込んだ葉が血圧上げてくる
自分史を書く宿題は延びのびに
仕切り癖老人会で世話役に
大器晩成期待は子から孫へ行く

竹原市 若年 幸子

公衆電話確かここにも有った箸

砂浜へ大笑いする土踏まず

銀杏を拾い車に置場無い

ずっとずっとと連れ添う願い箸二膳

山口市 中前 幸子

自由市場で熟した愛を買ってくる

空転の思索セピアの風を呼ぶ

風の岬へ昔はなしを提げて行く

単細胞ばかりだ急ぐことはない

松山市 神野 きつこ

瀬戸内の冬はいいぞと鯛ご飯

歳かさね良いも悪いも飲み込んだ

黒田節父の笑顔を思い出す

カラオケで憂さを晴らした年の暮れ

大洲市 花岡 順子

一歩引くことから視野を広くする

あちこちを拾い落ち込む遠い耳

手伝いを邪魔にされてる大掃除

生きてきた証一行詩を綴る

ひと呼吸おけば良かった遅かった

忘年会最後一切れ残る皿

お早うさん犬は私を散歩させ

またやった笑うしかない老いのミス

福岡県 本田 さくら

宝くじ東日本へ送る夢

しあわせがボトリと落ちたあの時刻

髪型を変えた彼女に惚れ直す

ゴミ袋たまる袋は高いのに

唐津市 北村 松風

あの人と逢える予感の遠回り

お茶だけで心ときめく友がいる

お世辞でも美人と褒めてくれた人

風評の被害に泣いた季の野菜

唐津市 吉富 節子

文明の利器が自然を破壊する

ああしんど横になったら夢の国

乾杯を曾孫ジュースで誕生日

幸せだ期限ある食戦中派

唐津市 岩崎 實

まだまだがとうとうきたか物忘れ

患者席呼ばれないのにドア叩き

靴時計取り替えられたまま師走

車椅子名所旧跡娘婿

山鹿市 三谷 たん吉

楽しみは家族以外と家族風呂
喜寿過ぎて不倫とされずあら元氣
反省をどれからするか迷つて
聞きたくも見たくもないのにテレビつけ

山鹿市 米加田 恭代

この歳で叱られるから有難い
生意気な口をきくのも甘えから
この歳になつても親は越えられず
潔く謝れるから気持ちいい

シドニー 坂上 のり子

未だ紅葉なのに紅葉売るツアー
妻の目の届かぬ旅の旨い酒
猫抱いて猫のこころの揺らぎ知る
頑固一徹なんて心が狭いんだ

弘前市 高森 一 春

辛い酒酔うて時間を止める針
恥じらいをチビリチビリとオチヨコ出す
にんまりと戸棚の奥に一升瓶
結び目を開くと謎が解けてくる

弘前市 稲見 則彦

水平線そこにアナタが棲んでいる
付きまとう影があるから明日がある
今日の運全部吸い取るクリーナー
紅葉浮く旅の宿でのひとつ風呂

弘前市 高橋 洋子

私には充電ランプ点き通し
風邪に寝て妻は暫しの休火山
微笑みにほほ笑み返す介護の目
炊飯の匂いで目覚め冬の底

昭島市 野口 忠

風評に今夜も眠れないかかし
増税と聞いて財布が縮こまる
ソプラノが仕切るわが家は今日も晴
ボンジュールだけでバリ中闊歩する

日野市 大竹 一 良

衣替え勿体ないとまたしまい
嫌なこと忘れずに持つ情けなさ
ちよつとだけ皮肉を言つて惚けた顔
米寿すぎ力抜いての筆はこび

東京都 高岡 弥生

間違つて桜の花も開花する
目に見えぬ自分の流れ感じてる
死ぬまでは子の心配は終わらない
物を買う時だけ我が子よく喋る

東京都 岸 愛三

自転車走る歩道に立ちすくむ
有名というが私は存じません
ひたすらに老人賛歌書いている
生かされてコロリを願う傲慢さ

哲学の道に紅葉と語り合い

東京都 井上 つよし

女性大臣まだ土俵には遠く居る

兎にも角にも葉袋は必需品

ジバングの利かぬのぞみに追い抜かれ

岐阜市 平野 あずま

晩学のペンにインキを継ぎ足して

節電が団欒を生む冬の章

移り気な蝶が造花に恋語る

足の裏ゆっくり語る仕舞い風呂

静岡市 渡辺 芳子

何も彼もかすんで見えて丁度いい

ごみばかり溜って行くや年のくれ

長生きの良い事それとも悪い事

長生きをかんげいされて生きたいな

江南市 脇田 雅美

柿の枝来年見据え切っておく

近すぎて偉いお方とつい知らず

インターホン鳴って慌てる化粧中

筆不精パソコン文字ですみません

愛知県 樺 嶺 志

よい話題浮んだ筈がすぐ忘れ

客いない床屋の椅子で世辞を言う

同期会確かあのひと名が出ない

OB会昔の序列守ってる

朝日なにわ柳壇 今年の十秀

— 23年12月17日 朝日新聞発表 — (太字は本社同人)

最優秀句

川柳塔社理事長 西出 楓楽 選

秀句

間違いを誰も言わない淋しい背

奥田 敏雄

鈍行で時間の無駄に身を任す

梅村 莊八郎

残念と言うがやっぱり汗の量

岩佐 ダン吉

童心に春の小川が流れてる

荻野 浩子

ソクラテスの妻にはちよつとだけ負ける

徳山 みつこ

ほころびに素早い母の針と糸

泉谷 比呂志

痒いのは手の届かない場所ばかり

水野 黒兎

過去帳には入るものかと一万歩

村上 直樹

この度胸父より母のDNA

長滝 谷 保

芳名簿さらさら書いたことがない

岩崎 公誠

最優秀句

番傘川柳本社幹事長 田中 新一 選

辛酸を舐めて優しさ身に染みる

伴 洋子

秀句

我慢みな避けて心に渴く音

笹川 恭子

たつぷりと時間があつて満たされず

合田 瑠美子

心から笑うひと日の爪の色

中川 正子

勝てるはず挑む相手はこの愚生

谷川 徹生

母の手の鳴る方に行き闇を出る

坂 裕之

丸裸になった私を見てもらう

武内 美佐子

父の墓造り直して逝つた兄

樋野 昭信

一心に母がとけこむ子の瞳

遠山 唯教

底辺で泳いでいます楽天家

瀬戸 房子

中島生々庵句抄

(句集『生々楽天』から昭和五十一年発刊)

昭和十五年

後ろ姿拝みたくなる母の老い

馴れたものあれあの注射願います

移り香のまだ残ってる置き手紙

悪筆がこの大臣の取りえなり

薬局に鍵のかかった凄いい棚

飛行機で来たのを母は知らぬなり

聴診器私の胸を聞いてほし

名人と言われて名人びっくりし

粗品とは書いたが内心得意なり

左り前知らせず母を死なせたし

子供的眼まぶしい父となりにつけり

贅沢は拝む心を忘れさせ

昭和十六年

いぶくろは半分捨ててまだ飲む気

随筆が外交秘話に一寸ふれ

足袋つくろい ここにも母の姿あり

遺言のつもり随筆書き続け

貸す方も血の出るような金を借り

母病む(九州在)

ああ今日も日めくり拝む母の無事

俺は医者だそうして母の子でもあり

病む母が俺の夜汽車をいとしがり

表面は茶の会にして両巨頭

子の金に涙のあろう筈はなく

恨むよりこの薄情にあきれてる

誹風柳多留一篇研究 78

山口由昭・小栗清吾
伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦
清 博美

619 さぼてんを買って女房にしかられる

山口 さぼてん【霸王樹、仙人掌】は、さぼてん科の多年草。アメリカ大陸を原産とし、種類がはなだ多い。近世我が国に渡来したが、当時さぼてんとよばれたのは今日『うちわさぼてん』というものの一種である」（『角川古語』）

句意は難しい物はなにもない。何の役にも立たない仙人掌の鉢を買って、無駄遣いを女房に叱られたのである。

よつ程のきけんさぼてん買て来る

安元 625
さはてんを女房たれにか留主にやり

安九松 2

山田 でも、道楽とはもともとそんなもの。この女房、亭主の粋な取り回しを知らないものと見える。

清 賛

620 江戸ツ子にしてハと綱ハはめられる

山口 渡辺綱は源頼光の四天王の一人で、謡曲の『羅生門』では酒宴での話から羅生門へ出かけ見事に鬼神の腕を斬り落とすことになっている。

綱は武蔵守任の孫、父は無冠の充で、武蔵の箕田（後の芝三田）で生まれ、父の死後伯母に伴われて摂津渡辺に住んだことから渡辺姓を名乗る。川柳の世界では実は江戸っ子というところが人気があり、この句もその一

つ。宴席では適當なことを言ったが、実績を証明したと褒められたというもの。陰に「江戸っ子は口先ばかり腸は無し」という俚諺が下敷きになっているか。

四天王寺人リハ玉の 一五四九
つわもの、ましわり一人江戸なまり

清 賛

一〇六三

621 女房をしぼって奈良茶喰って居る

山口 「奈良茶」は川崎名物で、六郷川の近くにあった万年屋の「奈良茶漬け」のこと。さすればこの女房は鎌倉の縁切り寺東慶寺を目標して出奔した女房であろう。しかし、六郷の渡しあたりであえなく追っ手に捕らわれ、縛られてしまった。亭主はその女房を尻目に悠々と名物の茶飯を食っているのである。

事情は分かれぬが憎体な図である。

女房をなら茶の中てつかまへる 安元信 1
まんぢうハ鶴見なら茶ハ万年屋

清 賛

菊丈文明 10 5

622 かんとうのゆりた祝ひに又こける

山口 「ゆりた」は動詞「ゆりる」(罪または禁止、制限などがゆるされる。赦免される)「(日国)」の過去形で、勘当を許された息子がその祝いにまた羽目を外したというのである。祝い酒に酔ってまた吉原へでも行ったのだろうか。

勘当がゆりて今日■日向タもの 宝八五
かん当かゆりて地帯をうりのこし

山田 賛。こういう輩を「こりない面々」という。
明四智2

清 賛。

623 東西へみごろをわける上田しま

山口 みごろ【身頃、邊】は、身衣(みごろも)の略。衣服で袖、衿、衽などを除き、身体を表と裏を覆う部分。

信州上田の真田一族は慶長五年(一六〇〇)関ヶ原の戦いに際し、昌幸と次男幸村は西軍の石田三成に味方し、家康の家臣本多忠勝の娘を嫁にしていた長男信幸は東軍に参戦した。これは戦の勝敗に関わらず真田家を残そうという昌幸の知謀であったという。

句はそのことを上田特産の着物上田縞に洒

落て詠んだもので、身を二つに分けることを「梅を分ける」と表現したもの。

東西へ一反つ、の上田しま 三三三九
どふ見ても真田ハ男一疋也 五六三

清 賛。

624 いろはで八元日から来なといふ

山口 「いろは」は谷中天王寺の門前にある岡場所「いろは茶屋」のことで、洒落本『婦美車紫鹿子』のランクでは「中品下生之部」に入れられている。「じしん客をよぶ処にたつて安し」と書かれているところから安直な遊び場所であったのであろう。上野寛永寺に近いところから坊主の客が多かった。
主題句もそれを詠んだもので、僧の年始回りは四日と決まっております、「元旦が暇なら遊びにおいで」と誘っているのである。

いろは茶やいしやで行程間いはなし

明二義3
あり巻手をしきに貰ふいろは茶や 明二松5

清 賛。

625 生酔も奈の内の八人がよし

山口 生酔いは今日言う酔っぱらいで、同じ酔っぱらいでも正月の酔っぱらいは陽気で人当たりがいいのである。暮れの酔っぱらいは絡まれる危険性あり。

へど迄も上下てはく奈の内 明四信1

生酔のこわく見へない奈のうち 安元智1

伊吹 賛。暮れは絡まれる、成程。事実ではないが、面白く分類したものである。
清 賛。

626 ちかくの他人だと大事をてからかし

山口 俚諺に「遠くの親戚より近くの他人」という言葉があり、近所の人は親しくしているとなにかと頼りになると言う意味だが、このケースは頼りにし過ぎた。すなわち男間騒ぎである。亭主が女房が定かでないが、近所の人と仲良くなり過ぎて大騒ぎになったのである。

遠くのていしゆよりハちかくのたにん

安六天2

他人のうまさ女房ハわすれかね 安六梅2

清 賛。「でからかす」は「でかす」に同じで、やらかしたの意。「相棒に大きな怪我を出からかいた」(滑稽本『東海道中膝栗毛』)などと使われている。

愛染帖

新家 完司 選

左邊地と言ふなよほくの出身地
堺市 澤井 敏治

(評)懐かしくも愛しい我が墳墓の地に対して何たることを！ 海の幸や山の幸を満喫して、第二の故郷にしていたきたい。

たっぷりと眠った顔だ欲がない
和歌山市 古久保和子

(評)熟睡の余韻が残っている茫洋とした顔。野心や欲得の片鱗も見えない。が、現実に戻ると雄事雑念に揉まれて歪んでくるのだ。

「二歩前へ」家のトイレも貼ってある
大阪市 坂 裕之

(評)共同トイレなどでは見かけるが家では珍しい。亭主が汚すので奥さまが業を煮やしたのだろう。できるだけこぼさないように。

カレンダーだけはおニユーになりました
羽曳野市 徳山みつこ

(評)家も家具も古いままだが「カレンダー」だけは新品。そして、そのカレンダーに記されている一日一日がビカビカの新品。

日帰り旅行トンネル出たり入ったり
鳥取市 近藤 秋星

(評)観光バスによる慌ただしい日帰り旅行。目的地までは高速道路を走るだけ。鳥取自動車道や中国自動車道はトンネルばかり。

転んだら直ぐ起きなさい老けるから
吹田市 太田 昭

(評)躓いたり転んだりの人生。そのたびに意気消沈するのは誰しも同じだが、立ち直りの速さがその後の勢いに影響する。

自浄作用だけじゃどうにもならぬ黴
西予市 黒田 茂代

(評)誰にでも備わっている自然治癒力や自浄作用。擦り傷や下痢程度なら何とかなるが、歳月が刻む年輪だけは如何ともし難い。

お化粧の力を借りて外歩く
香芝市 大内 朝子

(評)介添えは要らない。杖もまだ要らない。しかし、素ツピンのままでは甚だ心許ない。お化粧さえバツチり決まれば天下無敵だ。

不況でもデイサービスは忙しい
大阪市 太田としお

(評)円高などの影響によって、産業の空洞化が危惧されているが、高齢者向けの事業だけは健在。喜ぶべきか悲しむべきか…。

ボージョレがなんだ俺には森伊蔵
藤井寺市 鈴木いさお

(評)ワインは女性におまかせ。飲兵衛は芋

焼酎に限る。入手困難な「森伊蔵」。一人で飲むと罰が当たる。入ったときは連絡を…。

気軽さがいコンビニの募金箱
鳥取市 岸本 宏章

見て通るだけの一万円の蟹
シドニー 坂上のり子

フツと玉葱臭う寝起きの憂鬱さ
田辺市 岡本 昇

お偉方は汚れた菜っ葉服着ない
堺市 近藤 治子

もう修理利かない腰の蝶番
豊橋市 藤田 千秋

お土産の紅葉を拾う散歩道
富田 保子

エコですよお日様吸った布団です
高槻市 富田 保子

TPPスイッチバックする泥鰌
枚方市 寺川 弘一

お静かにいまは没句の化粧中
福西 茶子

痛い膝たいて過ぎる通り雨
喜田 准一

生き甲斐は何かと蟻に聞いてみる
和歌山市 喜田 准一

浜松市 岡田 史郎

せかせかと犬をひっぱる年の暮れ

鳥取市 倉益 一瑠

それぞれの道それぞれのマラソンだ

岩出市 村中 悦男

おおよそを測る歩幅も狭くなり

大阪府 米澤 俣子

生きている人が満足するお経

和歌山市 磯部 義雄

立ち上られ老人達よ炬燵から

橋原市 居合真理子

乳くれた牛かもしれないぬロース肉

赤貧の歿後には上がる絵の値段

米子市 後藤 宏之

本願寺西と東をはしごする

年賀状今年は出せることになり

和歌山市 玉置 当代

反省をすることばかり年の暮れ

これからは考えながらみかん剥く

堺市 奥 時雄

ノンアルコール飲んで恋しいアルコール

複雑な気がする十二月八日

大阪市 岩崎 玲子

欲なけりやすでに私死んでいる

年末の掃除でやっと団扇仕舞う

唐津市 山口 高明

肅々と死刑執行輪転機

町工場イクメン殿は臆首され

鳥取県 細田 裕花

ぼろぼろの国旗はためく地方自治

大阪市 岩崎 公誠

お試しは無料そのあと高くつき

八尾市 宮西 弥生

世も人も大きく見てるまるい人

唐津市 坂本 蜂朗

上役と妻に削られ卵型

大阪市 笠嶋 惠美

美しい奈良も京都も近所です

三田市 北野 哲男

父愚直渾名平行四辺形

酒のんで薬もちゃんとのんで喜寿

大阪市 柴本ばつは

老女ひとり紙の袋をためて住む

子のお古着たくなったら大人です

鳥取県 竹信 昭彦

節電に吾が股引も見直され

節電と相性悪いクリスマス

岡山市 工藤千代子

女らしく言うべきだったNOぐらい

マネキンが着ると細身に見えるのに

弘前市 高瀬 霜石

昼酒は好きだが土日だけにする

なんだって有吉シブ・スキヤンダル

大阪市 谷口 義

さざんかの宿はどうなったのだろう

むつかしい話は無しで生きてます

堺市 荻野 像山

先生はいないいつまでも先生

燃えもせず冷えるわけでもない夫婦

松江市 石橋 芳山

負けたこと笑いの種になっている

膨らまし方が違って萎む夢

三田市 田中 章子

見回せば席ゆずられたのはわたし

巨樹抱くポリフェノールのように効く

泉佐野市 稲葉 洋

漢方かドルの注射がユーロ風邪

オフレコの言い放題が首を絞め

豊中市 水野 黒兎

一世代前の奇妙は今の妙

体力測定七十九歳までとあり

八尾市 高杉 千歩

自販機の音は無粋に過ぎないか

海南市 三宅 保州

何があってもあまり驚かなくなつた

和歌山県 森下よりこ

酒飲みの講釈医者は争わず

神戸市 山口 光久

七癖の一つはきつと僻みぐせ

藤井寺市 太田扶美代

溶略のごとくにすむ白内障

交野市 田岡 久幸

白いもの降り出してから大掃除

鳥取県 加賀田志延

大阪市 佐藤 忠昭
徳を積むそんな余裕はありません

堺市 村上 玄也
うるさ型に役押しつけて黙らせる

大阪市 古今堂蕉子
お試しの一切れうまいから困る

堺市 内藤 憲彦
ママの手で白いウサギになるリング

八尾市 村上ミツ子
もう出来ぬ立って靴下はくなんて

大和郡山形市 坊農 柳弘
願い事絞って来いとはやく絵馬

備前市 森 ふみか
上座からホームへ移る父の席

鳥取市 池澤 大鯨
ペン牝牝が出来るほどには書いてない

三田市 上垣キヨミ
抜け出せぬ布団電話が鳴っている

鳥取市 前田 楓花
あら電話一オクターブ上げ喋る

高槻市 片山かずお
黙念と飲んでる妻のいない夜

池田市 上山 堅坊
間違いの種にはせぬぞ好きな酒

西宮市 泉水 牙子
一時間余裕を持って出て遅刻

米子市 高田 振作
イヤですね町内会にいる上司

三田市 辻 開子
活気つく旬の並んだ道の駅

奈良市 大久保真澄
生き仏の好物並ぶお仏壇

加西市 金川 宣子
お目覚めは窓に差し込む陽次第

札幌市 三浦 強一
この歳になって日本語まだ未熟

京都府 高島 啓子
改札に道を教える地図がある

大阪府 江島谷勝弘
日本は良い国だお金があれば

藤井寺市 鴨谷瑠美子
郵便局で使う運転免許証

鳥取市 夏目 一粋
忙しいから好奇心など持たぬ

大阪府 大川 桃花
くるくると働いてきた自負がある

東大阪府 佐々木満作
三丁目の夕日の頃は食べ盛り

豊中市 松尾美智代
宴会は椅子席だけと決めている

弘前市 福士 慕情
チューナーを付けたテレビが生き返る

八尾市 宮崎シマ子
私にも眠たい夜と眠れぬ夜

鳥取県 吉野いさお
葬儀社が経帷子の予約取る

阿波市 三浦千津子
尾鰭つく噂の軽さ聞く重さ

河内長野市 松岡 篤
賭けごとで勝った金には羽根がある

京都市 榎本 宏子
鼻息の荒い息子が気にかかる

奈良市 岩本 浩一
惜しまれて逝く歳とうに過ぎている

神戸市 山田婦美子
少しずつ薬減らして元氣出る

高槻市 乙倉 武史
のんびりと出来ぬ締め切りある限り

尾崎市 小池 幸子
こたつ出しミカン並べて冬に入る

大洲市 中居 善信
しがらみを脱ぎ捨てたのか冬木立

江南市 脇田 雅美
一本のさし芽で庭は花盛り

岸和田市 中岡 香代
冬帽子深くかぶって寒千両

鳥取県 西谷 悦子
レシピには煮物が欲しい歳になり

河内長野市 辻村 ヒロ
ばらばらの家族まとめる母の味

米子市 中原 章子
どうしたのと聞えば心の窓開く

青森県 松山 芳生
鉛筆と骨を削って氷雨降る

尼崎市 春城 年代
いろはには教わつてより長い坂

箕面市 広島 巴子
百歳も夢ではないとシニア塾

豊中市 藤井 則彦
平凡なゴロをきちんと捕る名手

河内長野市 針生 和代
デバ地下の波にのまれに行く師走

西宮市 藤本 直
幸せを探しに行こうブータンへ

寝屋川市 富山ルイ子
傘寿です気概を持って行く句会

箕面市 出口セツ子
墓参り行けず夢で叱られる

豊中市 石橋 優明
高い熱出ると行儀が良くなる子

鳥取市 永原 昌鼓
スニーカー履いてどこへも出かけます

海南市 小谷 小雪
中学の仲間と時の逆上がり

羽曳野市 吉村久仁雄
正論を吐くたび首の鈴が鳴る

河内長野市 八木加修子
しんきくさい話は寿命縮めてる

寝屋川市 岡本 勲
二次会へ行く顔ぶれは決まつてる

高槻市 島田千鶴子
ひまつぶす居間に西日が仲間入り

明石市 梶谷 和郎
子に示す手本は親の笑顔です

日高市 根岸 方子
ご米粒が入れ歯の隅でもの申す

奈良市 米田 恭昌
熱唱のカラオケ入れ歯すれてくる

米子市 成田 公一
五本指ソックスをはく暇だから

岸和田市 雪本 珠子
はちぼちと前頭葉も林住期

東かがわ市 木村あきら
冷や飯も喰い人間になつて行く

大和高田市 鍛原 千里
まだ女許容範囲で香ります

安来市 原 煩悩児
東北に遠慮今年のジングルベル

貝塚市 石田ひろ子
エレベーターちよつと不安の一人乗り

大阪市 田浦 實
スーパ―では僕は黙って妻の後

篠山市 円増 純子
友一人増えて世間が広くなる

塩竈市 木田比呂朗
カラオケにギター持ち込むキザな奴

河内長野市 木見谷孝代
木枯らしに悔眠むさばる昼こたつ

大阪市 津守 柳伸
夜更かしは平気な友の長電話

紀の川市 宇野 幹子
火を入れて賞味期限をひきのばす

今治市 渡邊伊津志
爽やかな朝は懐かし散歩道

倉吉市 山中 康子
選った服似合わないよと拗ねている

高槻市 初代 正彦
ギャル達と会話していると汗が出る

岸和田市 増田 隆昭
ボチの死に一人弔辞を口遊む

富田林市 中井 アキ
真実を告げる静かな内視鏡

黒石市 相馬 一花
音楽を聴かせ牛乳搾取する

弘前市 今 愁女
銀行に血圧計が置いてある

羽曳野市 永田 章司
権力者公私のけじめ忘れ勝ち

神戸市 白川 淑子
美しく老いる欲望まだ少し

奈良市 辻内げんえい
木枯らしと落ち葉取りあう竹箒

加東市 黒崎美紗子
惚けまいと日々行動を書きのこす

香南市 桑名 孝雄
孫と飲む金に糸目はつけませぬ

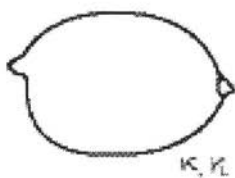
寝屋川市 平松かすみ
夜回りへ喜寿も傘寿も勢揃い

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 738句)



「ゆがむ」 福士慕情選

政治家の常識かなりゆがんでる
日米の狭間でゆがむ滑走路
政権を取ると政策ゆがみだす
君が代も国旗もゆがむ日本地図
読む側の都合でゆがむ法の意味
権力が事実歪曲してしまふ
抜歯する医者もゆがんだ顔をして
アテネからゆがんでユーロ大騒ぎ
ヘルニアで二足歩行の無理を知る
ゆがんでる胡瓜食べてと自己主張
ほつといて好きでゆがんでいるキュウリ
開業のお祝いデフォルメが活きる
赤信号長くて夕陽までゆがむ
嫁ぐ娘に涙でゆがむ父の顔
嫁いだ子戻って家が歪み出す

東かがわ市 川崎ひかり
岐阜市 平野あずま
堺市 村上玄也
紀の川市 宇野幹子
唐津市 仁部四郎
西予市 黒田茂代
三田市 福田好文
交野市 森本弘風
札幌市 小沢淳
岸和田市 雪本珠子
枚方市 伊達郁夫
海南市 堂上泰夫
京都市 都倉求芽
河内長野市 谷久美子
米子市 生田寒之

「ゆがむ」 池森子選

天も地も私も歪み抱いて初春
心までゆがみたくない初日の出
ニッポンが歪んで見える放射能
古稀過ぎてそろそろ鏡ゆがみだす
セシウムの恐怖にゆがむ貌がおかお
慣例の歪みを歩む天下り
泥棒が下見をしてたボランテア
大根の素直さゆがむ塩加減
整然と並ぶ仮設にある歪み
家計簿のゆがみに耐えて生きている
ゆがんではいないか聖書読んでいる
開業のお祝いデフォルメが活きる
不況風暮らしをゆがめ人歪め
ゆがんだ枝曲り直して平凡に
少子化にまたゆがみだす平均値

羽曳野市 徳山みつこ
吹田市 木下敏子
松江市 藤井寿代
豊中市 水野黒兎
唐津市 山口高明
大阪市 鶴田遠野
弘前市 高瀬霜石
和歌山市 土屋起世子
米子市 生田寒之
豊中市 源田啓生
米子市 吉田陽子
海南市 堂上泰夫
河内長野市 針生和代
京都市 坪井孝一
長岡京市 山田葉子

カレンダーゆがんだまままで歳暮れる
 歳月の中でゆがんでいく残夢
 又聞きのと聞き話ねじ曲がる
 逃げ足のはやいジョークに頬ゆがむ
 手びねりのゆがみが味を醸し出す
 鉛筆の転げが語る安普請
 ゆがみなど無いはずだった設計図
 父のへそゆがんだままにある美学
 真つ直ぐに葉書が書けた事がない
 老眼鏡ゆがんだ文字を立て直す
 キリストの教えがゆがむエルサレム
 ゆがんでも世界遺産になる斜塔
 マスコミが歪んだ資料押し付ける
 泥棒が下見をしてたボランティア
 震災後やること何もかもゆがむ
 錯覚の愛にゆがんだ雪だるま
 七十億重みに地球儀がゆがむ
 自己流でゆがんだ骨が直らない
 美人だが心ゆがんでいるいけず
 よこしまな心を隠す修飾語
 またボクの顔をゆがめに来たニユース
 疑心暗鬼水面にゆらぐ月の影
 悲しくて涙でゆがむ丸い月

大阪府	高木	道子
青森県	松山	芳生
四条暖市	吉岡	修
大阪市	川端	一步
京都府	高島	啓子
河内長野市	松岡	篤
可見市	板山まみ子	
富山市	有澤	嘉晃
吹田市	須磨	活恵
高槻市	島田千鶴子	
松江市	石橋	芳山
羽曳野市	福田	悦子
大阪市	坂	裕之
弘前市	高瀬	霜石
鳥取市	春木圭一郎	
大和郡山市	坊農	柳弘
札幌市	三浦	強一
鳥取市	池澤	大鯨
香芝市	大内	朝子
和歌山県	小川	イセ
羽曳野市	徳山みつこ	
大阪市	柴本ばつは	
豊中市	松尾美智代	

自画像はなぜかムンクの真似になる
 短所でもあるが長所になるゆがみ
 真剣に取り組む文字がみなゆがむ
 ゆがんでた道程息子無事通過
 よく見れば鏡のせいでないゆがみ
 待ち切れず洪味残った吊し柿
 逃げ足のはやいジョークに頬ゆがむ
 ねじれ松どうやら出番あるらしい
 瓶底のようなメガネをかけている
 神様の怒り水平線ゆがむ
 足腰もゆがむ三本足になる
 ゆがんでもぶれてもあかん意志と杭
 自分史の真ん中あたりゆがんでる
 陽が昇るゆがんだヘソを直さねば
 ゆがむ世に眼鏡の度数合わせる
 振り向けばゆがんだ靴の跡がある
 折り合いをつけてるうちにねじまがる
 書いた字がゆがむわたしのブルーな日
 一喝で組織がゆがむ鶴の声
 根性と同じ角度で顔歪む
 噂など平気ゆがまぬ芯の意地
 鳩尾のあたりでゆがむ負の思考
 企みを知ってか影がゆがみだす

日高市	根岸	方子
鳥取市	加藤	茶人
大阪市	津守なきさ	
八尾市	宮崎シマ子	
神戸市	新保登美子	
三田市	上垣キヨミ	
大阪市	川端	一步
鳥取市	池澤	大鯨
弘前市	稲見	則彦
川西市	西内	朋月
美作市	小林	妻子
西宮市	緒方美津子	
大阪市	柴本ばつは	
鳥取市	倉益	一瑤
鳥取県	松川	行男
松江市	三島	淞丘
和歌山県	森下よりこ	
豊中市	江見	見清
堺市	遠野	唯教
堺市	内藤	憲彦
鳥取県	石谷美恵子	
山口市	中前	幸子
樫原市	安土	理恵

まげられた花に塗りたい痛み止め
水溜りゆがんだ月を除け乍ら
ゆがみにも愛の楔が効いてくる
フラッシュに顔ゆがめてもVサイン
兄弟の絆がゆがむ遺産分け
系譜には僕のゆがんだ跡がある
うわべだけの懺悔に弥陀の顔ゆがむ
死生観問う落日の影ゆがむ
多情仏心魔性の月がゆがんでる
振り向けばゆがんだ靴の跡がある
損得で打つとゆがんでしまう釘
効かせたい釘ほど叩くから歪む
溺愛にしつけの糸が歪んでる
満月もゆがんで見えた反抗期
ハグされてゆがむ心が癒される
未成りの歪んだところがほろ苦い
太陽がゆがんで沈む船の旅
ゆがんだら笑顔の花を咲かせよう
ゆがんでる方が正論めいてくる

秀句

堺市	西村りつえ	堺市	大隅 克博
堺市	長浜 美籠	尼崎市	小谷 滋彦
寝屋川市	宇都部市	平田 実男	弘前市
今 愁女	鈴木いさお	山口市	中前 幸子
富田林市	片岡智恵子	松江市	三島 淞丘
榎原市	居谷真理子	鳥取市	岸本 宏章
和歌山市	土屋紀世子	和歌山市	田中 みね
京都市	清水 英旺	大洲市	中居 善信
大阪府	伏見 雅明	鳥取市	中村 金祥
西宮市	片山 忠	松山市	神野きつこ
和歌山市	堀 富美子	鳥取県	竹信 昭彦

ゆがんでる何か一物ありそうな
ゆがまないつかい棒が胸にある
ゆがみなく蟻がスクラム組んでみせ
農一途稲穂のような老母の腰
老眼鏡ゆがんだ文字を立て直す
脊髄のゆがみに絶え間ない地震
日没の闇にゆがんだ罪と罰
バラ一輪ゆがみなおしてくれました
草に寝てゆがんだ私干している
ゆがまずにおれるものかと反抗期
又聞き之又聞き話ねじ曲がる
吹っ切れてゆがむ景色を丸くする
鍵穴を覗けばゆがむ昼の月
なんとなく妻にははいと言えぬとき
散歩道ゆがんだ先は冬もよう
ゆがんだ愛だったかと北風に問う
赤信号長くて夕陽までゆがむ
みな去ってランプシェードが歪んでる
ゆがんでて画材にされたラ・フランス

秀句

倉吉市	山中 康子	和歌山市	上田 紀子
唐津市	仁部 四郎	鳥取市	津村 律子
高槻市	島田千鶴子	松江市	石橋 芳山
富田林市	片岡智恵子	西脇市	七反田順子
尼崎市	田原 一兆	米子市	成田 公一
四条畷市	吉岡 修	和歌山市	堀 富美子
府中市	馬場 利子	池田市	上山 堅坊
吹田市	大谷 篤子	大阪市	古今堂薫子
京都市	都倉 求芽	西宮市	吉井菜々子
池田市	栗田 久子	松山市	高橋 宏臣
藤井寺市	太田扶美代	鳥取市	夏目 一粋



持田多輝子さんを偲ぶ

いずも川柳会 伊藤 玲子

多輝子さんはご病身と伺っていましたが、

今年の酷暑も乗り切られて、八月号、九月号と投句が載っておりました。ふっと一度お訪ねしてみようかなと思っていた矢先でした。

新聞の計報欄に「持田タキ 九十四才 久

村」の記事をみつけ、もしかと思いい住所定番を確認して驚き、川柳塔社は日曜日のこととて事務所は休業と思い、ご迷惑だったでしょうに、古今堂蕉子様に電話連絡しましたところ、ご親切にご配慮賜り、諸事間に合わせて頂きましたこと、事務局としましてはついにしました。

川柳いずも平成三年九月号に多輝子さんの

「よこがお」としてインタビューしました。

・川柳を始めたきつかけ

一九八六年、今は亡き先輩の方から熱心なお誘いを受けたのがきっかけ

・座右の句

不可能と知りつつ夢を追いかける

(松葉君江)

・自分の自信作(自分の好きな句)

一杯の水にも人の情け知る

浮き沈み人の情けが糸を垂れ

・川柳以外の趣味

読書、写真(花ばかり)

・所属柳社

川柳塔社・いずも川柳会・いわみ川柳会・

えんや川柳会・たかまつ川柳会

・コメント

皆様のお導きの中で、川柳に依って日頃の嫌な事を忘れて余生の楽しい励みです。と、柳友との温かい厚誼が続いていました。

この度息子さんに追悼のページに載せる故人の写真とご連絡をしましたところ、一冊の思い出の句集が届けられました。「平成十八

年八月に第二冊目として手作りしました」とのこと。それには「川柳の道にいそしんで二十年、時の流れるままに、余命ある限り会者定離を繰り返しながら、沢山の先輩や句友との絆を大切に、川柳作句で心の空白を埋める様精進して行けたらと思う」と、なかなか家族写真と共に気持を述べられていました。

その句集の一冊目に平成四年六月「第十六回全日本川柳大会」の集合写真があり、是非この写真があれば掲載して欲しいと思いい探しました処、小白金房子さんが提供して下さいました。皆さん若くて元気そう。しかし、既に八人が旅立たれたのだ。

遺句

ひたすらに川柳と云う一兎追う

あたふたとどんじり走る老いの足

つばめの子明日は巣立ちか身構える

さわやかな友の来る日を待ちわびる

黄門の裁きが欲しい世の乱れ

幸せの花になりたい曼珠沙華

逆立ちも日課の一つ海女の笛

何事も因果応報受けて立つ

十二月号に故持田多輝子さんの句があり、最後の最後まで川柳と二人旅だったのだ。

命日 平成二十三年十月十五日

法名 恵昭院釈妙潤大姉、享年九十四歳

合掌

冷たい

松本 文子選



被災地に冷た過ぎます除夜の鐘
冷たい一見で見ぬ振りをするなんて
冷たい風が惹甘くするあまくする
挨拶が冷たい仲を温うする
木枯しが肌に冷たい仮設小屋
冷たいと母を恨んだ日を悔いる
冷たいといわれても抜く繋糸
しあわせが冷たい冬をはね返す
コーヒーが冷めて終った長電話
冷淡な人が弾んだ義捐金
寒風がうまさ引き出す一夜干し
ハローワークの冷たい声の前に居る
かじかんた手に息かけて雪たるま
本当は冷たいのかな白い雲
厳冬の氷雨に仮設冷たかろ
冷たいのは手足でなくて心です
左遷地の雪は下から舞い上る
生きてゐる冷たい雨も心地よい
誤算だと気づく冷たい街あかり
冷たさは本気だつたと知る別れ
冷たい冷たいと鍋の支度する
三浪の絵馬に神様知らん顔

目には目をなんて心は持てない
冷える日の猫は私を離れない
冷たい手包んでくれた大きい手
風評の冷たい風が身にしみる
納得がゆくまで冬の月を見る
初水やはりつついてみたい指
一杯のお茶で芯からあたたまる
冷たい雨に泣く子いませんよう
少年の冷めた瞳にある不安
反則の冷たい椅子に座らされ
冷や飯を食った時代もありました
法律はこうなってます弱者にも
ほくにだけ冬がいちばん先に来る
いつの日か冷たい星になる地球
没落の屋根に冷たい鬼瓦

佳
交差点冷たく青を待っている
断つて冷たい雨の道帰る
亡き人の表札のまま冬になる
失言が本音かくちびるが冷える
足冷えて眠れぬままに仮設小屋
人
冷たい目で見下しているのはカラス
地
冷や飯も仲間がいれば食べられる
天
冷静になればなんでもない話
軸
じつくりと世の冷たさを見つづけた

一粒で元気がでるとコマーシャル
ストレスをはぐしてくれたイクラ丼
未来図の中に明日の種を蒔く
被災地に小さな種のボランティア
種蒔いて毎日覗くプランター
花の種データー通り咲いて来ぬ
被災地の汗と涙は大粒だ
順順に小粒になってゆく総理
小粒です筋は一本通つて
アンパンは何がなんでも粒餡派
世の隅でサンショの粒のひとり言
やさしさが顆粒になってとけてゆく
粒揃い特徴のない男前
揃いすぎ個性はどこへ行つたやら
不揃いな粒に個性が光つて
粒選りへふるいの網が広過ぎる
粒揃い否どんぐりの競い合い
小粒でもいいドングリとして生きる
一粒の涙で結び合う絆
七十億の一粒になる新生児
二人さえ粒が揃わぬ子供達
粒選りの中にもあったピンとキリ

栗田 久子選



一粒で元気がでるとコマーシャル
ストレスをはぐしてくれたイクラ丼
未来図の中に明日の種を蒔く
被災地に小さな種のボランティア
種蒔いて毎日覗くプランター
花の種データー通り咲いて来ぬ
被災地の汗と涙は大粒だ
順順に小粒になってゆく総理
小粒です筋は一本通つて
アンパンは何がなんでも粒餡派
世の隅でサンショの粒のひとり言
やさしさが顆粒になってとけてゆく
粒揃い特徴のない男前
揃いすぎ個性はどこへ行つたやら
不揃いな粒に個性が光つて
粒選りへふるいの網が広過ぎる
粒揃い否どんぐりの競い合い
小粒でもいいドングリとして生きる
一粒の涙で結び合う絆
七十億の一粒になる新生児
二人さえ粒が揃わぬ子供達
粒選りの中にもあったピンとキリ

粒よりも粒よりなりに持つ悩み

粒よりのチームにリーダーがいらない

粒ぞろいも誰かがビリになる摂理

大勢の中で光っている鬼才

一粒の豆が育てた豆を煮る

その中の一粒だけが母になる

一粒万倍日に長女を生んでそれ以来

粒よりも粒より立つて町を空にする

粒よりの中にぼつんと居る不安

赤い粒啄んだ日からのドラマ

米粒の数ほど嘘をついて冬

一粒の涙の理由はそつと置き

大粒の涙に暗い過去がある

雨粒が大きくなってきた別れ

粒よりと言われる程の僕でない

佳

粒ぞろい皆が四番打ちたがる

億万のいのち一粒私です

粒揃いの中に異質の僕がいる

粒だけは揃っているが核がない

大粒の澄んだ涙に嘘は無い

人

一粒の麦の話は二度聞いた

地

大粒の涙で海が乾かない

天

大粒の涙我慢してたのか

軸

見張られるまま素粒子は眠れない

ちかし

章子

真澄

美籠

安子

扶美代

シマ子

幹子

恵美

寿之

霜石

准一

淑子

アキ

弘風

忠

節子

満作

淳

いさお

四郎

一呑

稻葉

洋

がたがた

竹信 照彦選



がたがたの前途多難なヨーロッパ

身とふたががたついてます無言劇

がたがたと大陸棚の武者震い

塗り替えて中古船から春にする

がたがたになっても心失うな

企業戦士ががたになり捨てられる

子が逝ってガタガタと母の詩

がたがたの身体に二合潤滑油

高架下ががたがた弾む商店街

がたがたと愚痴にくすぶる枯葉焚く

がたがたの世相に破れ店を閉じ

朽ちて来た雨戸ががたがた母ひとり

司令塔の妻も今では認知症

校規違反木造校舎下駄が行く

値切ったら手抜きされてた基礎工事

がたがたも楽しく生きるストレッツ

がたがたの部品叱咤でまだ動く

そこら中ががたがたになり黄昏る

筆不精出不精友が遠ざかる

がたがたの仕組を直す螺子を巻く

ロボットの職をがたがた揺すられる

がたがたの原風景に朱を入れる

のり子

ばつは

孔一

方子

圭一郎

殺

芳生

善信

奮水

ゆきの

悦男

志華子

輝夫

蜂朗

玄也

日の出

孝雄

ミツ子

大鯨

裕之

せつ子

碧

あれ以来ガラスの音と棚の本

がたがたになつて初めて知った愛

どの彩も夕日に負けてがたがた

がたがたと昭和の音で聞く雨戸

がたがたと大本営が吐いた嘘

がたがたと断捨離急ぐ年の暮

がたがたと亡父の小言を聞く仏間

ガタガタにしたのは義母の超過保護

公園の落葉にがたがた言う都会

がたがたになつてもあなたを見捨てない

原子炉もがたがたでした神の国

金がないぐらいがたがたするでない

がたがたとPPPが国揺する

がたがたになつても故郷捨てられん

がたがたとトントロになる我が身体

また同じハエががたがた言っている

痩せ福祉年金ガタガタ車椅子

熟慮して破調となったラブメール

気がつけばドミノ倒しの列にいる

がたがたと地球の価値が落ちそうだ

天辺の椅子がガタガタよく揺れる

311あのがたがたは忘れない

国政の不協和音が小うるさい

愛三

アキ

美恵子

邁行

黒兎

四郎

千鶴子

浜丘

茶子

典子

婦美子

牙子

螢

宏章

泰女

悦子

芳山

美義

くにこ

霜石

愁女

千代子

高森一呑

軸

天

地

人

天

地

人

天

地

人

天

地

初歩教室

題一 潔い

鈴木 公弘

お題を見間違ひされた方が若干名おられました。添削対象から潔く外しましたので、ご了承ください。また、送り仮名の間違いも少なくありませんでした。不注意は致命傷になりますので気をつけましょう。

原リフォームの勧誘に金がないと潔い (安由美子)

原潔よく散った真弓タイガース 和幸

原潔よく勤めを辞めて道拓く 英男

添潔く転職をして道拓く

原潔き良く咲呵を切つてからの修羅 (白淑子)

添潔く咲呵を切つてからの修羅

送り仮名だけの間違いでした。

原邪気のない潔き嫁子にいやされて (山久子)

潔いを「きよい」と描いておられます。

潔いという意味では清いと同義語です。また「邪気のない」様も潔い状態です。言葉の整理をしておいていただきたく思います。

原欲を捨て潔く心の弾む毬

弘 泰

添欲を捨て弾む心の毬ひとつ

原潔く檻から出たぞ北狐

勝 治

比喩として使われたであろう北狐の意味が通じません。たとえば仮出所したスズキムネオさんのことでしょうか。

原さむ風へ潔い札募金箱

安 子

添寒風へ役に立ちたい募金箱

札と金は同類になります。札を金の中に含めて描いてよいでしょう。

原物欲が深く消え妻が居る

ミヨノ

添潔く物欲消した妻になる

女性の句の中にはみずからを「妻」と書いておられるものがあります。私は「あなたを妻をめぐっておられるのですか」と尋ねます。おそらく「心の中に棲む妻という部分」を指して表記されたのでしょうか。

そうであるならば「私」という立ち位置があります。妻と私とは音字数が違ふという答えもたびたび聞きます。しかし、作品の中に「私」と書き込まなくても、常に「私」の句ですし、妻であると断らなくてもそう感じられるように表現すればよいのです。

原潔よく責任を取れ政治家よ

秋 星

すべても政治家が悪政に加担しているというお気持ちなのです。

原潔い女決して振り向かぬ

ひろ子

潔い男も残影を追わないと思います。

原潔く全額補償被災者へ

紀 雄

添被災者へ全額補償する決意

原さわやかなあの人に逢い今がある 眞砂子

最近の傾向として「今がある」とか「昔……今……」という句が多くなってきました。

いつとき「セピア色」が流行りましたが、

とうとう過去を回想する方が増えたように

思われます。前例のどちらも説明句になりますので、止めましょう。

原天寿なら潔く手をあげて逝く

正 二

添天寿なら潔く手をあげて逝く

とは言つものの……という句は面白い

原潔く未練も見せず椿落つ

一 兆

添春待たぬ椿の潔い落花

原潔よく見せた本音言わぬまま

加修子

添潔く見せた本音言わぬまま

吉太郎

原大臣は潔きよくとはいかぬもの

宏 造

添潔くバツイチになれるいい時代

孝 明

原貧しいが義援金ならすぐに入れ

冷 子

添貧しくも義援金ならすぐに出す

紀美恵

原潔く捨ててしまえば筆筒あく

冷 子

添潔く捨てるとなれば未練湧き

紀美恵

原潔い澄んだ目の夫(つま)愛してる

紀美恵

秀句鑑賞

同人吟 三宅保州

—1月号から

麻生路郎師の数多の川柳語録の中でも、最

も肝に銘じたいのは有名な「生命ある句を創れ」だと思います。このことは、精魂を込めて作者の心と血が通った句を創造せよということだと思えます。私はこのことから作句の座右の銘として「一句入魂」ということを心掛けるようにしています。今回の秀句鑑賞も、レベルの高い同人諸氏の千六百八十句の作品から僅かの鑑賞句を選ぶのには苦慮しましたが、「生命ある句」を念頭に置いて選ばせていただきました。なお、掲出句を鑑賞しやすいうように、その主たる態様により「訴えのある句」等六種類に分類してみました。

【訴えのある句】

おいそれと立ち上がれないピンポーン

岡本昇

失礼ですが加齢による反応の衰えと、都合も聞かぬチャイムの身勝手さも訴えておられると思います。慌てずにゆつくりでよいのです。「ピンポーン」というオノマトベも実に効果的な句になっています。

嗚呼妻がアルツハイマー症だとは

福士慕情

アルツハイマー症の奥様のことを詠まれた五句の掲出句に胸を打たれます。家族が病に冒されたときの心情と介護の大変さとも詠まれて、まさに訴えのある句に感動させられます。夕暮れにでもでもでもが追ってくる

斉尾くにこ

「夕暮れ」は高齢化の比喩だと思います。「でも」のリフレインは、健康不安、孤独感、経済不安等を訴えているに違いないのでは。増え続けるのか空き家とホームレス

星野育子

「空き家」と「ホームレス」という「物衝撃法」で、深刻な社会問題を訴えられています。今年また枯れ木に花を咲かせよう

早川遯行

そうです。落ち込んでばかりいないで、老いてなお盛んの意気込みで暮らしましょう。「枯れ木に花を咲かせよう」の本歌取り的な形容が効果を高めています。

【軽味のある句】

目指すのはガイドブックにないところ

安土理恵

何もガイドブックの有名な所ばかりでなくという思考は人生全体にも言える、軽味だけでなく人生そのものにも言える含蓄のある句。

足音を聞き分け猫が正座する

菊地政勝

猫が正座して待つ相手は誰でしょう。さらに猫を擬人法で見ると、コミカルな味わいもある句になります。

老いたなと互いに肩をもんでいる

土橋睦子

縁側で肩を揉み合う老夫婦という、和やかな情景が彷彿とする温かさが伝わって来ます。

病院の待合室が読書部屋

三好専平

待合室でいらいらしながら待つよりも、読書部屋にしたりお喋りの社交場にしたりすると気もまぎれるという、軽味と穿ちの句になっています。

【穿ちのある句】

月例の句会黙禱続くなり

古今堂蕉子

当会本社句会も然りなり。いずれ私ともい

う輪廻観も詠まれていると思います。

明日があるそうかも知れぬなと思う

高橋 宏臣

「慌てずとも明日がある」か「手回しせねば雨が降る」か。また、明日があるとは限らないという死生観をも詠まれた穿ちのある句。

三世代の鍋はときどき煮こぼれる

山岡 富美子

量が多いから煮こぼれると物理的に詠まれたのではないでしょう。三世代も一緒に住んでいる時にはトラブルもあることを「煮こぼれる」と巧に比喩されたのだと思います。しかも、煮こぼれても三世代それぞれの味わいがあることまでも詠まれているのです。

女女しに女という字失礼ね

中崎 深雪

最近女々しい男も多いですからね。因みに女偏の漢字は百字以上ありますが、男偏という部首はありません。また、鬪という字はなぶると読みますが、意味はうるさくつきまとうとかもてあそぶと書いていますが、苦笑せざるを得ません。

断捨離ともつたいないがせめぎ合い

丹後隆 肇

「断捨離に決断力を試される」「出したものまた片付ける大掃除」という句のように、

忠ならんと欲すれば孝ならずのせめぎ合い。

【見付けのよい句】

川柳の良し悪しは「見付け」で決まるといわれるように、非凡な着想から佳句が生まれる模範のような句を鑑賞して下さい。

食べすぎぬようにフドウに種がある

志田 千代

言われてみれば「膝ポン」の句。まさに発想の良さの模範的な句です。

洋梨のかたちで風いている私

武本 碧

ラ・フランスの形は不格好ですが何とも言えぬ味わいがあり、それを自分と結びつけられて佳句に仕上げる見付けと技巧に敬服。

MRI 暫しこの世と遮断する

今 愁女

経験者は納得でしょう。私は、病気の不安と相俟って、轟音と共に地獄行きのような不安感に駆られました。

去年より広いと思う庭を掃く

伊藤 寿美

拙句に「掃除するときは広いと思う庭」があります。寿美さんは「去年より広い」と思う実感を、「老化」などと言わずに句にされる見付けと表現の巧みに感心します。この発想を「体力の衰え知った庭掃除」とでも作ると、発送表現ともに凡作になりますね。

【ユーモアのある句】

駄洒落等の低俗な川柳と称する類が跋扈している世相に対して、川柳人は本来のユーモア句を啓発していきたいものです。

冬はそこ増やしておこう皮下脂肪

山田 葉子

なるほどものはいいいですね。そして冬眠に入られるのですかと反歌を送りました。

旅先で妻と同室とないしよう

寺井 弘子

前句に対する付け句として「主人もそう思われているでしょう」と返したいものです。ケータイで話すと息子よくしゃべる

吉村 久仁雄

父と息子は会話が無いと言われますが、ケータイやメールなら話すという。その意味ではケータイも寄与しているのですね。

第二幕アンパン二つ買って待つ

小林 わこ

「アンパン二つ」に微笑笑させられます。作者には「二つ」は決して動かないのです。

【時事吟】

震災が絆の文字を太くする

三浦 強一

昨年の漢字一字「絆」が掉尾を飾り、大惨事のせめてもの救いとなりました。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 1月号から

安土理恵

決断をして暫くはよく眠る

山野寿之

やつとの思いで踏み切りをつけたが、まだ何かモヤモヤ、暫くは「にその先に続くであろう状態が見えてきます。同情いたします。

イケメンに化学反応してしまふ

有澤嘉晃

化学反応にまいました。血がのぼるのもドキドキも化学反応というのでしょうか。私は久しく反応しておりません。

齒に着せる衣の色にも気を遣い

井上つよし

何というご配慮、こういう方と会話をしてみたい、軽妙（だと思つ）な騙しに遇つてもみたい。衣の色は何色ぐらいお待ちですか。

許す時やんわりと出る人間味

高山清子

人を許すのは容易なことではありません。

自身との葛藤もあるでしょうに穏やかに対応できる懐の深さ。いい人なのですな。

指切りをするのに躊躇する小指

石田ひろ子

迷うような約束はしないこと、とはいってものちよつとした打算が働くのも女ころ、ためらつてみせる小指は可愛い小道具。

空き箱に合つた余生を入れてやる

池田純子

きれいな空き箱捨てられず溜めこんでいます。それに入れていくのが余生だとしたら、こんな素敵な発想はありません。

適当に放つとかれてるから元氣

白川淑子

そのとおりなのヨ、濡れ落葉なんて真つ平ごめん。でもあくまでも適当に願います。ふんばつてみよう重心低くして

小谷小雪

昭和を越えた女は踏み張りが効きます。八頭身でないので重心は下方にあり揺らぐことはありません。どつしり参りましょ。

男一人こんにやく甘く辛く炊く

生田寒之

切ないなあと思つたのは間違ひでした。扱ひ難いコンニャクを甘く辛く自分の好みに炊

いてしまふ頑固な男でした。違いました？

パンプスを脱ぐまで息継ぎはしない

栃尾奏子

パンプスが効いています。デキル女性が想像されます。鎧を脱ぐのも気を許すのも、そう靴を脱いでからなんです。

招き猫きようは両手を上げている

澤井敏治

パンザイの猫ですか、お手上げ状態を何とかしなければ、と誰しも思っているのですが、冬に咲く花の図鑑をあけて見る

辻内次根

句姿の美しさにひかれました。冬の花の凜として気高いように句にも品格があります。

「さんかの宿」の赤い花も冬に咲く花。

言い訳に日の短さはありがたい

加賀田志延

実感句でしょうね。「もう勘忍してえな、日にも暮れてきたし、そや、何ぞ食べに行かへんか」。一件落着

ここもまあ女おんなの紅葉狩り

桑名孝雄

と、嘆く貴殿も紅葉狩り。女性の元氣な国は繁栄すると聞きました。ここもまあ、全くです。が、大目に見てくれませんか。

英語 de Senryu ②

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代

(岐阜保健短期大学)

機械の一部それが 人間なんだとき

they say that

we human beings

are merely part of a machine

書斎はいいが めた事はなし

den is a good place

to spend for me

but no time to stay

～リバーウィローのため息～

海外から送られてくる詩歌の雑誌（主に英語）には、川柳、俳句、短歌の欄があって、同一人物が俳句も川柳も、短歌も投稿しています。自然を背景に詠むのが俳句、人間の心の機微や時勢への反応を詠むことが川柳、心に湧きおこる感情を詠みこむのを短歌と考えているからでしょうか。一人三役の有り様を一度問いかけてみたいと思っています。中でも川柳は喜怒哀楽を端的に表現する短詩なので、どこに暮らしているようにも、どんな言語を話しているようにも、人間ならわかり得る普遍性があります。このように海外に広がった英語川柳の源となった英訳川柳はいつごろ、誰が取り組んだのか知りたくなりますね。大正時代の教養人であり洒落、ユーモア、諧謔の達人であった帝国大学教授和田垣謙三が、彼の著書『吐雲録』（大正3至誠堂）に収録した古川柳の英訳が本邦初めて（速川和男『英語教育1月号』大修館1988）のものです。和田垣の選んだ古川柳は「あの男この男とて古くなり」です。まず彼は直訳で、That man, this man, so saying, gets old. と一行で訳し、それから意識してSaid she "Nor this nor that," /And now she's old and fat. と二行で訳し、さらに展開してOf many a young man,/ Said she, "Nor this nor that," /And now she's old and fat. と三行で訳しています。和田垣は、男選びをしている間に年を経てしまった女を、さらに「肥っている」の意味であるfatを加えてシニカルな英訳にしています。男が女を見る目は冷徹で辛辣なものよと、わたしは思っています。女のわたしならfatは加えず、gets oldでとめておくのですが・・・。

『麻生路郎読本』余滴

(7) 河盛家のこと ②

榎 原 道 夫

豪商河盛仁平

葭乃の曾祖父であった河盛仁平は、初代河内屋仁兵衛の長男として天保4年（一八三三年）2月15日に生まれ、明治18年（一八八五年）4月20日に満52歳で亡くなった。嘉永6年（一八五三年）2月の頃、二十歳にして二代目を襲いで家業に勤しみ、堺の豪商として名を馳せた。

さて、木綿問屋河内屋は和船三十何艘を所有し、木綿を船に積んで日本海に航路をとって、北海道へ航行することを業としていましたが、その帰りに鮭、鱈、にしん、かずのこ、昆布などの松前ものを積んで帰りました。時には船が遭難したことも幾度があったときいています。（葭乃書簡）

仁平は、明治10年前後には、千石船を、松前（北海道）に6隻、航行中6隻、手元に6隻の合計18隻を配船し、往き船で木綿、帰り船で昆布など海産物を運んでいた。（『むらさき』堺の醤油屋河又・大醬200年のあゆみ、平成12・11・3、河盛幹雄発行）

河内屋仁兵衛（後の河盛仁平）は、堺の河内屋三家の中でも江戸時代末期から明治時代初期にかけて最も栄えた。最盛期には、十八隻の千石船を有し、青森、北海道と取引して商勢を拡張しました。堺からは総本家の扱う河内木綿を積み出し、青森、北海道でこれを売りさばき、同地の海産物の昆布、鯨、鮭、鱈等を積んで帰って関西で売りさばいていました。青森県五所川原の佐々木嘉太郎が興した布嘉財閥は、この仁兵衛との取引で得た富により、青森県下でトップの多額納税者の位置にあつたと言われています。

（『堺の醤油屋 河又・大醬』河又・大醬株式会社代表取締役社長河盛幹雄、『フォーラム堺学 第八集』平成14・3）

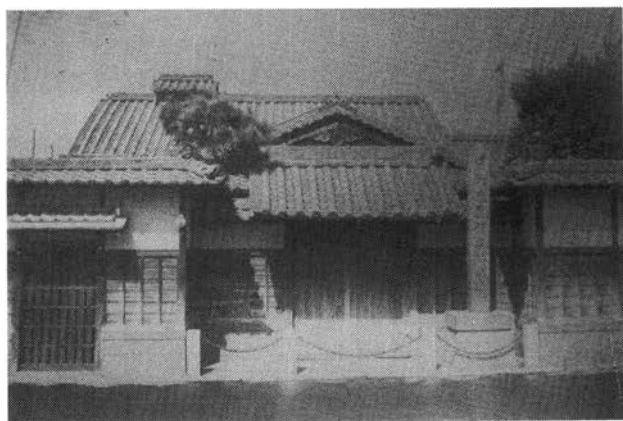
「葭乃書簡」に、〈和船三十何艘を所有し〉とあり、河盛幹雄氏の調査によると、千石船を18隻所有していた、とある。千石船は

18隻だが、その他の船も含めると、「葭乃書簡」の、三十何隻所有していたという記述も誇張ではないのかもしれない。

堺の豪商河盛仁平の繁栄を象徴するできごとが、明治10年にあつた。

明治天皇巡幸

堺へ明治天皇陛下（明治十年）がお越しになると云うので、河仁はそのお宿をすることになりましたが、そのため浜寺から松をひいてきて庭をつくり、立派な石段のある門構えの行在所を自宅の向い側に建てたときいています。明治天皇陛下の御一行は、その夜遅くまで御前会議があり、お泊りにならず何かことがあるのか急に伏見へおたちになったそうです。あとの行在所は堺市民の皆様へ公開し、見に来られた方々へ折詰のお土産を出したそうです。この行在所は、河仁の家が倒産してからも、堺の遺跡として保管されていましたが、第二次戦争の堺空襲の折に灰燼に帰しました。（葭乃書簡）



「明治天皇行在所御寫眞秋月良造作堺市
大町東丁八卯之日座内（電三四七）」（堺
市立中央図書館所蔵）

明治10年1月、明治天皇は、父の孝明天皇
の十年祭をするため京都に行幸した。その際
に、大和、河内、和泉、大阪も巡幸した。2

月11日（日）、畝傍山神武陵を訪れた後、河
内の道明寺を経て、13日（火）午前10時40分、
堺区中之町41番地字大道の行在所に到着。し
ばらく休憩した後、有栖川宮熾仁親王、山階
宮晃親王を初め内閣顧問木戸孝允、宮内卿徳
大寺實則等供奉して、熊野町東六丁の熊野小
学校見学。午後0時10分、同校を出発し、行
在所で昼食。午後は、神明町東二丁目西本願寺
別院内の堺県庁と戎鳥製糸場を訪れ、4時30
分、行在所に帰着。同夜、西郷隆盛による西
南の役が起ったという報告が京都から駆け
つけた太政大臣三條實美によつてなされ、14
日（水）午前8時、予定されていた仁徳天皇
陵参拝は取り止めにし、住吉・大阪を経
て、16日（木）、京都に戻った。（『堺市史
第七巻別編』、『明治天皇行在所御記録』、『むか
しの堺 参照』）

『堺市史第七巻別編』に、行在所のこと
が、次のように記されている。

明治天皇行幸に際し御假泊あらせられた行
在所は中之町四十一番地字大道の河盛仁平舊
宅、現鈴鹿春幸氏の私宅である。現在の屋敷
取は殆ど當時のまゝで、僅に阪堺軌道敷設の際
門庭を狭め、其後西方に建増をした位の相違
である。屋敷は東面し、表門の正面式臺を入

れば奥に玄關がある。玄關の西北隅より西へ
縁を進めば御座所址となる。十二疊の廣さで
北に床袋棚を設け、南に土佐光文筆第二十四
孝圖の色紙各三枚を捺した金襴四枚を嵌めて
ゐる。東は縁を附し、其北寄に一間の書縁を
設け西は半を壁とし、半を傳雪舟筆山水の色
紙各二枚を貼つた金襴二枚を建て、ゐる。此
室の東は庭園で西は廊下を隔て、御座所址に
なつてゐる。庭園は巨石其他大體當時の佛を
存してゐるが、當年河盛氏が移植した老松を
失ひ、代りに若松を植ゑてゐる。（鈴鹿氏未
亡人談）御座所址は四疊半で中央に當年御使
用になつた寢臺を置き、北側東に袋棚、西に
床がある。寢臺は大きき二疊敷位で、高さ一
尺餘の足を附してゐる。御座所址の南は二坪
足らずの小石を敷いた坪内で、行幸當時海水
を湛へて堺近海の魚類を放ち、其遊泳状態を
天覽に供した所である。（鈴鹿氏未亡人談）
又御座所址西側の三疊間及び其南の二疊間は
行幸當時近侍の方々の詰所であつた。猶行在
所址の間取は右の外に神殿以下敷室がある。

行在所は、昭和20年7月10日（火）の堺大
空襲（旧市街のほとんどが焼失）で焼けた
が、写真にも見える「明治天皇行在所舊址」
の碑だけは、今も残っている。二箇所コンク

リートで接いでいるのは、空襲で折れたのを修復した跡だろう。

左側面には、「從二位 勲二等侯爵久我通久書」とあり、裏面には、「大正四年四月三日 鈴鹿通高建立」とある。鈴鹿通高氏は、前掲『堺市史』中の、鈴鹿氏末亡人の夫であり、鈴鹿春幸氏の父であると思われる。



「明治天皇行在所舊趾」の碑

この碑は、大阪市と堺市を南北に結ぶ通称チンチン電車（正式には阪堺電気軌道）の宿院と寺地町間の東側の緑地帯（現・堺市堺区中之町東一丁。寺地町交差点より一本北の交差点の北寄り）に、東向きに建っている。すぐ後ろ（西側）が線路である。線路と緑地帯を挟んで、それぞれ三車線の車道があり、約10メートルの歩道がある。往時、羽衣に住んでいた私の義父に聞くと、碑の建っているあ

たりから西側は、建物が建っていて、戦前の阪堺線は、今の東側歩道からちよつと西側を走っており、戦後、西側に道路を拡張して現在の位置に移動した、ということである。前掲『堺市史』（昭和5年発行）に、「現在の屋敷取は殆ど當時のまゝで僅に阪堺軌道敷設の際門庭を狭め、其後西方に建増をした位の相違である」とあった。阪堺電車は、明治44年12月1日（金）、大阪市の恵美須町と堺市の市之町・大小路間が開通し、昨年、百周年を迎えた。現在、市之町・大小路という駅名ではなく大小路になっている。大小路とは、本来は東西の通り（現在の南海堺駅と堺東駅を結ぶ通り）の名前で、地名を表す言葉ではない。大小路から少林寺橋（現・御陵前）は、同年3月に開通した。大小路から南に向かつて、宿院、寺地町、御陵前と続く。その時に、「僅に阪堺軌道敷設の際門庭を狭め」とあるので、行在所の門庭は、今の碑の位置よりはやや東寄り（手前）にあったと考えられる。

河盛家に属するものは、競売に付されましたが天皇陛下から拝領の銀杯はそういうこともできず、堺から立ち退きざわに住吉神社へおあずけしたと申します。

今も宮内省から使者のみえた時にはその銀杯で御酒をおすすめしているそうです。〔葎乃書簡〕

「葎乃書簡」には、「天皇陛下から拝領の銀盃」とあるが、銀盃は堺県庁から下賜されたもので、天皇から拝領したのは三重ねの木盃である。堺市立中央図書館に、『明治天皇行在所御記録』が所蔵されている。これは、仁平の相続人である河盛榮次郎が『堺市史』編纂のために、昭和2年に堺市役所に提出したものを写し取ったものである。該当する部分を抄出しておく。

明治十年二月十三日

明治大帝より 河盛仁平へ下賜品

菊御紋三ツ星盃 壹組

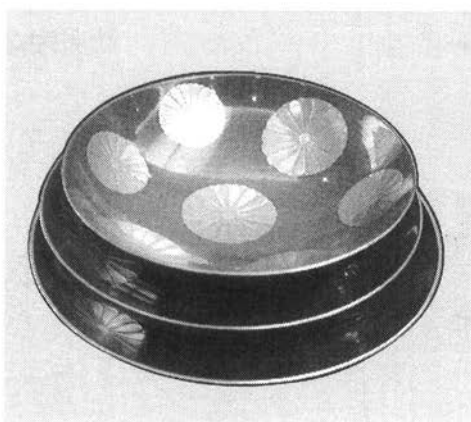
紅白縮緬 貳疋

金貨 五拾圓

堺縣廳より桐御紋七重の銀盃 壹組

右之品々下賜に相成河盛家之寶として保存可致事然るに河盛家は種々なる不幸にして失敗の結果大切な下賜品を保管すべき倉庫無之に止得官弊大杜住吉神社の主典橋本光全殿に

自分より相願同神社の寶藏にて大切に保管被下る事を依頼したり(ルビ筆者)



それでは、蔑乃が天皇から拝領したものを、どうして銀盃だと覚えていたのだろうか。明治18年6月5日(金)の朝日新聞「河盛仁平氏履歷」に、《是より前明治九年の春主上の行幸ありし節行在所を申付られ俄に之を新築せしが其後賞として宮内省より銀盃一個税所堺縣令より白縮緬五反を賜りたり》とあり、朝日新聞の記事の内容が後々にまで誤って伝えられたのだと思われる。

住吉大社に木盃を奉納したことを知り、訪れたところ、権宮司の神武磐彦氏と権欄宜の小出英司氏が社務所の応接室で木盃を見せて下さり、箱書の読みにくい文字まで教えて下さった。小出氏が、菊の紋を七つ散らしてあり、それが三重ねあるので、七が三つで「昆」になり「喜」を表す、と教えて下さった。



箱書を翻刻しておく。(ルビ筆者)

明治十年二月十三日和泉乃國
堺乃住河盛仁平乃家乎
今上天皇陛下我行在所斗

被定御一泊被為在ル其御種々乃御品乎下賜し中乃御紋散シ之木盃三重乎
明治二十八年五月當代之河盛
仁平氏吾眞住吉鎮坐
大神乃御前爾奉納セシ
モノ也
從四位男爵國美

住吉神社
宮司津
守國美印

箱書にある《當代之河盛仁平氏》は、河盛榮次郎氏のこと。

「蔑乃書簡」に、《河盛家に属するものは、競売に付されましたが天皇陛下から拝領の銀杯はそういうこともできず、堺から立ち退きぎわに住吉神社へおあずけしたと申します》とあった。これが事実だとすると、仁平の子孫が堺から大阪市内に移ったのは、仁平が亡くなった明治18年から10年後のことになる。《天皇陛下から拝領の銀盃はそういうこともできず》とあるが、明治の新聞には、こつそりと天皇の下賜品を売った人もいることがゴシップ記事として出ていると、小出氏が教えて下さった。

河盛仁平がいかに神社仏閣に寄進したか、また、その没落については、次回に譲る。



選者の義務 主催者の義務

少し堅苦しい表題になりましたが、今回は川柳大会で気になったことを記してみます。先ず、選者が心得るべきこと。

- ① 公平無私に徹すること
- ② 良い句を見逃さないこと
- ③ 明確に披講すること

右の①は常識且つ鉄則であり、説明する必要ありません。②につきましては、後日改めて取り上げたいと思っています。問題は③です。選者は自分が抜いた句を、出席者全員が聞き取れるように、明瞭に読み上げる義務があります。ポソポソとした小声では、せっかくの入選句が台無しです。声の小さな人も、マイクに口を近づけてハッキリ話せば会場の隅でも聞き取ることができます。特に気になるのは、上五・中七までは明瞭でも、下五で声のトーンを落としてしまう人が多いことです。下五が聞き取れないと、作品の内容を掴むことができず、とても歯がゆい思いをさせられます。壇上では、「照れず、怯まず」そして、「入選句を明確に伝えるのは選者の義務である」ことを肝に銘じて、堂々と披講してください。次に、主催者が心得るべきこと。これは数え切れないほどいっぱいありますが、簡単にまとめてみます。

- ① 周到な準備をすること
 - ② 円滑な進行を図ること
 - ③ 速やかに発表誌を届けること
- 右の①②については、仕事量が膨大でいちいち書き上げま

せんが、どの主催者も努力をされて見事な運営をされています。大勢の参加者が楽しめるのは、目立たないところで仕事をされている皆さんのおかげだといつも感謝しています。

問題は③です。大会の参加者は発表誌を心待ちにしています。「会場で聞き取れなかった句を確認したい」とか、「いい句がたくさんあったが、発表誌を読んで改めて味わいたい」など、その想いはさまざまですが、届くのを待ちかねているのは誰しも同じです。大会の熱気が冷めないうちに、速やかに発表誌を届けるのは、主催者の大切な義務です。

毎年十月十日前後に開催される「川柳塔まつり」の詳細は、十一月号に「特集号」として発表されています。その十一月号が読者の手元に届くのは十月末ですから、発送及び郵送に要した日時を引きますと、大会終了後十五日ほどで印刷製本を完了させていることになります。この素早い対応は、編集部の方々と発送部の皆さんの並々ならぬご努力と、印刷をお願いしている美研アートさんのご協力のおかげです。

このように、出席者が三百七十余名もの大会であっても二十日足らずのうちに発行できるのですから、百名前後の場合ももっと速く対応できるでしょう。スタッフが少ないとか、印刷屋が混んでいるというような悪条件が重なったとしても、二カ月以内に発行するのは決して無理ではないはずです。

三カ月も四カ月も遅れた発表誌は「冷えきったピザ」のようなもので、読もうという意欲も湧いてきません。主催者は、「出席してくださった皆さんが待っている」「速やかに届けるのは主催者の義務」そして、「発表誌を届けて、大会が終了する」ということを、しっかりと認識してほしいものです。



本所深川を歩く

松永浩一

(一) 本所深川とは

時代小説作家、藤沢周平に浸りすぎ、藤沢周平が描いた市井物作品のほとんどが、江戸時代の本所深川を舞台にしていたのと、その後に見みだした池波正太郎、北原亜似子、宮部みゆき、山本一力、山本周五郎たちの作品の中にも本所深川を舞台にしていたので、いつか一日かけて歩いてみたいという気持を抱いていたのだ。

四月末の午前六時三〇分、J Rバス「ドリーム号」は東京八重洲口に着き、その足でJ R両国駅に向かった。

本所深川は、江戸の北東を流れる荒川とその支流の大川（現在は隅田川）が運ぶ土砂が浅瀬を作り、江戸が発展するなかで塵芥の捨場となり、それが埋められて本所深川が形成された。

当初は、江戸の「川向こう」と見られ、大川の西側は町奉行の管轄だが、本所深川は関八州の管轄になっていた。

明暦三年（一六五七年）の大火後、幕府は江戸城の消失を恐れ、その回りを空地にするために大名や旗本の屋敷を立ち退かせ、代替地として本所深川に与えた。それにもない下町も発展するなかで、本所深川も江戸市中に範入されたという。

江戸の町割りには江戸城を中心に放射状になっていた



が、本所深川だけは京都のように碁盤の目のようになっていたし、深川の仙台堀（現在は仙台堀川）から南側の海辺は堀割が縦横無尽にもうけられ、日本のベニスともいわれ、歩くよりも船の方が便利であったというのが特徴である。

本所の蚊は桜から菊まで居（柳多留より）

川柳は 義妹の贈り物

井上 照子

昭和五十七年が明けて一月三十日、義妹が坂道を自転車であたらしく、荒い息で入って来た。

新年には毎年兄弟が集まって楽しく語って日を過ごすことになっているが、その年は義妹の体調が悪くて義弟夫婦は来なかった。

義妹は入ってくるなり「仁乃ちゃんにお年玉も渡せなくて……」とテーブルに年玉の袋と小さな包を置いた。そして嬉しそうに胃の注射があと一回で済むことなどを話し、また来ることを約束して帰って行った。私の子ともにわざわざ年玉を届けに来てくれた。これが我家に来ることの最後であるなど、思いもしなかった。

次の日の朝、義弟から昨夜遅く千歳が高熱で苦しむので病院へ行ったら帰してもらえないと電話が入った。私は急いで病院に走った。義弟は私を廊下で引き止め「こんなになるまで、ほつといたんか、と医師に叱られた」と

頬を濡らし肩を落とした。掛かりつけの医師の言われる通り、胃のことを考え食事もう気を付けて来たのに、胆管ガンになっていた。それも治療の施す術がないところまで悪化していたらしい。本人には胆管に石が詰まっていりと言っており、決して病名を伝えぬよう医師から言われたそう。

こんなに悪くなっているのに、浮世の義理を果たそうと無理をして来てくれた義妹に心を打たれた。そして、これが夢であれば良いのに……でも覚めない現実であった。

病室に入ると千歳さんはベッドに横たわり昨日とうって変わった様子。顔が黄色く眼も黄色く光って見えた。「ゆうべ熱が出たんだってね」と私は静かに言った。「夕飯の用意をしていたら気分が悪くなって。胆管に石が詰まっているなんて……」と辛そうに言う。「先生は大丈夫って言うってらっしゃるから心強いなきや駄目よ」。事実を知っている私の心は乱れながらも気をつけて話していた。

翌日から殆ど毎日、昼食を少し持つて千歳さんと食べた。二月が過ぎ三月に入ると食事の殆ど食べてくれない。言うことは「いつ帰れるか」だけになって来た。

病室から見える桜の蕾のふくらみを見て、蕾の開く頃帰れるかも知れないわね。という

たびに私は目がうるむ、でも泣いてはいけない。千歳さんは砂がとれたら帰れると苦痛に堪えてその日を待っている。

四月も半ば過ぎ満開の花が散り始めた。「私はもう帰れない。きつと他の病気が出て来たのかも……」「先生は大丈夫と言われたじゃないの」千歳さんの心中を考えると居たたまれなかった。

久しぶりに新聞を開いた。なにわ柳壇が目にとまった。句を読んだ後に「どうぞご投句を」とある。題は「靴」。何時の間にか懸命に考えていた。始めて作る川柳。なかなかまとまらない。作句を考えている間、句の中に私は在った。

桜の花がみんな散ってしまった頃、千歳さんは願ひも空しく天国へ召されて逝ってしまった。

嘘ばかり言うてごめんなさい。心から謝り続けた日々であったが、五十二歳の若さで大きな川柳という宝物を私に贈ってくれた。

レッスンの涙の果てのトウシューズ

題の句が入選して以来、今日まで続けて三十年ほどになる。同人である句が作れないことが申訳ない気持ちでいっぱいだが、今日もノートを開いている。

第36回 全日本川柳2012年徳島大会

日時 平成24年6月10日(日) 午前9時30分開場
会場 あわぎんホール(徳島県郷土文化会館) 大ホール
〒770-0835 徳島市藍場町2-14

TEL 088(622) 8121

交通機関 JR徳島駅から徒歩8分、徳島空港からのアクセス
(徳島空港—JR徳島駅) 空港連絡バスで28分

宿題 第一部 4月16日締切(当日消印有効)

(事前投句 高校生・一般の部)

「踊る」近江あきら選 「大」人 小梶 忠雄選

「鈴」大野風太郎選 「巡」礼 長江 時子選

(事前投句 小・中学生の部)

「呼ぶ」堀江 加代選 「おとな」赤松ますみ選

「自由吟」西 恵美子選

専用用紙のない方は2×16cmの句箋紙一枚に一句を記入・各題
二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記。

投句料 1,000円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛
郵送または郵便振替口座へ送金のこと。(当日消印有効)

投句先 小中高生は投句料無料。

〒530-0041 大阪府北区天神橋二丁目北1-11-905

TEL 06(6352) 2210 FAX 06(6352) 2433

郵便振替口座 0099701913575

(社)全日本川柳協会 宛

宿題 第二部(当日投句、11時10分締切)

「野」心 渡辺 梢選 「カメラ」新家 完司選

「燃える」田頭 良子選

各題二句、当日配布の句箋に記入。

第二次選者 久保田半蔵門 赤井 花城 岡崎 守

堀井 勉 天根 夢草

参加費他 四、000円(参加費二、000円、昼食他二、000円)

表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞

(4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ

全日本川柳徳島大会実行委員長 井上 博

△表彰式典・前夜祭ご案内▽

◎表彰式典 平成24年6月9日(土) 午後5時半

(川柳文学賞・功労者・大会10回連続出席者)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場

会場 阿波観光ホテル 5階(JR徳島駅から徒歩2分)

〒770-0833 徳島市一番町3-16-3

TEL 088(622) 5161

参加費 八、000円(会食・アトラクション)

大会・前夜祭のお問い合わせ先

〒773-0008 小松島市田野町字本村11

土橋 旗一方

全日本川柳2012年徳島大会実行委員会事務局 宛

TEL・FAX 088(532) 9343

大会・前夜祭参加費の送金先 4月16日まで(必着)

郵便振替口座番号 01600171140086

全日本川柳協会徳島大会事務局 宛

△宿泊・観光ご案内▽

宿泊 ホテルクレメント徳島・徳島東急イン他

宿泊料金・泊朝食付 税込み 7,875円・10,500円

観光▽鳴門公園・渦の道・大塚国際美術館観光

6月9日(土) 12時45分〜17時 6,900円

集合場所 JR徳島駅前 12時35分

募集人員 45名様(最少催行人員15名様)

▽秘境祖谷観光(祖谷のかずら橋・祖谷温泉・大歩危峽船下り)

6月11日(月) 8時30分〜18時10分 8,900円

集合場所 JR徳島駅前 8時20分

募集人員 45名様(最少催行人員15名様)

宿泊・観光申し込み・問い合わせ先

(株)エアトラベル徳島 担当・森・菅

TEL 088(625) 5551 FAX 088(653) 2344

本社一月句会

一月六日(金)午後一時
アウイーナ大坂

一月句会は、お屠蘇気分醒めやらぬ六日、投句者8名を含む110名の参加で開催された。初参加は高田誠二氏、山本進氏のお二人。台湾から昨年に続き涂世俊氏が参加。台湾川柳会は日本人30名、台湾人20名の50名程度で開催されているとのこと。

句会に先立ち(初歩教室年間賞)の三氏、次いで昨年の月間賞永久保持者の木本朱夏さんが表彰された。

今月のお話は小島蘭幸主幹(町並みとエキストラと川柳)と題し、火曜サスペンス劇場に竹原川柳会の柳友とエキストラ出演されたことをユーモアたっぷり話された。繰り返し話されたのは竹原の町並みの美しさ。

何もない古い町並みだけがある 蘭幸
「何もないから私は好き」と言った旅行者の言葉が主幹の心を打った。(まっお記)

月間賞は、古久保和子さん(和歌山市)

(司会)美籠・善純(脇取り)真理子・蕉子

(受付)舞夢・わこ(清記)勝弘

席題 「とことん」 山本希久子選

妻としてとことん財布にぎつてる
増税の前にとことん身を削れ
どん底を極めてからの登り龍
頼りないトラをとことん応援す
徹底的に除去してほしい放射能
年金が寒いとことん切り詰める
とことんのとんの辺りで息が切れ
どうせならとことん呑んでからあの世
あんなならタダとことん使われる
好きだからとことん尽くし疎まれる
最後まで歩いて着いた花野です
退化した脳で思考がどん詰り
汗全で出し切ったことありますか
正月までとことん家計頑張った
攻める攻める攻める別嬪落すまで
極限を前に立ち上がった心
その場ではとことん責めぬ思いやり
バラ銭も晒して好きなコップ酒
残りものとことんさらうからメタボ
落ちるとこまで落ちた本でも読みますか
オーロラをとことん追うて行くつもり
とことんまで踏まれ雑草根が育つ
こうなればとことん食べて元氣出す
ぼろぼろの辞書から亡父の声がする
朝に夕にとことんつくす介護の手

千里 直樹 森昭 保州 寿子 大輪 直樹 かずお 淑子 美智代 光久 ダン吉 りこ 進 好よしみ 淳子 葉子 蘭幸 順子 集一 わこ 蘭幸 美籠

これがまあとことん惚れた寝顔なり
三次会まで騒がねば気が済まぬ
はつはるを遊び疲れてしほむ毬
華欲しく乾いた夢をまた絞る
わたしの流儀で閉店まで粘る
一年の計をとことん仕分けする
くやしいけどとことん女しています
佳

とことんについてない日は二度転ぶ
幸せを円周率が追いかける
とことんまで慕われている深い皺
とことんまで言って一人の夜が長い
親子の絆最後の最後まで切れぬ
人

その日までとことん女性らしく生き
地
言い勝つとことん辛い風あたり
天
とことん怒りとことん泣いて忘れよう
軸

追う人があつてとことん弾む毬
兼題 「駅」 藤井正雄選
肩叩きされて定年待たず下車
無人駅待っているかも知れぬ母
道の駅置置気にせぬ野菜たち
駅裏の一杯からの迷い道

いさお 完司 朱夏 郁夫 扶美代 完次 菜々子 好 富美子 光久 楓楽 ルイ子 賢子 美籠 牙子 蕉子 遠野 房子 千休 蕉子

輕装で旅行駅には五分前

駅舎だけ残しさびしい廃止線
定年の日も変わらない朝の駅

山の駅ストロブ囲み酒を酌む
白鳥が来るさいはての無人駅

駅裏に恋の抜け殻捨ててある
道の駅あれこれ買つて乗り遅れ

退職日駅でワイフに飛び付かれ
駅裏に妻に内緒の秘密基地

通過駅切ないものを抱えている
村おこし訛りも温い道の駅

恋人を幾度泣かせたあのホーム
東京の駅生き馬の目を抜かれ

赤帽のいた日なつかしステーション
道の駅キャベツも顔も並んでる

詰襟の想いが巡る駅舎跡
出発も挫折も見てた上野駅

雪みちを歩いて駅の灯が温い
母を泣かした駅を誰かが持っている

駅までは近いが会社には遠い
ふるりの駅は変らず人は古い

くたびれた僕が立つてる貨物駅
わたくしの終着駅は君の胸

ふらり降りた駅で根を張り枝を張り
朝に夕染しく降りた過去の駅

故郷の駅に昔の顔がある
おりる駅決めないままに故郷を捨て

ルイ子

唯教

まつお

克己

朱夏

富子

紀子

耕治

いさお

富美子

直樹

溝作

瑠美子

俣子

終着駅着くまで夢を見たい窓
銀河駅一番先に母と会う
佳
人情が行き来していた木の駅舎
一言をここで吐いたら駅は冬
絆という駅で希望の風と揺れ
君を待つ感情線の始発駅
まなうらに駅馬車が行く砂ぼこり
人
聞き足らず言い足りぬまま送る駅
地
旅人がまた訪れたいと思う駅
天
疲れたら憩える妻の駅に着く
軸
建て替えて古里の駅他人顔
兼題 「マスク」 伊達 郁夫選
マスク越し見てもやっぱりいい女
ライバルの甘いマスクに敵わない
マスク美人も念入りに化粧する
マスクじゃない妻のハートに惚れました
マスクした自分史僕が見当たらない
マスクして時どき舌を出している
善人のマスク今さら外せない
アイマスクしばしこの世を仮眠する
自信のない顔が隠せる冬が好き

誠一

好

楓楽

森子

寿子

世俊

瑠美子

一風

希久子

求芽

准一

弘一

善純

寿之

生き様が滲み出ているデスマスク
マスクした顔に自信を持つている
マスクして嘘がばれないようにする
いつの世も甘いマスクが作る罪
マスクして私をかくす交差点
夢見るように笑顔のデスマスク
お喋りな妻にマスクをプレゼント
信念に生きたマスクは揺るぎ無い
退院日マスクメロンが未だ熟れぬ
おしゃべりはマスクをしてもよく喋る
マスクから物言いたげな瞳が覗く
マスクして口裂け女隠してる
木洩れ日の甘いマスクにときめいて
妻母女その場でマスクつけ変える
傷心を隠した大きな目のマスク
花粉症ですのマスクに凝っています
はつきりと物言いたくして取るマスク
誰だろうマスクが頭下げてくる
マスクしててもお喋りは止まらない
善人のマスクが一人歩きする
こっそりとマスクを干しているピエロ
銀行はマスク外してから入る
マスクからマスクへ恋のエピソード
佳
秘密ひとつマスクの奥にひそんでる
セシウムを恐れずマスク外したい
被災地のマスクが春を待ちわびる

則彦

楓楽

義

すみ子

美智代

敏治

忠昭

富美子

正和

完司

紀乃

克己

よしみ

俣子

扶美代

かずお

俣子

勝弘

寿之

哲男

進

時雄

柳弘

公誠

賢子

朝子

ありがとうマスク外して言いなさい
マスクして絵になる人と冬の駅

ダン吉

人

特大のマスクを龍に買ってやる

耕治

地

大型のマスクをつけて消費税

蕉子

天

命かけいのちと対峙するマスク

美花

軸

マスクしてひと言明日に置いておく

富子

兼題 「地図」 池

森子選

ブータンの地図を探しに図書館へ

忠昭

七色のクレヨンで描く春の地図

朱夏

世界地図どこを開けてもききな臭い

富美子

磨り切れている古里へ帰る地図

完司

年あらた私の地図を染めて春

よしみ

少年の地図は真つ白無限大

一步

おほらげな地図を頼りに行く余生

則彦

句読点どこにつけるか未来地図

郁夫

竹とんぼ白い地図から跳び出しぬ

岳人

私の地図に絆が書いてある

章子

はつはるの地図を濡らした通り雨

朱夏

カーナビに頼り自分の地図がない

みつ子

ナビゲーター無くて人生長い旅

萌子

硝煙の消えた私の世界地図

ダン吉

煩悩と関き合つてる僕の地図
行く先は地図に任せて善寿卒寿

光久

地図にない街へ探しにいく希望

堅坊

私の地図迷った末の行き止まり

理恵

最終の地図に胆力試される

希久子

天国が見つかりません世界地図

ふりこ

しあわせの住む国探す世界地図

進

あちこちに母の気配り地図に見え

俣子

母の地図辿れば忍の道ばかり

一風

太陽が見てる私の歩く地図

好

地図にない道で心の散歩する

美花

抜け道も脇道もある俺の地図

かずお

地図通り進んで道に迷つて

楓楽

地図開き消えた絆に増えた緑

起世子

地図にないところへ行こうおほら月

世俊

また余熱余白に地図を描き足そう

耕治

カーナビと隣の席がよく喋る

俣子

自販機で未来の地図が売っている

義

佳

少年の胸は一途な地図を抱く

寿之

地図にない街でこころのまま生きる

完次

横道は一本もない父の地図

楓楽

未来地図隅に安楽椅子を描く

好

極楽への地図は白紙の非売品

正雄

人

透明な地図を歩いているふたり

見清

義

地に渡す地図に迷路も入れておく

集一

天

てのひらの皺はわたしの生きた地図

朝子

軸

立ち位置を確認せよと言うマップ

朝子

兼題 「祝う」 北野

哲男選

久し振りに白タイ締める嬉しい日

正和

黒まぐろ祝儀価格で景気付け

富子

樽酒のしぶき嬉しい鏡割り

好

祝成人重い日本を背負わされ

たもつ

血糖値しばし忘れる祝い膳

楓楽

核ゼロのその日は全紙面踊る

ダン吉

七彩の放水木遣り唄響く

克己

祝えない3・11の誕生日

宏

新春を祝う雑煮も我家流

紀乃

八起き目の男の決意祝う酒

朝子

「サクラサク」報せに歓喜した昭和

淳司

花嫁の父には苦い祝い酒

遠野

ジェラシーも一緒に包むのし袋

朱夏

百歳の祝いにとつと湧く拍手

順子

母の百歳祝う娘も傘寿にて

いさお

代読の祝辞漢字は読まぬ主義

和子

お祝いのワインは赤と決めている

美花

結婚の祝辞も本の通りです

日の出

窓際で祝辞を聞いているじエロ

門松も日の丸もなく祝う朝

バンザイを今年は言おうタイガース

眠気さめ万歳だけは唱和する

御祝儀の額で席順決めてある

成人式迎える孫が二人いる

成人を祝う活断層の上

祝辞終わる頃に出席いたします

背を叩く痛い祝福勝ち力士

七人目産んで近所に祝われる

ライバルへ祝詞男の句読点

下手くそな賀状に友の顔浮かぶ

元旦は鬼にも蛇にもおめでとう

ご祝儀をはずむ二度目の婚だから

佳

成人式母の振袖着ると言う

祝い酒味方も敵もない絆

主治医から長生きしてという賀状

万歳を自分にしたい時がある

孫からの年玉で靴下を買う

人

バツカスの次に氏神初詣

地

初月給父さんと飲む縄のれん

天

たつたひとりの卒業生の胸にばら

郁夫

敏治

まつお

ダン吉

柳弘

美智子

由一

保州

弘風

郁夫

修

克己

章子

武彦

千代

富美子

保洲

義

千代

正和

一風

天

俣子

軸

三世代並んで動く祝い箸

兼題 「麺類」

西出 楓葉選

子はバスタ親はうどんで違う夢

キッチン革命児ですカップ麺

飲み会の締めはいつものラーメン屋

マツケン益荒男ぶりを観るうどん

うどん派そば派これだけは譲れない

ローマでもお箸で旨いスパゲティ

秒針と競い掻き込む駅のソバ

うどんでも食ってめくうに別れまひょ

駅そばの汁までのんだバスボート

振り袖なのにラーメンに誘われる

ピフテキに飽きて素うどん食べに行く

素うどんからうどん食べるから旨い

ピンチだからうどんすすって考える

紅白の歌も交える晦日そば

レストランからうどん屋で逢う仲となり

うどん屋で聞いた話を犬にする

素うどんが好きしぶちんと言う勿れ

忘れたいことをうどんと流し込む

素うどんのダシ一言ある男

素うどんが好き男で隙がない

麵好きも首を傾げる伊勢うどん

カップ麺を重しに妻の置き手紙

雅明

富美子

玄也

菜々子

希久子

則彦

進

真理子

理恵

見清

郁夫

大輪

順子

美龍

希久子

義

千代

章子

朱夏

ダン吉

時雄

進

円満に素うどんすり別れけり

真打ちば扇子で美味い麺を食い

三が日済んで備蓄のカップ麺

あつあつのうどんすべてを許してる

信州に住んでお蕎麦のアレルギー

朝はパン昼はウドンで夜はコメ

ラーメンを支那そばと呼ぶ戦中派

駅中のうどん背中に耳がある

三分が待てない孫のカップ麺

素うどんでパワー全開とはゆかず

佳

立ち食いのうどんお世話になってます

まあまあ妻と年越しそば吸る

十割のそばに男の一本気

カップ麺世帯を持てとけしかける

晦日そばは吸り終えたら古希だった

人

ラーメンの列で連帯感が湧く

葛うどん午後から雪になるらしい

地

ラーメンライス夢はしっかり持っていた

天

面倒な話はうどん食ってから

軸

平成23年本社句会皆出席者

追加 米澤 俣子

千代

淳司

哲男

美花

真理子

正和

和夫

千里

俣子

好

まつお

武彦

寿之

富子

扶美代

和子

菜々子

わが故郷

毎月24日締切・35句以内厳守掲載は原稿到着順となります。楷書で誤字のないようにお願いいたします。

編集部

川柳塔打吹鳥歌

野口 節子報

神武より変わらないのは人の欲
変人で苦勞をかけたなあ妻よ
家の中一人ぬけると変わる風
時々愛妻の顔恐妻に
悔しいね原發事故の変わりよう
立冬を過ぎて野山も衣更え
この年の変化激しさと耐えて生き
年々の流行変わり追いつけぬ
雲囲気て酒の回りと早くなる
苔むした回る水車の重き音
年寄りが回りくどくて嫌われる
被災地を回る陸下に励まされ
落城をごまかす舌がよく回る
から回りばかりしている右の脳
晴れマーク洗たく物に目が回る
納得のフルスイングで空回り

泰山 石花菜 和子 楨元 勝誉 龍枝 久茂代 泰輔 貴恵 恭子 富恵 勝憲 盛桜 美知江 善江 くにこ

真夜中に感じる地球の回る音
聞き役に回り酔えないカバン持ち
ふるりの墓に呼ばれてUターン
好きだった妻帯者とは露知らず
震災にほんの露ほど寄付をする
露の身が八十歳を越えてゆく
露ほどの飴を舐めさせ消費税
一滴の露に生命を助けられ
露ほども迷うことなしボランテア
露ほども知られてならぬ傷もある
ブランドのコーヒ至福の香り立つ
直伝は母のブランド五目飯
無印のブランドで頑張る地方
ブランドの米風評に泣いている
ブランドのハンカチーフは汗知らず
ブランドのネクタイ締めて畏まる
私と言うブランド買うは妻一人
ブランド米秋田小町に惚れました
光り輝くブランド米を食べている

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

若者のメール交換楽しそう
メールして返事待つ間のお茶する
メールでは言える口ではまだ言えぬ
父からのメール拳骨より効いた
月からのメールお安くしときます
帽子にリユック旅立ちの顔になり
遠足の前の楽しさ旅仕度

公恵 義人 紀の治 芙美子 悦子 螢 滋 道子 節子 芳光 たけ代 玲子 みち子 ひかり 三津子 重忠 清 紀美恵 美ツ千 太虚報 半徳 現代 蘭幸 淑子 笑子 比呂子

人生の長い旅路を振り返る
かささして行く露天風呂風の声
米子路の雄雄し大山出迎える
傷心を癒やしてくれた旅力
一歩家出ると旅だよねあボチよ
見上げたらおちついてきた夜の月
虫の音が助けてくれる夜仕事
わだかまり棄ててわたしの夜明け来る
真夜中のベルに独居の母思っ
看護師は靴音もなく見廻りぬ
夜行バス母がふる里連れて来る
正田美智さんの頃の星雲澄んでいた
夕日落つ少し寂しい音させて
送迎つきのランチ友っていいですね
作品の出来は言うまい趣味の道
あれもこれも欲しい欲張りな私
コンベイトウ甘い魔法をかけてくれ
空に浮く雲に自由を聞いてみる

和歌山三幸川柳会

武本

生きているただそれだけがドラマ
老々介護ハッピーエンド無いドラマ
ドラマ観てギャップに耐えている夫婦
おいお茶ドラマの余韻ぶちこわす
監督の手を焼かせている大女優
そんな夜はドラマチックな夢を見る
フィナーレの脚本練っている夜長
朝ドラで岸和田の町全国区

房子 京子 弘子 幸子 白狐 栄恵 千代美 汎美 慶子 輝恵 敬子 不朽 静風 厚子 栄香 千枝 史子 一路 碧報 義泰 義雄 章夫 武 絹子 町子 まる子

一通のメールドラマの種を蒔く
 一期一会小さい秋にあるドラマ
 先走るドラマに笑顔凍り付く
 結論を出すには少し早過ぎる
 オロオロと時の早さに蹴つまずく
 変り身の早さでチャンスものにする
 ひと走りポストへ思慕の熱いうち
 早足で背を追い立ててくるノルマ
 早送りしたい日もある秋の雨
 お月様手遅れですか美人の湯
 一年の早いビデオが回り出す
 あの頃の答日から降ってきた
 あの頃は路地に優しく落ちていた
 あの頃を許し合って共白髪
 恋人の頃はあふれる程の夢
 棒グラフ命をかけた頃もある
 あの頃の苦労は黙す母の皺
 鬼の首取れたあの日に戻りたい
 メタボではなかった頃に戻りたい
 パーセントの大金持ちが描く未来
 賃金の格差に浮いた砂糖菓子
 住む世界違うと君を知る釣書
 学歴が踏絵のようにしやしり出る
 出来る子も出来ない子にも母の愛
 いつからか格差社会に泣くヒト科
 失業の無職と金持ちの無職
 IQがなんだみことな土踏まず

喜久子 孝子 富子 准一 柳昌 菜摘 宏夫 八重子 美羽 イセ かずみ 朱夏 起世子 当代 俣子 昇 ひろ子 登美代 東吉 章子 幹子 みね 碧 純子 美花 保州 和子

川柳塔おっぱい吟社香川 川崎ひかり報
 親切が過ぎてお茶まで出す羽目に
 初診者は予約予約の後回し
 乗り継いで来た明けやらぬ里の駅
 大写し額に笑顔の孫が居る
 お駄賃を貰い一人のお留守番
 妻の留守ひとりでチンして寝るだけ
 新雪が昨日の汚れ消してゆく
 城北川柳会大阪 伊達 郁夫報
 冤罪を裁かれ無念二十年
 松と梅竹の節目の花器に生け
 余白には最後に妻へありがとう
 したたかに生きた勲章顔のしわ
 永らえて生きた余白の赤御飯
 上手下手別ころある絵のハガキ
 贅沢が分かる日本のゴミの山
 小波ほどの節目にいつも溺れかけ
 節目から遊び心が顔を出す
 節目の日行く末折る千歳飴
 自分史の余白頁は埋められず
 ヒト科には神の裁きがまだ見えぬ
 自然薯のように貯え出番待つ
 歴史的事実後世に裁かれる
 行間の余白が醸し出す余韻
 底抜けの脳天気だなく笑う
 あの時が節目だったと悔いる今
 はつ恵 放任 弘 よしみ あきら いさむ ひかり
 千恵子 榮子 隆男 あさ子 とし子 ひさ乃 妻子 美智子 寿子 麗 縣 笹 郁夫 権香 ルイ子 正 かずお 弘風

佳句地十選 (1月号から)

久保田 千代選

丁寧に歩く私の道だから
 最強の武器はあなたの笑顔です
 切り替えがうまいスイッチ持っている
 とっておきの言葉が少しぬめりだす
 蓑虫の平和は蓑の中にあり
 海の青苦心の跡の絵の具皿
 一日の心を撫でる茜雲
 鏡見なさいそれがいつもの貴方なの
 心する母なる海が人をのむ
 じっくり生きる句読点打ちながら
 未延子 富美子 知恵子 大輪 紀子 庸佑 慶一 盛夫 奈良司 希久子

金もちはしたたか庶民は淡泊
 財政危機世界中から裁かれる
 人生の余白徒然草を読む
 転勤のたびに人間臭くなる
 釈迦の手は人を裁かず罪裁く
 雲行きへ器用に仮面付け替える
 飾らない言葉の奥にある節目
 艶のある節目自慢の床柱
 黙秘権押し通します以下余白
 生きるんだ一〇〇歳向けたしこをふむ
 わたしより辛抱強い木守柿
 人生の節目を越せた秋の笑顔
 いたいた命楽しむ秋の天
 本心を書ける余白の息遣い
 勝弘 義昭 一步 和夫 野鶴 賢子 柳弘 倫子 昭 修 志華子 典子 たもつ 朝子

大袈裟に生きるがための握手する
人生の余白を大切に生きる

借金も財産というしたたかさ
母に似てしたたか父に似て頑固

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目 一粹報

復興へ目ざわりとなる原発よ
コストダウンしてわたくしを売りに出す

許せない縄が少うしずつ緩む
ぞんぞが付くような噂が楽しいか

天下取る夢の逆算まだ出来ぬ
好い夢が見たくて二合飲んで寝る

目ざわりな頑固親父は宝ものの
公務員コスト削減うわの空

逆算をされた記録に嘘がある
目ざわりな雲が何かを訴える

できる部下目ざわりながら役に立つ
飲み忘れ数で逆算する葉

ホツとする前立腺は異常ない
手がふれてときどきとした日もあった

目ざわりも存在感の裏返し
自家生産コストの高い野菜食べ

亭主ほどコストからかぬものはない
親展と書いてあるの見たくなり

目ざわりの上司にそつと毒を盛る
目ざわりを覚悟で妻について行く

コスト下げてみたが売れない姥核
百円の大根だつて手間がいる

妻

正子 満作 克己 集一 洋々 一瑞 美恵子 とも湖 孝男 清信 秀四 保美 金祥 地佳平 圭一郎 節子 蟹郎 みゆき 回春子 喜子 隆浩 一京 毅 凱柳 茂登子 妻子

ぞんぞがつく教師強姦する世相
拭けばとぶ一円玉もわたくしも
没句大会期待の星が一人欠け
精いつばい生きた落葉がいとらしい
逆算をすれば景品つくはずだ
偽札のコスト調べて止めるにする
コスト割れどうにもならぬこの時世
スカイツリー下をのぞくとぞんぞつく
目ざわりな電柱みんな地の底へ
マラソンの水の補給はこの辺り
目ざわりだ電車で化粧食事する
方向を変えぬカタツムリの一途

川柳クラブわたの花(大阪) 西川 義明報

春名 清帆 行男 菊香 善夫 振作 弘康 孝二 昌鼓 大鯨 由美子 一粹 民 博子 愛子 奈良司 宏至 宏 義明 正春 俊子 はじむ 晴美 浩三 孝子

さざ波一つ立たぬ生活に退屈す
老い先に不安いつばいケセラセラ
何となく波長が合わぬ日の無口
もみじのお手手やたら触つて叱られる
時忘れ話題つきない女旅
おばあちゃん散歩しましょと紅葉の手

松露川柳会(鳥取) 小西 雄々報

空腹時昼のチャイムにはつとする
お互いに腹をさぐつてご挨拶
ゆつくりと聞けば治まる腹の虫
飲みすぎか腹は太鼓に似た音だ
ビール腹自慢にならぬ検診日
腹巻きへ臍繰り入れて温める
手あみした腹巻きやつとできあがり
ごろ寝してテレビ見ても腹が減る
腹具合よくなり眠くなってきた

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

朝が来た起きねばならぬ生きるのだ
落ち葉舞う生きて苦業は五分と五分
風当たりかけて小さく生きている
同じ傷持つ人ばかりとまる指
残念と言いつつも目は笑つてる
生真面目に生きて皆からかわれ
命抱くほんのり照らす道がある
死ぬ生きるなんて騒いだ遠い橋
生きるとや診察券を五・六枚

和子 ますみ 美代子 耀一 知佐子 一風 公美枝 鈴枝 久子 智恵子 弘子 和代 静江 正光 雄々 房子 いわゑ たもつ 久仁雄 昌紀 光久 加お里 美智代 扶美代

頑張らないあきらめないと生き上手
もぐら叩き案外生きるルールかも
元氣ねと言われ微笑む外はなし
まだ生きる執着があり爪を切る
薬より友のジョークに出る元氣
暑い寒いお腹が空いた生きてるな
真つ直ぐに生きてたんこぶだらけなり

川柳らくだの会鳥取 岸本 宏章報

震災の黙祷空気で冷える
思い出のページに涙粒もある
ライバルの憎まれ口を背が受ける
近頃は隣同士も知らぬふり
結論が出なかったので異論出す
お似合いと言われる服が爺くさい
菜を洗う砂一粒に氣を使い
粒選りでなくても安い方を買う
冷たかろうとお湯で洗えと茶碗言う
考えておくと冷たく断わられ

川柳塔なら 坊農 柳弘報

滝音を紅葉巨石の下で聞く
人生は一発勝負試せない
法よりも愛を信じて事実婚
期限され試してから食べる
試すことできぬ一本の道進む
命令に添うか試作ふたつみつ
夫の舌試しに変えた調味料

史郎 彰治 ささ恵 いさお 博一 次郎 仲勝弘

法律の番人に裁かれる
被害者にすれば裁きが甘すぎる
法の裏付けは銭が落ちている
試されているとも知らずはいいと
ギャンブルで法外な金三代目
法があるから殺されず生きている
この法に背くと極楽に行けぬ
真つ直ぐな目に試されているハート
何度でも試す薔が聞くまで
芯がある華やきがある老舗の灯
石投げて愛の深さを確かめる
満願の日まで試されている私
女から神の試練に似た仕打ち
試すのは止そうホントは好きらしい
多数決あなたは法のように言う
呆けてないか孫賢問で試してる
お色気を混ぜた法話は眠らない
縁を切る前に大根試し切り
ご破算になった試しで試されて
法廷の女に乳房張つてくる
観月橋渡れば秋がほほえんだ
一寸だけ色づくみずみずしい秋
老舗の灯秘伝受け継ぐ絵ロソク
遠近法秋を大きく描きあげる
引き返し出来ぬ試練の向かい風
最善の解決法は知らぬ顔
試練の量涙を吸つてくれました
水景園あずまやばつん風は秋

隆之 萌子 郁夫 堅坊 勝利 満作 芳子 寿之 順啓 良一 比呂志 完次 弘風 ダン吉 一風 隆盛 真理子 理恵 國治 富子 柳弘 柳弘 はつ子 道子 あり 弥生

川柳塔みちのく青森 小寺 花肇報

楽天家隣火事でもケセラセラ
角砂糖ころころさせて打ち明ける
身を責める煩惱胸を出てゆかぬ
妻の愚痴楽天家には効き目なし
言い負けて抜け出た孫が輪の中へ
貧しさを笑い飛ばしている横座
目の前でちらちら動く飛蚊症
微温湯にとっぷり浸かる楽天家
ライバルの輪を抜けてから実る技
瓦礫からちらちら見える希望の灯
沈黙を破り溶け出す角砂糖
絶え絶えの空氣になつていく老後
ちらちらと妻の機嫌を覗く穴
脱出の疑問符みんな吐いてみる
目の奥で時々虫が悪さする
楽天家も夢を買つてた宝くじ
角砂糖入れ合う二人の喫茶店
サイコロが明日を決めてる楽天家
満月を磨いて羽化を待っている
薔薇が散る隣の花になりきろう
哲学の森で出口を見失う
ちらちらとフェロモンをまくチャイナ服
角砂糖貧しい部屋で本を読む
川柳塔唐津佐賀 仁部 四郎報

小とみ 信子 一湖 つとむ 綾子 きよし 初枝 吞舟 洋子 ひとし 美鈴 芳生 則彦 一吞 ふさゑ 花匠 愁女 井蛙 黙人 花峯 慕情 一花 五楽庵 高明

同期会笑みを浮かべた有馬の湯
呆けてゆくイントロのかすゞキレル
こんな日もあつたかと思ふ高島田
言葉かけ肩に触れ合うこのきずな
「はずがない」やがて史書は「ありました」

八尾市民川柳会大阪 土谷 耀一報

春まで氷を抱いている被災
来年は世界平和を願つて
挿鉢の刻みに方程式がある
凄腕のソムリエ実はお下戸だつた
父と子をしつかり結ぶ肩車
よいどん刻を忘れて侍る蟹
結ぶ手に愛の雫で光つて
一・一七から三・一一を結ぶ絆
終着という名の古い橋がある
秋風はおんなの芯をみじん切り
色欲もすこし残して冬帽子
小さな紅葉乙女は挟む日記帳

高知川柳社

小川てるみ報

ざわめきの灯りのなかに居る不安
団欒の窓へ湯気立つ灯のあかり
復興へ今日も善意の灯が太る
風の中鬼も信じる仏の灯
被災地へ世界の愛の灯がともり
被災地の灯りささえたボランティア

蜂 朗
勝 規
輝 夫
實 郎
四 郎

朝 子
雄 太
草 風
いさお
一 風
欣 之
華
紀 雄
扶美代
森 子
五 柳
耀 一

倉吉川柳会鳥取

竹信 照彦報

今日も無事明日を信じて米を研ぐ
恩受けた終生忘れぬ友のあり
人生の終りは夫の後にする
楽家終り良しだと我が身はめ
終りではないと信じて野辺送り
雨ニマケ風ニモマケルそれが人
前通る人に謝る枯すすき
人生を喪中ハガキが締めくくる
お人好し何時も誰かのカバン持ち
人の倍酷使した背に亀を負う
人は人俺は俺は生きて来た
二人して支え合つて人の文字
ふんふんと人の話は半分聞く
世の流れ人の流れに沿つてゆく
六十年亡天に沿つた道恋し
ブータンは精神一に沿わすと言う
TPPどじょうの髭が沿いたがる
沿道で両陛下待つ旗の波
選ぶほど人材のない難壇よ
目の黒いうちに遺影を選んどく
有無もなく清掃係に選ばれる
選り好みしてて婚期を逃がした
厳選してもらつた母さん大当り
選ばれて野次だけ飛ばす国の椅子
大晦日眠らず生きて年を越す
沿線の先は二人の浄土です

喜美子
けいこ
賀津恵
日出子
瑞 子
鬼 一
由紀子
玲 坊
貞 子
重 忠
泰 輔
和 子
美津恵
螢
康 子
恭 子
祐 子
英 子
次 男
石花菜
悠 子
風 露
智恵子
美代子
照 彦
萩 江

川柳塔すみよし大阪 岩崎 公誠報

葵えた手のリハビリ小さい毬握る
もの凄美人はあまり喋らない
寄り道しよ今日は嬉しい給料日
浮気やなあうまいいい訳湧く疑問
古今東西男は毬を蹴りたがる
週末は湖畔の宿で過そうか
口の中最新治療ボルト打つ
ハートがね弾むボールのごと恋よ
こんなにも智慧が湧くのに大樹せず
名水の湧くふるりの酒造り
美しい蹴毬が時代演じてる
殿さまに恋をしましたてんでまり
毬追つてゆけば昭和に迷い込み
三人が寄つても智慧は湧いてこず
カラフルな毬だよきつとあたたかい
決意して顔つき凄く穏やかに
今の世に人並みですと凄いいこと
次々と仕事湧き出す十二月
妻の激弱な僕に湧く勇氣
促した返事がとてもそつけない
お土産に電釜五ヶ貫つていく
飛び込めばゴム毬のような胸
百歳の詩集に元氣もらいます
凄いな母の言葉に力わき
復興を促す里に雪便り
歳とれば楽する事の智慧が湧き

シマ子
克 博
志津子
蕉 子
たかこ
和 代
伸 子
朝 子
勝 弘
柳 弘
太 郎
ばつは
昌 紀
まつお
芳 香
篤 子
半 銭
りつえ
五 月
かりん
定 子
桃 花
直 子
チエコ
萌
吉太郎

まだ白寿めがねせんかて辞書引ける
焚きつけて妻をパーティーに誘い出す
マジックと分かつていても凄いわど
凄みある顔に似合わず愛想よく
拍手など促す芸は笑えない
殿様と紀州路越した手毬歌
百歳の詩に和まれ湧く気力
綾錦手作りの毬母偲ぶ
青雲にうたかたの夢促され
恙なく育つて欲しい赤い毬

あかつき川柳会大阪 山本 柳昌報

一〇〇米掘れば温泉湧く日本
興味湧くネタで大衆引きつける
故郷の湧き水お土産にします
まだ少しシャバに居たいと欲が湧く
12月の空に向かって積み上げる
知らぬ間にこんなに積んだ恥の塚
子と荷物積むママチャリが逞しい
パンフ見てあだこつだと旅してる
飽食も飢餓も見てきた雲の旅
旅慣れて所持品ちよつと減ってくる
ミステリーバス風評乗せて西東
チョコレートひとつでハワイ聞かされる
おばあさんの旅には信号がない
地球の出眺める旅がしてみたい
独り寝にダブルベッドが広すぎる
屋根裏の空間ボクの城にする

晴雄 光夫 順子 とし子 公誠 妙子 裕之 舞夢 遠野 美籠 和雄 隆昭 太郎 武信 子 朝子 篤子 和子 穩夫 のぶ久 克己 義 祥昭 いさお 敏子

押し入れの空間冬を仕舞い込む
やすらげる空間だろう棺の中
空間が埋まらぬままの倦怠期
もう少し詰めてくれたら座れます
空間に無限の価値を秘めておく
トイレの空間これが私の城だろう
程々の空間人も風も呼ぶ
死ぬまでの空間地球に籍を置く
木枯らしの音に冬本番と識る
被災地よちうちこまないで陽は昇る
天災のうえに人災原発禍
原発が又おもしろしをしてござる
日本食孫に教える節料理
辺野古基地こだわる政府怒り湧く
下り専用階段で行くカジノ
日の丸の比率の中にある余白
犯されてるのは沖縄だけやない
愛と哀夫婦茶碗にてんこ盛り
七十年前の開戦知つてくれ

南大阪川柳会

津守

柳伸報

父親に洗脳された子のなやみ
此の頃は男パンツの別洗い
嘘ついた手を洗っても洗っても
ふる里に未練を洗う川がある
うっかりと言漏らしおこらされ
内紛のゴタゴタ漏れる会議室
漏れちゃったアバンチュールの夜の火事

秀夫 まつお 柳弘 勝弘 忠昭 たもつ シマ子 紀乃 美智子 峯二 宏 たかこ 正 茶助 野鶴 鈍甲 壽峰 生枝 柳右子 弘泰 たもつ 柳弘 弘子 更紗 清

口こみで売り切る野菜無農薬
お野菜の好きな孫ですたくましい
産地確認して買っている野菜
鳥やない文句いいつつサラダ食べ
かあちゃんのかぼちゃが笑う道の駅
人參の好きな男を部下にする
持て余す時間をバズル食べてくれ
人生はバズル明日が解らない
ハズされて苦難の道で運つかむ
朝食はベルトはずしてバイキング
期待したほどでなかった星三つ
大器晩成期待ハズレと思わない
バズルまだ解けないままのデスマスク
老母と来た老舗も消えて若い街
悪友の裁きに旨い酒の味
マフラーのおしゃれで底う喉仏
自転車の交通ルール見逃され
ふわふわの雲と散歩に出かけよう
金とって手を握つてる古い師
追い打ちをかける試練の福島産
モッタイないケニアの母も天国に
見せませ拘束力のない仕分け
けちけちと貯めたお金はしれてます
寒空にオレの財布が震える
どの辺り花の浄土か雲流る
刻だけを刻む瓦礫はそのままで
気合だけ入れて布団を抜け出せず
頼り甲斐孫の手よりも介護の手

庸佑 シマ子 和雄 直子 ばつは 栄子 弘風 あや子 百合子 なきさ 勝弘 ルイ子 楓楽 恭昌 とし子 タカ子 ひさ乃 紀乃 修 柳伸 ゆう子 一歩 太郎 忠昭 志華子 克己 昌紀 直樹

川柳ささやま(兵庫) 遠山

可住報

イケメンの旨い話にこ用心
空気が旨い幸せてこんなもの
あんこの肝が「旨い」と絶句する

寿代
久枝

毎日が日曜日でも忙しい
デバ地下の試食ごはんが欲しくなり
イライラはしないと決めて並ぶレジ
まつ子

富柳会大阪

古田 千華報

山頭火ゼロで死んだが名は残し

深雪

群青の天にこころを解き放つ

紅紫朗

姥捨山になつてくれるなケアハウス

未知

お月様とても近くになりました

千華

黄昏も氷面も忘れ歌を詠む

七朗

うそ噂すぐに捨てろと風の私語

千恵

匿名の投書癖のある文字で

初太郎

手を組んだその時ダイヤ差し上げる

晴美

その時は老母に借りる知恵袋

信子

一癖も二癖もある永田町

高鷲

秋を刈る母の軍手に癖がある

鬼焼

五欲みな捨ててしまったガン告知

壽峰

般若面はがしてくれた百度石

伸雄

偉そうに言うくせなのに偉くない

武人

その時をじつと待てる愛である

登子

その時は赤いドレスを着るつもり

奏子

爆音を残して風になる若さ

和之

ねぎらいの一言スィッチが入る

欣之

息子の靴用心棒にとってある

よしみ

抱きしめたその時嫁ぐなどと言ひ

佳子

先を読むくせが苦勞の種になる

彦次

せわしなく揺れてる足が氣に障る

惠

摺り足の重さに響く能舞台
軽やかな指OKにある規律
掛け声で弾みを付ける重い腰
検査結果医師の笑顔に迎えられ
金のこと以外だったら任しとき
お互いに距離を保つてお付き合ひ
OKの返事待つてる糸電話
お互いに我慢比べの仲直り
遺族年金のこと尋ねつつみかん喰う
絡み糸解けてあしたの予約する
譲り合う優先座席温もらず
お互いにもう後がない遍路笠
お互いに金より情の歳となり
お互いにご無沙汰詫びて長電話
被災した古里思えば気が重く
OKを軽く受け合ひままならぬ
願わくば重い荷物にならぬよう

川柳塔まつえ吟社(鳥根) 相見

柳歩報

丁寧に削る鉛筆にも命

柳 歩

慈悲深い筆から愛がほとばしる

柳 歩

水筆のしずくに秘めた和の心

柳 歩

和紙の上筆が生み出すバラダイス

柳 歩

筆まめな秋の風から返事来ぬ

柳 歩

私の旨いわたしが使いきる

柳 歩

大根が旨いぞ外は雪になる

柳 歩

川柳茶はしら(愛知) 関本かつ子報

関本かつ子報

クジ運の無さもつくづく五十年

遡行

盆栽に目指すとおりの枝づくり

雅美

老いて尚奇麗を望む恋予感

幸子

泣くもんかお菓子があれば頑張れる

美智子

お菓子なら何でも来いのお菓子好き

長吉

どら焼きの餡このままで堪えている

芳恵

ドクターの馬鹿止めるからまたほしい菓子

注湖

振り向けば昭和がピースして笑う

草庵

精一杯生きて後は振り向かぬ

久絵

くよくよは止まらぬ振り向くのも止まらぬ

千里

振り向いて終り良ければすべて良し

幸代

金数え振り向く顔は夜叉の顔

芳山

しんしんと更けて幸せ思う空

叮紅

しんしんと静寂の中誰の声

ゆき

しんしんと夜も更けベンが冴えてくる

昌枝

にぎやかな仏でしんしんはきらい

ミツコ

胸しんしんあなた待つ身が蝶になる

幸子

しんしんと神しんしんと手を洗う

桂子

菓子が出る句会ととてもいい句会

弘充

ブランドリーチョコ一つに少し酔い

政子

命日は戦地を偲びシネクリーム

禮子

泣くもんかお菓子があれば頑張れる

ちんこ

お菓子なら何でも来いのお菓子好き

長吉

どら焼きの餡このままで堪えている

美智子

ドクターの馬鹿止めるからまたほしい菓子

芳恵

クジ運の無さもつくづく五十年

遡行

盆栽に目指すとおりの枝づくり

雅美

老いて尚奇麗を望む恋予感

幸子

欠点を捨てたら僕でなくなつた
失つた時間を抱いて遊歩道
断捨離に何時の間にやら踊らされ
しあわせの積載量がまだ足りぬ

長柳会大坂

坂上

淳司報

言霊は羽二重となり棘となり
進歩する医療で寿命延びてゆく
重裝備今年も挑む冬登山
苦勞人言葉の裏を思いやる
肩の荷を少し降ろして年を超す
生半可進んで手挙げ恥をかき
ひと言の言葉の重み知っている
子に荷物持たせてママの遊びぐせ
苦や楽の荷物背負つて生きる日々
幕下ろし自責の念に一人旅
新調のスーツの襟に進路あり
引き受けた荷物が重い冬のバラ
何かある心の渦が騒ぎ出す
温暖化世界で荷物押し付ける
母さんの幸せさむ笑いじわ
肩の荷を少し預けて赤い服
進化論まだ信じない頑固者
科学技術進んで情に疎くなる
暖かい言葉で胸に灯が灯る
がんばれも時には傷に突き刺さる
体によいと進め上手にあった罫
木枯しや山から荒ぶ白い朝

寿之 澄子 アキ 森子 淳子 輝子 たけし 敬二 エミ 武男 よしお 明子 幸子 靖博 マサ けい子 もこ 加修子 光弘 ふみ 弘光 孝代 正子 隆彦 芳野 久美子

幸せは一人のできるトイレです
木の葉すし山のキツネは知りません
とび出した禁句暴れる部屋の中
ハートでは負けた勝負では勝った
恒例化進んで女だらけです
ハイハイハイ妻のご指示に逆らわず

川柳塔わかやま吟社

川上

大輪報

転ぶ度夫婦の味を深くする
ひと呼吸置けば感じる人間味
わたしは私塩も胡椒も要りません
失敗を重ねた末の人間味
古釘が黒豆の味ひきたてる
地味だけどどこか一点光ってる
ゴメンネとはさみを入れる七分咲き
絵空こと嫌う私の裁ち鉄
グーチョキパーチョキが鋭く突いてくる
長い髪カット鉄が容赦なく
裁ち鉄おんなの悩み断ち切れず
星空に今日のたどたど癒される
緞帳が静かにあがる舞台裏
風評がどたどた過ぎるワイドショー
さつきまでたどたしてた子の寝顔
鍵などは掛けたことない過疎の里
こそ泥も初心万引き味覚え
手さばきを盗んで師匠越えてゆく
泥棒の手助けしてるATM
泥棒に同情される暮らし振り

正博 篤 一慧 和子 正美 直樹 富美子 登美代 大輪 克子 小雪 よしこ 泰女 英子 夕胡 めぐみ 寿子 和香 紀久子 緑良 輝一 准一 佐一 ほのか 美子 紀子

京都塔の会

都倉

求芽報

晩秋の庵もやさしいモノトーン
すなひ郷もみじ絵巻が出迎える
水鏡世俗の顔もそのままに
母好み笹りんどうと会えました
紅葉に目だちさえずるルリビタキ
かさこそと歩幅に合わず散りもみじ
音もなく佇んでいる森の精
水鏡ゆめら素面写しだす
おでこボンたたけば頭芽えてくる
芽えすぎる人ですちよと距離をおく
芽えてない男私の夫です
芽えている間に預金使えそう
芽えたのは一瞬でした夢でした
年輪を重ねて芽えるボヤキ節
三人の意見にしてはあさはかな
自然を前にあさはかだった人の知恵
聞くだけは聞くあさはかな子の意見
親に説教今に思えばあさはかな
欲深くタダだと聞いて直ぐ並ぶ
傷つけたふと出た言葉もどせない
星はまたたいあたさはかな願ひにも
笹舟がどでかい夢を乗せている
あなた任せ舟に乗っているフリーター
船からの餌で暮している鴉
連絡船また若者を連れて行く
水郷は鳥おどかさぬ手漕ぎ舟

美義 保子 すみ子 美津子 紀子 公子 みつ子 順子 英旺 昌乃 シマ子 宏子 葉子 見清 庸佑 文代 能子 益子 宣子 大子 求芽 肇 比ろ志 欣之 福子 義子

夏子

羨みきれぬ晴れ着は桐葉簞

明日嫁ぐ娘正座で酌をする

晴れ着着てぞうりぬげてる七五三

ジーパンを晴れ着にかえて披露宴

宮参り主役ぐつすり眠ってる

晴れ着着て車のしぶき恨めしい

ウエディング着付けの前にトイレ二度

窓磨く心の曇り消すように

ちよっとだけ尻に引かれていい夫婦

木枯しが窓の花びらに散らして

何不自由ない暮しにもある不満

今年また恋の一つもせず暮れる

落葉からリズムもらって散歩する

飛んでくるヤジも非難も糧にする

力逆転母はいつしか庇われる

煩悩が揺れて逢いたい人がいる

川柳塔花の輪(大阪)

妻谷

重風報

セシウムは雨水に溶けてどこまでも

子ばかりが結びとけない深い愛

友愛が解けて列島傷だらけ

好きだからあなたの色にとけてます

とける謎とけぬ謎あり日々新た

まっすぐに丸い地球に立っている

老いの恋これが最後とまっしぐら

卒寿万歳背筋まっす赤い靴

相棒といえど根にある競争心

相棒は裏切り知らぬ影一つ

美恵子

洋一

千代子

勤

利子

淳

義博

登美子

寿郎

弘子

浩司

弘子

恵子

光久

みつ子

楓楽

相棒に花をもたせている余裕

相棒の両手が包む僕のミス

川柳塔きやらぼく鳥歌 大塚

恵子報

克衛

あれこれと買い替えをして冬仕度

水運ぶ車夜中を走りぬけ

忘れ物くらいどうって事はない

追う程に息切れしだす七十路

蜂の親子無断で我家に住みついた

祖母の技物業バック化けている

春月の詩の透き通る皮下注射

雨が降る豪雨にならぬよう祈る

秋の街淋しい話聞き流す

吾亦紅枯草の中天にむく

片足をあげても同じ体重計

西宮北口川柳会(兵庫) 小林

わこ報

記念日を遺影の夫と初搾り

意外にも飲めない人が名幹事

酔う程に「酒は涙か」亡父十八番

酒すすみ見知らぬ人と友になり

まあまあと怒りを溶かす猪口と猪口

はる酔いの月が突然欠けた

我が父は酒に吞まれて威厳増す

千鳥足の影連れてくる父の酒

神様と指切りしてからの一途

ひとすじに命を燃やす男の背

芸一途生傷絶えぬ斬られ役

薫

麗

未延子

千代

恵子

亜弥

鶴子

瑞枝

蘭

春枝

ゆき

寿々子

キヨミ

淑子

弘子

基輔

茂

求芽

伯備

比呂志

わこ

嘉代子

穀

ただ一途未来に向かう白紙地図

一途まで周りが見えず一人浮き

メールにも一途な人を住まわせる

反抗期あの日の私そのまま

虐待を荒ぶ心が弄ぶ

東北の荒野に春を待ちわびる

舌先が荒れてひりひり味音痴

荒海に放り出されて知る自分

僕だつてガラス一枚割っている

私が出ると必ず荒れる会

うつぶんを晴らす茶碗を割っている

妻の手がもう荒れている十一月

まあまあと出来に油断が滑り込む

まあまあやねあなたがじっと見てる人

まあまあと仲に入って揉めに揉め

手のひらで掴める幸で丁度よい

まあまあと暮らして今日も医者通い

まあまあとは使いがてのいい言葉

まあまあとなあなあで来たマイウェイ

挨拶は抜きで珍客招き入れ

百均の器も使いつて変わる

ふさぎこむ自分励ます独り言

古里の月が家までついて来た

飛び込んでおいでよ皆いい人よ

わかあゆ川柳会鳥根 松本はるみ報

のんびりと夫婦で歩く夢やぶれ

のんびりとした時間きたお客

敏夫

浩司

耕治

ひとみ

美津子

玲子

光子

盛夫

勝弘

忠

朋月

武彦

紀乃

章子

武臣

野鶴

哲夫

宏造

直

千代

美籠

りこ

哲男

光久

澄子

英子

隅つこでチャンス狙つているひとり
この町ものんびりできぬ放射能
不覚にも人情指からころげ落ち
七人の敵もいっしょにバス旅行
のんびりが少しきらいな足の裏
人情の厚いふるさと去りがたし
終章を飾るステップの旅つづく

岸和田川柳会大敗 米富 淳風報

つべこべと言いつつ腹を探つて
つべこべと言つては舌禍くり返し
PTAモンスターママ理屈こね
デバ地下は口ハで食われるバイキング
お座敷で酔つて秘密を口走る
胃薬を持つて出かけるバイキング
立ち上げたバスコン古希の良い玩具
頼られるつべこべ言わず動く人
あべこべの案でつべこべ掻き回す
つべこべと小さい文字で謝罪記事
威厳ある親父つべこべ言わさない
宣伝ほど効き目なかった痩せ薬
放射能禍それでも人は立ち上がる
ミシラン店宣伝なしで客が来る
杖について立ち上がるのが精一杯
バイキング胃には無断で皿に盛る
走つても走らなくても大晦日
立ち上がる若者に期す震災地
バイキング御一同様姦しい

ちよえ かつ子 はるみ 好栄 惠美子 博利 清泉 沼昭 蛙城 和美 香代 清 玄也 幸子 淳風 笑司 隆昭 武志 珠子 ダン吉 忠太 植代 英夫 伍ひろ子 仲弘子 洋

揺れて客呼ぶずばらやのフグ提灯
菌の治療済ませて臨むバイキング

川柳同友会むらい鳥歌 吉田 陽子報

親の背に照らされながら世間知る
結論を急ぐとくずれ出す積み木
あらすじを早く知りたい斜め読み
合わせ柿うまくできた娘に送る
七色の積み木で築くマイホーム
ちゃん付けで労わり合っている老後
ダイエツトしよう命が惜しいから
軌道修正できるあいだに森を出る
復興の積み木みんな重ね合う
復興の明かりが照る日見えてこぬ
積み木で遊ぶこどもの夢はこわせない
明日生きたる保証はないが種を蒔く
免疫がアツプしたよう大笑い
外見を気にして中味忘れてる
背を向けて受けければ弱い向かい風
PPP誰かが付けを回される
意識して日に一善の小石積む
病む命一日ごとく惜しくなる
喧嘩して納豆くどいほどに混ぜ
平均台すらすら歩く夢を見る
五十音覚えた積み木恩があり
正論を片目つぶつて聞いている
積み木しまつて安眠の床につく
名工を照らす我慢の日日があり

みつ江 義泰 敦子 嘉子 三郎 理子 みち子 寒之 陽子 葵 ひとり 温子 久司 美恵子 章子 ふみ子 千恵子 ひとみ 綾野 安子 華蓮 律子 和代 一眸 遊公 弘

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

釈迦の手の凹みで右往左往する
待つてます祈る思いの手術前
年の瀬にはがきが知らず大往生
言いたい事遠慮せずにと言われても
ぬいぐるみ抱くと心配される歳
忘年会帰りに心配三次会
勇気だに残りの一個食べました
待ちわびて一寸はども伸びた首
あれこれと迷った揚句元の服
先に来て目かくしされた待ち合せ
芋づるで育つた爺も肥満体
お転婆もやがて落ち着く十五歳
絵馬頼み心配よそにアルバイト
旅がえり妻は早やばや洗濯中
迷惑と言われながらも起きて待つ
十二月待つてくれないのは時間
いま出ますそれから作る出前そば
人生は待つたの効かぬ日を生きる
あらためて絆をただす師走風
お酒なら生きてるうちに供えてね
遠慮なく僧が頂く般若湯
よろしいとやんわり京で断られ
目で君を追う癖だけは治せない
待つ人の居ない一人の部屋に栖む
こころよい美酒は杜氏のたなこころ
やんわりと諭して絆強くなる

和子 泰子 洋子 幸香 菜々子 柳明 茂幸 初音 佐紀子 里江 五月 イサミ よしひさ 奮水 あかり 靖鬼 祐康 野鷲 美也子 正和 朋月 純 かつお キヨミ 俣哲夫 りこ

御免やつしやと遠慮のないお尻
皇紀二千七百年はわたし百

耕治
男

待つていたチャンスに交替告げられる
喪のハガキ枯葉のように来る便り

肇
子

人並の暮しのなかにある至福
川柳藤井寺大坂

光久
美代子
いさお
扶美代
雄太
悦子
清之
みよ子
恵美子
弥生
シルク
彦弘
昌子
あかり
ヨシ枝
婦美枝
六子
瑠美子
龍一
絹枝
ちづる
雅枝
榮

悩むまいやがて時間が解きほぐす
やんわりと愚痴を吸いとお婆ちゃん
すこしずつ私の色を出していく
傷心をやんわり包む思いやり

見清
ひとみ
美籠

出番待つ胎児が思案する師走
一枚の賀状がつかぬ縁かな
消えそうな愛をつないでいる絆
そつとそつとそつとして老いの恋
びつたりとガラスの靴に合いました
冤罪は晴れても消えぬ胸の傷
気配消し窓辺の雀あそばせる
飛び切りの写真一枚だけ残す
最高と最悪の差は神の意志
手袋のままでさよならなんて嫌
最後まで持つて行きますあの秘密
年なりに伸び縮みする羞恥心
華やかな出番来ぬまま黄昏る
月光が冴えて邪心をあぶり出す
踊りながらついて来ている影法師
老い二人互いの趣味の解放区
頻繁な出番に卵すく切れる
最初はグーおしきせ嫌なはぐれ雲
点滴の父に最後の絆刺している
吹き溜まりの枯葉に名刺浮いている
人生で最もつらいわが子の死
鶴千羽折ろうと神は現われぬ
煩惱が消えると信じ鐘をつく
いい報せ挨拶抜きで上がり込み

堅坊
佐和子
志津子
雀舎
幹治
きらり
歌留多
佳恵
行兵衛
健二
菜々子
満子
則彦
美智代
見清
葉子
玲子
求芽
すみ子
美義
千枝子
寿美子
幸雀
巴子
千代

種撒いてわくわく春の陽差し待つ
わくわくの種を老後にとつてある
大人でもわくわくしてもいいですか
わくわくが続く師走の宝くじ
わくわくと恋文出して今日がある
宝くじ当りわくわく夢の中
わくわくと心と香り残す人
恐ろしや妻に弁解など出来ぬ
新市長時代を変えざる感ずる
言い分を子には言えない年となる
しゃかりきに言い分通す針の穴
言い分はあるが素直に印を押す
父母の言い分聞いた事がない
言い分はどっちにもあるゴツンコ
箸置きが君の言い分待つてい
なき母の椅子の窪みがまだ温い
ハネムーン余韻紐解きフルムーン
ベーターベン余韻を乗せてニューイヤ
逢つて来た余韻に胸がまだ騒ぐ
梵鐘の余韻とあるく奈良の道
初雪に余韻も凍るしし威し
みせかけの収束帰るメロ立たず
九ちゃんの歌の余韻に震災地

光久
美代子
いさお
扶美代
雄太
悦子
清之
みよ子
恵美子
弥生
シルク
彦弘
昌子
あかり
ヨシ枝
婦美枝
六子
瑠美子
龍一
絹枝
ちづる
雅枝
榮

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

ずぶ濡れになって女の恋ブーツ
ちちははのブーツの底がチビている
昔からオレのブーツは長靴だ
大和魂人生もあとわずか
樹の下で弟子を口説いたお釈迦さま
大樹の下でいつも黙っている地藏
讚美歌が染みる傷だらけの大樹
大樹の下で大きな欠伸しています
菩提樹の下で開いた悟り継ぐ
果樹ばかりロマンの質はわたし流
寄りかかる大樹危うい風が吹く
風雪に耐えて大樹は天を指す
フクロウの森に私の樹を植える
一年が去るよパノラマよく廻る
ぜひ言おうこの世去る時ありがとう
私を残して人も金も去り
去る人を呼びとめはせぬ幸せに
実も葎もないひとを投げて去り

清帆
一粋
昭弘
蟹郎
はるお
忠良
一瑤
節子
幸安
たぬ
菖子
小鹿
孝男
圭一郎
一京
和子
美恵子
則彦報
庸佑

千代

千代

千代

千代

ババ好き幼い声が耳に在る
コーラスの余韻に浸る十二月
イブモンタンの乗つて残りの葉が踊る

登志子
喜代子
みつこ

川柳さんだ兵庫

堀

正和報

ネクタイを結ぶと戦士の顔になる

忠

たまねぎのミジン切りなら負けません

章子

反省の素振りも見せぬ反抗期

好文

変り身の早い人ほどする出世

光久

来年の約束なんて守れない

朋月

結び札秋には赤い実をつけた

哲夫

自販機に万札入れる不安感

聖也

元氣印ラジオ体操早い朝

雅司

古希過ぎてあなと呼べばうるさいと

晃

そうですかそれなりですか朝鏡

武彦

来年は龍の背中にしがみつく

輝美

顔に出て心の内がバレました

裕美

もう少し優しく介護しておけば

祐康

引き出しにそつと隠した自己主張

茂山

青い恋ポニーテールがゆれている

ひとみ

アナウンサー貴方も一緒ふけている

一泉

心からうれしい顔になる握手

菜々子

木枯しも日向ほこでも好きな柿

順子

しあわせ度ブータン夫妻に教わる

淑子

反省は昼寝の猫に八つあたり

ちあき

趣味増やす妻の賀状が場所をとる

宣子

運命をあたためながら芽吹く春

一子

来る年を始発にしたい年おんな

キヨミ

生命線目慢していた友が近く
赤ちゃんが笑つただけで皆笑顔

いずも川柳会島根

佐藤

治代報

失言の穴がだんだん深くなり

房緒

この一年だんだん父のいい笑顔

煩悩児

折にふれメールが届く蟹の穴

佳子

大あくびして人間の顔になる

桂子

十一月慌てもしない猫のひげ

浜丘

無農薬うちのキャベツは穴だらけ

志ける

障子穴ふさぐサクラの花模様

美千代

顔じゃないいいえやつぱり顔ですよ

夢生

顔つきが変わつた決意見えてきた

敬子

陽が昇る今日は穴から出られそう

ちえ

意にそわぬ顔が時々先走る

美江子

親に似た顔がコロコロよく笑う

たえこ

仮面とつても素顔見せないビエロ

久枝

ボタン穴違えて平気父元氣

左余

大根が涼しい顔でぶら下がる

シゲ子

針の穴まだ通されて有りがたい

英子

雪溶けるみんな出てこい風の子よ

健柳

憧れの瞳は声も澄んでいる

喜子

見えすいた嘘を笑顔で聞いてやる

孝亮

憧れの樹に寄り添うと笑みが出る

徳子

ボタンの穴くぐり希望の列に入る

裕次

人生の落し穴から這い上がる

幸子

大穴を抜けて人間らしくなる

弘子

清流を泳ぎたかった雑魚でした

あきら

正和
哲男

カギ裂けの穴からのぞく冬の風
どの顔ももう新年にむいている

治代
多喜

あの日からほつかり開いたままの穴
懇ろに母が溶かしたわだかまり

歌子
玲子

松茸の穴場誰にも教えない
穴あいた財布どうにも埋まらない

きみえ
寿美

私の穴はとくに売っていた
色々な顔に出会って強くなる

茂美
蘭水

ひざまずくまでの大きな穴である
深く掘りすぎ穴から出られない

章峰
文子

もう親の責任はない顔となる

ちかし

米子住吉川柳会鳥取 渡辺多美子報

清張と一緒に謎をとく明かす

宏之

介護ホーム押すな押すなの予約待ち

正二

秋色のけやき通りを走り抜け

札子

つるし柿冷たい風に玉のれん

多美子

香典の催促めいた計の知らせ

公一

晩秋の雲の流れも肌寒く

登美枝

高カロリー高蛋白の夜は愉快

紀の治

港町海のタイヤで沸く活気

すみえ

同居して小さな森が軋みだす

未延子

川柳ねやがわ大阪 籠島 恵子報

点滴が苦しみ溶かす白い朝

郁夫

封をあけた読み返すラブレター

美江

おしゃべりの口に貼りたいガムテープ

仁清

軽自動車増える団地の高齢化

さち子

フリー宣言風の糸切り飛び出す子
どん底の苦しみバネに立ち上がる
少年の苦悩へ浮輪投げてやる

封印をして苦しみはあの世まで
苦しまずすてきな別れ出来ました
人生の二次会大地との対話

目覚めれば皆無の現実が迫る
平均寿命越した時から余生です
わたくしを封印してる小拙出し

六十余年まだトラウマの老兵士
遺言書封印をして預けとく
趣味一つ持って余生をのんびりと

二次会へ出たあたりから記憶ない
封印の噂くるくる舞い戻り
今フリー縛られたいと淡い気も

二次会に来てはほしくない人もいる
あ不便フリーのはずの妻の留守
封印に約束がある遺言書

バリアフリー街はやさしい顔になる
二次会の時だけ担がれる
苦しんだ分だけ強くなっている

柳塔さかい天阪

村上

玄也報

日本の底辺担ぐパートさん
過労死をしそうと肝臓が嘆く
老いてなお半端な欲を持て余す
基準法超えて働く胃に感謝
人のため働く犬を笑う猫

麗風

一洋

ルイ子

忠央

朝子

賢子

弘一

かすみ

鈍甲

三郎

薫

とし子

美智子

勝弘

弘風

柳弘

仁

博泉

恵子

としお

唯教

敏治

健吾

煙に汗どっさり落とし貰う幸
三角波それでも父は沖へ出る
半端出るはず無い葉残ってる

割り勘の半端の処理で酔い醒める
半端でない沖繩県民の怒り
朝めしか昼か半端な妻の留守

できれば参加と幹事を困らせる
凄かった大地が裂けた沈下した
目を閉じて待つていたのに握手だけ

半端もんじゃないつかつかを指摘して
そこそこのバカで済まぬ御曹子
飲みっぷり半端ではない振られ方

割り勘のはしたを入れる募金箱
主夫業と職業欄に小さく書く
スタイルがだんだんとドに近くなり

二階級特進哀れ殉職者
スニーカーで団地を回る聴診器
余り市掘り出しものへ目を皿に

なまはんか学があるから職がない
すれすれを蛇行しながら待つチャンス
うたた寝の中途半端にある至福

百歳の親に続けと野良仕事
済んだことだらけだらとちさい腹
半端もめみたい便利に誘われる

スマートにだす義捐金血が通い
大抵は半端のままで生きている
そこそこの暮し秋刀魚を焼いている

そこそこは底なしの飲兵衛だった

冬虹

ばつは

澄空

山彦

八千代

像山

みつこ

進

時雄

天笑

世紀子

誠一

明子

清晋

扶美代

玄也

雅明

のん子

寂子

かりん

好

舞夢

月子

半銭

公誠

篤子

さくら

千代

偲ぶ酒中途半端に酔っている
半端ではない芸術のような皺

大山滝句座鳥取

新家

完司報

見えぬから人の心がよく変わる
男連オレで試してみませんか
いらいを眉根に溜めて待つ患者

後もとりできぬところに座っている
除染した水の最後が気にかかる
争いの原因腹が減っていた

借金も遺産もない娘等よ
天皇は男がよいと思わない
家族田満のカギ母さんが握っている

商魂に振り回されてクリスマス
担がれて出た先生が刑務所へ
日の当たる南の部屋で痴話げんか

ケータイは一人暮らしの守り神
ガイドさん知っている事よく喋る
ひよつとことおかめで丸い輪が出来る

担がれて急に足腰弱くなる
縁がきつ出雲大社へ初詣
天高く届かぬ柿は鳥の餌

戦争を語る男の白い眉
ボケ防止松ぼっくりのアート展
くやしいが瀬戸内側は今日も晴れ

かついいいヒーローであれ男の子
夢のある暮らし欲しくて汗をかく
男性のシンボルただのシンボルに

朋月
日の出

芳光

芳山

玲子

蟹

照彦

やえ

鬼一

忠良

美恵子

紀の治

蟹

石花菜

久絵

美

千

麦

恒子

久子

重忠

鈴野

正

すみゑ

仁美

完司

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸和田 川柳会	18日(土) 13時30分締切 気まぐれ・偲ぶ・べったり モチーフ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳 ねやがわ	19日(日) 14時締切 挨拶・支援・判定・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	19日(日) 14時締切 編む・月・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	19日(日) 14時締切 従う・ジョーク・責任	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	20日(月) 13時40分締切 つくる・はがき・むしろ 自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	21日(火) 13時開場 フグ・小銭・数える・ちぐはぐ 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳クラブ わたの花	24日(金) 9時開場 梅・雀・椅子・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳塔 すみよし	25日(土) 13時開場 石頭・隠れる・しっかり	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
和歌山 三幸会 川柳	25日(土) 12時30分開場 糸・したたか・ふるさと	ニュース和歌山編集部 (和歌山三幸川柳会) 和歌山商工会議所 4階 第2会議室
はびきの 市川柳 民会	26日(日) 14時締切 出席・棚・ピンク・紙	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうも 吟社	26日(日) 13時開場 老後・ミスマッチ・はじめ	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
京都 塔の会	26日(日) 12時開場 40周年記念句会 龍・願・祖・清・坂・妙	ハートピア京都3階大会議室 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
南大阪 川柳会	27日(月) 18時開場 ボランティア・不味い 媚びる・炒める	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露 川柳会	27日(月) 19時30分締切 夢・無理・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木) 13時開場 戸惑う・袋・包囲	奈良市立中部公民館 4 F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩 5 分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城 北 川 柳 会	4 日(土) 13時開場 本番・なるほど・栄養・自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	4 日(土) 14 時締切 紅・もっと・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉 吉 川 柳 会	4 日(土) 14時締切 やり返す・赤飯・絡む	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 さ か い	10日(土) 13時より 頼る・恵み・折句(マニラ)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき 川 柳 会	10日(金) 14時締切 暖か・油・足許・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	11日(土) 14時締切 まっすぐ・嘘・平凡	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 ま つ え	11日(土) 13時45分締切 顔・くすぐる・言う・ざわざわ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川 柳 塔 打 吹	11日(土) 13時締切 厳・草・開ける	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637—3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	12日(日) 13時30分締切 才能・天・押す・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3 F 近鉄八尾駅西口徒歩 5 分 〒581-0831 八尾市山本町北5—9—3 土谷耀一
川 柳 塔 わかやま 吟 社	12日(日) 13時開場 湯・運ぶ・内視鏡・課題吟(谷)	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 堺市浜寺諏訪森町東2-208-5 桑原道夫
西宮北口 川 柳 会	13日(月) 13時45分締切 寝言・守る・こりこり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにのみや4F 〒662-0062 西宮市木津山町3—15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 タイプ・内気・なるべく 自由吟	尼崎女性センター テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川 柳 同 好 会	14日(火) 13時30分締切 粋・囁む・まるで	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2—4—1 水野黒児
川 柳 塔 みちのく	18日(土) 17時締切 意見・いきいき・息抜き	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53—1 小寺花峯

柳界展望

★第63回大阪川柳大会（平成23年11月25日開催）同人秀句（記載漏れ分）
大阪市長賞
天災のたびに命を考える

堀 正和
★第30回鳥取県没句川柳供養大会は、平成23年12月18日新日本海新聞本社ビルで開催。出席者103名、欠席投句92名、計195名、同人秀句へその緒が切れて正体現れる 高田 振作
悪人が善いことをするリ
ハハサル 土橋 螢
償いに鶴は必ずやつて来る 倉益 一瑤
寒空を見上げ過ぎたか認知症 池 森子
月の前でヘビがカエルを飲み込んだ 前田 楓花
総合成績ベスト3
1位 倉益 一瑤
2位 藤原 鬼桜
3位 池 森子

★川柳塔さかい秋の誌上川

柳大会には175名の参加があり、同人の天位は次の通り。
昭和一桁我慢することならでける 山本希久子
百歳の詩に百歳の味がある 奥 時雄
おふくろの味へ男の漂流記 徳山みつこ
使わないうちに朽ち果てた翼 高瀬 霜石
☆倉益一瑤さん（同人・鳥取市）は故武田帆雀氏に代わり、朝日新聞鳥取柳壇の選者を担当。
☆木本朱夏さん（副理事長・和歌山市）は川柳ずずか216号に「瓶の蓋から生まれるミニ小説」を発表。

▼計 報
●桜井千秀さん（元同人・和歌山市）平成23年11月17日、心不全にて逝去。享年88歳。
▽催 し△
○木津川計氏は4月14日（土）芦屋市ルナホールで2時から「語る落語」を初演。問い合わせ先は主催者の芦屋市立公民館 電話079 7・35・0706

▽図書寄贈△
○「アート川柳への誘い」田口麦彦著・飯塚書店 一五〇〇円＋税
▽お詫びして訂正△
▼1月号P55下段21行目、されられる↓させられる。P55下段20行目、風邪を↓風を。P88中段12行目、西川無限↓両川。P109下段6行目、にりました↓なりました。P123上段28行目、ひとりの米↓ひとり米。P123中段12行目、耀一↓耀一。表3、夜市川柳欄、鈴木公博↓公弘。

▽新誌友紹介△
岡山市 藤成 操江
紹介者 工藤千代子
松原市 大嶋 信次
紹介者 中村 道夫
倉吉市 牧野 芳光
紹介者 宮津市 梅本 瑞代
紹介者 山本希久子
豊中市 西村 康子
紹介者 水野 黒兎
東大阪市 斎藤 隆男
紹介者 富山ルイ子
岡山市 永見 心咲
紹介者 工藤千代子

奈良県 野口 秀典 紹介者 大内 朝子
紹介者 村上 玄也 常任理事会11月6日（金）
篠山市 佐々木 勇 ①各地句会代表者・役員拡
紹介者 遠山 可住 大会議②第18回川柳塔まつり
大坂市 立蔵 信子 りの兼題と選者の選定③定例
紹介者 新家 完司 確認事項④各部報告⑤その他

お知らせ

○勉強会、句会等でバックナンバードご入用の場合、事務局へお申込み下さい。但し号数の指定はできません。また送料は負担願います。

全日本川柳鳥取大会記念
第12回 春はくろぼこ川柳大会

と き 4月1日(日) 午前10時開場
ところ 鳥取市さざんか会館(Tel.0857-29-7151)
JR山陰線「鳥取駅」下車 南出口徒歩3分
題 欠席投句 3月20日消印有効
各題2句まで 当日締切 午前11時15分
「星」 高 浜 勇 選
「花」 川 本 畔 選
「耳」 森 口 美 羽 選
「岩」 古今堂 蕉 子 選
「軸」 立 蔵 信 子 選
「土」 小 島 蘭 幸 選
「愛」 天 根 夢 草 選
事前投句「風」 河 内 天 笑 選
(2月15日必着締切)

会 費 3000円(昼食・掲載誌呈)
欠席投句料 1000円(郵便小為替・掲載誌呈)
交流会 と き 3月31日(土) 午後6時より
ところ 鳥取ワシントンホテルプラザ
会 費 7000円
問い合わせ 〒689-0343鳥取市気高町飯里84-4
鈴木 公弘 Tel.0857-84-2886
主 催 川柳同友会・くろぼこ川柳会

第16回 川柳展望全国大会

日 時 4月22日(日) 10時30分開場
場 所 ホテルアウイーナ大阪(Tel.06-6772-1441)
大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12
参加費 1500円

題と選者 (各題2句 締切 12時)
席 題 「 」 佐々木 裕 選
宿 題 「 畏 」 田 鎖 晴 天 選
「 隣 」 吉 崎 柳 歩 選
「 札 」 村 田 絹 子 選
「 札 」 鈴 木 公 弘 選
「 眠る 」 新 家 完 司 選
自由吟 小 野 真備雄 選
自由吟 森 中 恵美子 選
自由吟 河 内 天 笑 選
自由吟 天 根 夢 草 選

懇親宴 6000円(事前に事務局まで申し込んで下さい)
事務局 〒567-0009
茨木市山手台4-6-3-101
Tel.072-649-5226

主 催 川柳展望社

2012ふあうすと川柳大会
平成23年 年間賞発表

日 時 4月8日(日) 午前11時開場
場 所 兵庫県民会館 9Fホール
Tel.078-321-2131
神戸市中央区下山手通4-16-3
JR元町・阪神元町駅より北へ徒歩7分

宿 題 (各題2句 締切 12時)
「学 ぶ」 長 島 敏 子 選
「センサー」 西 川 けんじ 選
「花」 長 浜 美 籠 選
「未 来」 長谷川 酔 月 選
「酔 う」 田 頭 良 子 選
「時」 平 山 繁 夫 選
「自由吟」 赤 井 花 城 選

席題なし・欠席投句拝辞
会 費 2000円(記念品・発表誌呈)
懇親会 5000円(当日受付、80名まで)
主 催 ふあうすと川柳社

和歌山県川柳協会発足20周年記念
全国誌上川柳大会

○題と選者 各題 2句
「川」 森中恵美子・小島 蘭幸
「つなぐ」 村上 氷筆・新家 完司
「リズム」 佐藤 美文・梅崎 流青
「古道」 三宅 保州 謝選

○投 句 料 1000円
○投句締切 5月31日(木) 必着
○投 句 先 〒642-0011
和歌山県海南市黒江1-341
三宅保州 あて
TEL/FAX (073)482-5098

問い合わせ・連絡先
〒640-8111 和歌山市新通7-17
古久保和子
TEL/FAX (073)423-8930

主 催 和歌山県川柳協会

編集後記

★二月盡いのち盡へと続く
なり 薫風

★昨年12月、織田正吉氏より本誌の引用間違いについて、ご丁寧なお葉書を頂きました。ブルーブラックのインクが匂いたつようなペンの運びに、薫風先生もそうだった：と懐かしく思い出した。それにしても織田氏が本誌にお目を通して下さっていることに感激するとともに、改めて誤字、脱字、誤植のないよう心せねば：と、反省することしきり。

★木津川先生の「川柳塔の讃歌」も86回を数える。先生は大学をお辞めになられてから、かねて念願の「一人語り劇場」を立ち上げ、「王将」「暎の母」「無法松の一生」「父帰る」その他：二トロを懐に2時間を一人

で語られる。そのために早朝5時から暗記をされるとか：。講演、執筆、「上方芸能」の編集と超々多忙の中、本誌に目を通される。人生を川柳から教わったとおしやる先生の鑑賞眼は、時に厳父、時に慈父のまなざしで論されるようだ。

★温故知新欄は川柳雑誌・川柳塔の先達の句集を取り上げていたが、時代の香りを感ずる作品も多い。菊澤小松園といえは「年上の女とくぐるてつちり屋」が口をついて出る。楽しませて頂いたが、残念ながら前号で終り、今号から「清水白柳遺句集」に替わる。白柳師の職業は宮大工で職人の手触り、木の匂いのする作品が多い。しみじみと鑑賞したい。

★「誹風柳多留」一篇研究の清博美先生は、古川柳の世界ではその人ありと謳われる碩学。毎号対談形式の誌面からは、時に江戸庶民の喜怒哀楽のドラマが読み取れる。新しく連載が始まった「本所深川を歩く」は古地図を片手に散策する楽しさが：。さあ、江戸の面影を求めてタイムトリップしましょう。

★第一回春の川柳塔まつり誌上大会の締切は2月20日。ご応募をお忘れなく。(朱)

ひとこと

『椿守』を読みながら

生家の裏山から続く小さな谷が畑の隅にあり、側に一本の藪椿があった。その藪椿に塩やお神酒を供えるのが祖母の日課であった。

藪椿の光沢のある葉と、赤い花が夕陽に一段と輝いていたことが今も、脳裏にある。

もう今は、世代交代と生活の様式も変わり、裏の畑は増築によつ

て消えてしまった。椿も切り倒されて、かろうじて隣との境界の石垣だけが、記憶の中のふるりと一致するだけである。

あの頃、祖母はあの藪椿に何を祈っていたのだろうか。

『句集椿守』（八木千代著）の表紙は純白、見返しは藪椿の赤。

椿守 死なぬかぎりは椿守

千代

(古久保和子)

る碩学。毎号対談形式の誌面からは、時に江戸庶民の喜怒哀楽のドラマが読み取れる。新しく連載が始まった「本所深川を歩く」は古地図を片手に散策する楽しさが：。さあ、江戸の面影を求めてタイムトリップしましょう。

及んだ。

○三ヶ月に一度編集後記の担当が回ってくる。考えた末、大好きな忠臣蔵の川柳を調べて見ようと思いついた。参考文献は阿部達二著「江戸川柳で読む忠臣蔵」川島満男著「江戸川柳で読む日本の歴史」加藤廣著「謎手本忠臣蔵」などである。

鮎の例えに鯉口を抜きはなし (柳多留五十)

「江戸川柳で読む忠臣蔵」から様々な嫌がらせを受けており、当日も「鮎じゃ、鮎じゃ、鮎侍じゃ」と恥辱をうけ「此の間の遺恨覚えたるか」と叫び「小さ刀」で斬りつけた。忠臣蔵のスタートである。

匠頭が吉良上野介に刃傷に

ご応募をお忘れなく。(朱)

(末)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(4月号)地名

都道府県
市町村
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

紙 用 句 投 抄 様 檸

「人 柄」 (2月15日締切)

4月号発表

池 森子 選 — 共選 — 福士 慕情 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓
雅
号

地名

市都
県道府

姓
雅
号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

4月号発表(2月15日締切)

川柳塔(8句)
水煙抄(8句)
愛染帖(3句)
檸檬抄(2句)
一路集(3句)
初歩教室「摺む」(3句)

小島蘭幸選
川上大輪選
新家完司選
福士慕情共選
池森子選
吉岡修選
坂本蜂朗選
田中みね選
鈴木弘担当

5月号
檸檬抄「ざわめく」
一路集「築く」「燕」
「いきなり」
初歩教室「形」

本社2月句会

とき 2月7日(火) 13時開場・14時締切
―開場時間、締切時間を変更しています。―注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ケ辻町19-12 電06・6772・1441
おはなし 「川柳を語ろう」
兼題 「厄」
「つもり」
「都合」
「物好き」
「詰る」
松岡恭子氏
岩崎公誠選
山田葉子選
加田由一選
太田昭選
奥田みつ子選
小島蘭幸選
会費 1000円
投句料 500円(切手可)
(各題2句以内)

本社3月句会

7日(水) 午後1時から
兼題 「梓」「タッチ」「半分」
「寄せ書き」「塞ぐ」

第30年度 夜市川柳募集

第9回「たわごと」 古久保和子 選
ハガキに3句 2月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

〒543-0052

定価 八百円(送料84円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)
二〇一二年(平成二十四年)二月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
大阪市天王寺区大道一丁目一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
電話 〇六・六七九・三四九〇番
振替 〇〇九八〇・四二九八四七九番

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの

つぎま



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。
オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>